館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第31集

八　方　遺　跡

HA CHI GA TA

1998

館林市教育委員会

八　方　遺　跡

HA CHI GA TA

1998

館林市教育委員会

八方遺跡J地点　調査区全景

八方遺跡J地点
円形有段遺構遺物出土状態

八方遺跡D地点
11号住居址貯蔵穴遺物出土状態

序

八方（はちがた）遺跡は館林市街地の北部の台地上に位置します。

現在、本市には144か所の埋蔵文化財包蔵地があり、毎年、開発に伴う事前の発掘調査がおこなわれておりますが、特に市街地に面した八方遺跡は、倉庫や住宅等の建設が大規模に進められ、昭和56年度以降これまで10地点での発掘調査が実施されてまいりました。

これまでの調査で、八方遺跡からは古墳時代の竪穴住居が15軒ほど確認され、当時の集落形態を予想させる様々な遺構が確認されています。

本報告書は、その中から昭和60年度に実施したD・F地点、平成8年度に実施したJ地点の3地点の調査結果をまとめました。このうち、古墳時代の竪穴住居がD地点では8軒、F地点では1軒、J地点では2軒確認され、さらにJ地点で発見された大型の円形有段遺構からは古墳時代の土器類が多く出土し、当時のムラの共同施設的な性格を持つ遺構として注目されています。

また、その他にも八方遺跡からは中世の遺物を伴う溝や堀などが確認され、古代から中世にかけて私たちの祖先の生活の舞台が、「八方」の地で連綿と続いていたことが予想されます。

ここに、ようやく調査報告書としてまとめることができましたが、本報告書が、私たち館林市の歴史を知る基礎資料として、また地域文化の再発見に役立てていただけることを願うとともに、発掘調査および報告書作成にあたり多大なるご指導、ご協力をいただいた各方面の皆様に感謝申しあげ、序といたします。

平成10年3月31日

館林市教育委員会

教育長　高　瀬　利　一

例　　言

1. 本報告書は、昭和60年度に発掘調査を実施した八方遺跡D・F地点、ならびに平成8年度に発掘調査を実施した八方遺跡J地点の調査結果をまとめたものである。
2. 発掘調査地の該当地番は以下のとおりである。

　D地点　館林市坂下町字八形3241番地

　F地点　館林市岡野町字八方23番地の1

　J地点　館林市岡野町字八方27番地の1

3. D・F地点は共同住宅建設に伴うもので、J地点は住宅団地建設に伴うものである。
4. 調査ならびに遺物整理は館林市教育委員会が主体となり実施したもので、その組織は次のとおりである。

〈D・F地点〉（調査・遺物整理年度　昭和60年度）

主管課	文化振興課
調査担当者	文化財係　学芸員　岡屋英治
	同　調査補助員　藤坂和延（現大胡町教育委員会）
発掘参加者	新井清松　飯島富子　飯塚猪之助　石井ソノ　石川栄吉
	小倉　武　小曽根靖子　恩田英男　菊池新作　越谷長男
	小島早苗　坂村ヨツ　長沢作次　中島静江　中村幸子
	葭葉たか　葭葉嘉亮
遺物整理	藤坂和延

〈J地点〉（調査・遺物整理年度　平成7年～平成9年度）

教育長	高瀬利一
教育次長	関口久男
主管課	文化振興課
文化振興課長	田沼俊彦（平成9年3月まで）　今井敏（平成9年4月より）
文化財係長	石井正和
主査	新井直次
学芸員	岡屋英治　岡屋紀子（担当）　黒澤文隆　阿部弥生　原　幸恵
調査補助員	寺内景子
発掘参加者	麻生尚子　石井悦雄　石川栄吉　荻野貴子　川島範子
	小林浩子　坂田岩吉　砂場一寿　高瀬　広　渡辺かつ
遺物整理・報告書作成	

寺内景子　長棟紀子　根岸良子　荻野貴子　川島範子

岸　貴子

5. 報告書の編集ならびに執筆は岡屋紀子が担当した。

6. 発掘調査に係る図面・写真等の記録類、出土遺物、および関係書類等は館林市教育委員会で保管している。

7. 発掘調査および報告書作成にあたり、下記の方々、諸機関にご指導・ご協力をいただきました。厚く感謝申しあげます。（順不同・敬称略）

小島敦子　中山　晋

群馬県教育委員会　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

凡　　例

1. 挿図に、建設省国土地理院発行の1／5万地形図（古河）、ならびに館林市役所都市計画課発行の1／2500都市計画図を使用した。

2. 本書における遺構番号は、発掘調査時に付したものを使用し、D・F地点はA地点からの通し番号を付し、J地点では新たに遺構番号を付し直した。

3. 本書で使用した遺物番号は遺構ならびに項目別に整理し、新たに付したものである。

4. 本書で使用した図版のうち、遺構と遺物の縮尺はほぼ次のとおりである。

遺 構 … 1／60

遺 物 … 土器類　1／4（破片の一部は1／3）

石器類　1／2・1／3・1／4

古銭　3／4または1／2

5. 本書で使用した図版のうち、遺構内で出土した遺物は、主な遺物を除き、土器を●、石器を▲、鉄製品等それ以外のものを△で表示した。

目　　次

口絵
序
例言
凡例

第Ⅰ章　八方遺跡の立地と環境……1
　1.　立地……1
　2.　周辺の遺跡……2
　3.　これまでの八方遺跡の調査……4
第Ⅱ章　D地点の調査……7
　1.　調査の概要……7
　2.　検出された遺構と遺物……11
　　(1) 住居址
　　(2) 特殊遺構
　　(3) 溝状遺構
　　(4) 不明遺構
　　(5) 遺構外出土遺物
　　(6) 石器・その他の遺物
　写真……43
第Ⅲ章　F地点の調査……53
　1.　調査の概要……53
　2.　検出された遺構と遺物……55
　　(1) 住居址
　　(2) 井戸址
　　(3) 遺構外出土遺物
　　(4) 石器・その他の遺物
　写真……63
第Ⅳ章　J地点の調査……67
　1.　調査の概要……67
　2.　検出された遺構と遺物……71
　　(1) 住居址
　　(2) 円形有段遺構
　　(3) 土坑
　　(4) 溝状遺構
　　(5) 遺構外出土遺物
　　(6) 石器・その他の遺物
　写真……100
第Ⅴ章　まとめ……113

参考文献
報告書抄録

図　版　目　次

第 1 図　館林市の地形と八方遺跡位置図‥1
第 2 図　周辺の遺跡分布図……3
第 3 図　八方遺跡全体図（A～J地点）……5
第 4 図　D地点位置図 ……7
第 5 図　D地点グリッド設定図……8
第 6 図　D地点遺構配置図 ……9
第 7 図　6号住居址遺構図……11
第 8 図　7号住居址遺構図……13
第 9 図　7号住居址出土遺物……14
第10図　8号住居址遺構図 ……15
第11図　8号住居址出土遺物 ……17
第12図　9号住居址遺構図 ……18
第13図　9号住居址出土遺物 ……19
第14図　10号住居址遺構図 ……20
第15図　10号住居址出土遺物 ……21
第16図　11号住居址遺構図 ……22
第17図　11号住居址出土遺物(1)……23
第18図　11号住居址出土遺物(2)……24
第19図　12号住居址遺構図 ……24
第20図　12号住居址出土遺物 ……26
第21図　1号特殊遺構遺構図……27
第22図　1号特殊遺構出土遺物……28
第23図　2号溝遺構図 ……30
第24図　3号溝遺構図 ……31
第25図　4号溝遺構図 ……32
第26図　溝状遺構出土遺物 ……32
第27図　1号不明遺構遺構図……33
第28図　2号不明遺構遺構図……34
第29図　不明遺構出土遺物(1)……35
第30図　不明遺構出土遺物(2)……36
第31図　遺構外出土遺物(1)……38
第32図　遺構外出土遺物(2)……39
第33図　石器・その他の遺物(1)……40
第34図　石器・その他の遺物(2)……41
第35図　石器・その他の遺物(3)……42
第36図　石器・その他の遺物(4)……42
第37図　F地点位置図……53
第38図　F地点調査区全体図
および遺構配置図……54
第39図　13号住居址遺構図 ……55
第40図　13号住居址出土遺物 ……56
第41図　4～6号井戸址遺構図 ……57
第42図　4～6号井戸址出土遺物 ……58
第43図　遺構外出土遺物 ……60
第44図　石器・その他の遺物(1)……61
第45図　石器・その他の遺物(2)……62
第46図　J地点位置図……67
第47図　J地点調査区全体図 ……68
第48図　J地点拡張区遺構配置図 ……69
第49図　1号住居址遺構図 ……73
第50図　1号住居址出土遺物(1) ……75
第51図　1号住居址出土遺物(2) ……76
第52図　2号住居址遺構図 ……77
第53図　2号住居址出土遺物 ……80
第54図　円形有段遺構遺構図 ……81
第55図　円形有段遺構遺物出土状態図…82
第56図　円形有段遺構出土遺物(1)……84
第57図　円形有段遺構出土遺物(2)……85
第58図　円形有段遺構出土遺物(3)……86
第59図　2～5号土坑遺構図 ……88
第60図　土坑出土遺物 ……90
第61図　1号溝遺構図 ……92
第62図　1号溝出土遺物(1)……93
第63図　1号溝出土遺物(2)……94
第64図　1号溝出土遺物(3)……95
第65図　遺構外出土遺物 ……96
第66図　石器・その他の遺物(1)……97
第67図　石器・その他の遺物(2)……98
第68図　石器・その他の遺物(3)……99
第69図　八方遺跡検出遺構全体配置図‥115

写　真　目　次

八方遺跡Ｊ地点　調査区全景……口絵
八方遺跡Ｊ地点　円形有段遺構遺物出土状態……口絵
八方遺跡Ｄ地点　11号住居址貯蔵穴遺物出土状態……口絵

写真１　Ｄ地点調査区全景……43
写真２　Ｄ地点調査風景(1)……43
写真３　Ｄ地点調査風景(2)……43
写真４　６号住居址完掘状態……44
写真５　７号住居址土層断面……44
写真６　７号住居址カマド検出状態……44
写真７　７号住居址遺物出土状態(1)……44
写真８　７号住居址遺物出土状態(2)……44
写真９　７号住居址遺物出土状態(3)……44
写真10　６・７・８号住居址完掘状態……45
写真11　９号住居址完掘状態……45
写真12　10号住居址遺物出土状態……45
写真13　10号住居址完掘状態……45
写真14　11号住居址貯蔵穴遺物出土状態　45
写真15　11号住居址完掘状態……45
写真16　12号住居址遺物出土状態(1)……46
写真17　12号住居址遺物出土状態(2)……46
写真18　12号住居址カマド検出状態……46
写真19　12号住居址完掘状態……46
写真20　１号特殊遺構土層断面……46
写真21　１号特殊遺構完掘状態……46
写真22　３号溝土層断面……47
写真23　２・３・４号溝完掘状態……47
写真24　３号溝完掘状態……47
写真25　１号不明遺構遺物出土状態……47
写真26　２号不明遺構遺物出土状態……47
写真27～31　７号住居址出土遺物……48
写真32　８号住居址出土遺物……48
写真33～38　９号住居址出土遺物……48
写真39～42　10号住居址出土遺物……49
写真43～48　11号住居址出土遺物……49
写真49～55　12号住居址出土遺物……49
写真56・57　１号特殊遺構出土遺物……50
写真58　溝状遺構出土遺物……50
写真59～63　不明遺構出土遺物……50
写真64～68　遺構外出土遺物……51
写真69～72　石器・その他の遺物……52
写真73　Ｆ地点調査区全景……63
写真74　Ｆ地点調査風景……63
写真75　13号住居址貯蔵穴付近……64
写真76　13号住居址貯蔵穴遺物出土状態　64
写真77　４号井戸址土層断面……64
写真78　４号井戸址完掘状態……64
写真79　６号井戸址土層断面……64
写真80　６号井戸址完掘状態……64
写真81・82　13号住居址出土遺物……65
写真83～85　井戸址出土遺物……65
写真86～91　遺構外出土遺物……65
写真92　石器・その他の遺物……66
写真93　Ｊ地点調査区全景（東より）……100
写真94　Ｊ地点調査区全景（南より）……100
写真95　Ｊ地点調査風景……100
写真96　１号住居址カマド付近
遺物出土状態……101
写真97　１号住居址カマド土層断面……101
写真98　１号住居址遺物出土状態……101
写真99　１号住居址貯蔵穴遺物出土状態…101
写真100　１号住居址・１号溝完掘状態……101
写真101　１号溝土層断面……101
写真102　２号住居址遺物出土状態……102
写真103　２号住居址土層断面……102
写真104　２号住居址カマド土層断面……102
写真105　２号住居址カマド完掘状態……102
写真106　２号住居址完掘状態……102
写真107　円形有段遺構遺物出土状態(1)‥103
写真108　円形有段遺構遺物出土状態(2)‥103
写真109　円形有段遺構土層断面……103
写真110　円形有段遺構遺物出土状態(3)‥103
写真111　円形有段遺構完掘状態……103
写真112　２号土坑遺物出土状態……104
写真113　５号土坑遺物出土状態……104
写真114　３号土坑遺物出土状態……104
写真115　３号土坑完掘状態……104
写真116　４号土坑炭化材等出土状態……104
写真117～130　１号住居址出土遺物……105
写真131～138　２号住居址出土遺物……106
写真139～160　円形有段遺構出土遺物……107
写真161～168　土坑出土遺物……109
写真169～174　１号溝出土遺物……110
写真175・176　遺構外出土遺物……111
写真177・178　石器・その他の遺物……111

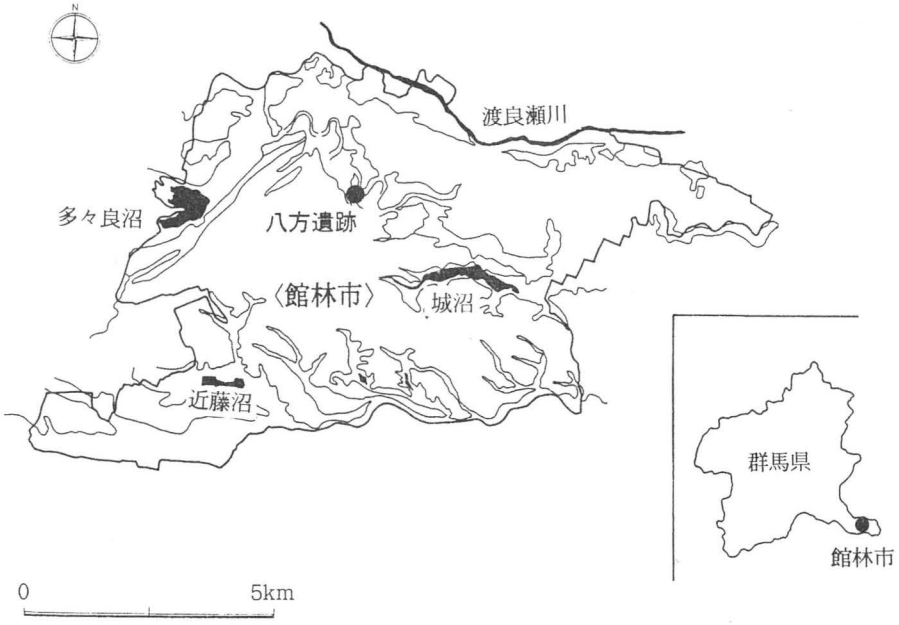
第Ⅰ章　八方遺跡の立地と環境

1. 立　　地

館林市は、群馬県の南東部、関東平野の北辺に位置し、北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、南は邑楽郡明和村を越え利根川を境に埼玉県に接している。市内ほぼ中央部には標高20m前後の邑楽・館林台地と呼ばれる洪積台地が東西に延び、この洪積台地を取り囲むように、利根・渡良瀬川に連なる中小河川の氾濫原である沖積地（低地）が広がっている。

八方遺跡は、東武伊勢崎線館林駅の北方約1.5kmに位置する古墳時代～平安時代の遺跡である。所在地は館林市岡野町字八方ならびに坂下町字八形であり、名称は代表小字名を付して命名された。遺跡は、館林・邑楽台地の北辺にあたり、渡良瀬川の氾濫原に突出する馬背状の舌状台地上の標高22～23mに立地し、すぐ北に旧矢場川の河道跡が残されている。

昭和57年度以降10地点で発掘調査が行われ、これまでに古墳時代中期から後期を中心とした住居跡などの遺構の存在が確認された他、縄文時代の遺物の散布も多く、さらに中世の遺物を伴う溝状遺構なども確認された。



第1図　館林市の地形と八方遺跡位置図

2. 周辺の遺跡

館林市内における遺跡数は、昭和58年から63年にかけて実施した市内遺跡詳細分布調査（『館林市の遺跡』）によると、推定地を含めて144か所あり、その多くは低い台地上に分布している。その内訳は、遺物散布地として、旧石器時代3、縄文時代13（縄文時代の遺物のみ散布）、弥生時代0、古墳時代から平安時代96（うち縄文時代の遺物散布が見られるもの23）があり、その他では古墳17基（推定を含み延べ25基）、中世生産址1、中世城館址12（伝承地を含む）、近世城館址2となっている。平成9年度までの調査で、市内の15か所の遺跡で住居跡が確認されている。

八方遺跡（13）は、館林・邑楽台地の北辺、渡良瀬川の氾濫原に突出する馬背状の舌状台地上に立地し、周辺には同様の立地上に縄文時代から中世までの遺跡が分布している。

このうち、八方遺跡から北西約1.3kmの地点に、高根・外和田遺跡（1）、高根城跡（2）、高根古墳群（3）、高根稲荷大明神古墳（4）などの遺跡が見られる。これらは邑楽・館林台地の西から北側の縁に沿って連なる内陸古砂丘上の最北端に位置し、周囲は渡良瀬川の氾濫原である低湿地に囲まれ、館林市の中では標高が比較的高い32mの台地上に位置する。高根・外和田遺跡は縄文時代から平安時代までの遺物を散布し、昭和41・42年の調査では縄文時代中期の一括土器や、古墳時代前期から中期の住居跡3軒が確認されている。高根・外和田遺跡のすぐ南方には現在5基の古墳が確認されている高根古墳群や高根稲荷大明神古墳があり、古墳と集落址の関連が想定される。また、高根城跡は中世城館址である。

八方遺跡から西の岡野幹線水路によって開析された谷を隔てた台地上には、新倉前遺跡（5）、大道北遺跡（6）、岡野・屋敷前・岡遺跡（7）、大街道遺跡（10）がある。新倉前遺跡は奈良・平安時代、大道北遺跡は古墳時代から奈良・平安時代、岡野・屋敷前・岡遺跡は縄文時代ならびに古墳時代から奈良・平安時代、大街道遺跡は縄文時代と平安時代以降の遺物を散布する。このうち、岡野・屋敷前・岡遺跡からは昭和57年の調査で縄文時代後期の住居跡の一部が確認され、大道北遺跡からは平成8年の調査で古墳時代後期の住居跡1軒などが確認されている。

このほか、八方遺跡の北約600mの位置に中世城館址の蛇屋敷跡（8）、東約600mの位置に平安時代以降の遺物が散布する広内町1遺跡（9）、縄文時代の遺物が散布する朝日町遺跡（11）などがある。また、八方遺跡のすぐ南方に隣接して近世館林城の城下町が拡がり、城下町を囲む土塁の一部（12）も残されている。

このように、八方遺跡を囲む環境は、近世城下町を基盤とした市街地開発が進んでいることから、隣接する大街道遺跡などは宅地化のためにそのほとんどが破壊されているのが現状で、八方遺跡もこれまでに10地点で調査が行われたことは、それを裏付けるものといえる。

1. 高根・外和田遺跡
2. 高根城跡
3. 高根古墳群
4. 高根稲荷大明神古墳
5. 新倉前遺跡
6. 大道北遺跡
7. 岡野・屋敷前・岡遺跡
8. 蛇屋敷跡
9. 広内町１遺跡
10. 大街道遺跡
11. 朝日町遺跡
12. 館林城跡（総曲輪土塁）
13. 八方遺跡

第２図　周辺の遺跡分布図

3. これまでの八方遺跡の調査

A地点

館林市大字当郷（現坂下町）字八形3232にあり、昭和57年、個人住宅建設の事前調査として発掘調査を実施し、古墳時代後期の竪穴住居1軒（1号住居址）が検出された。1号住居址は南側約4分の1の残存率ではあるが、約6.5×6.4mのほぼ正方形をし、遺構確認面（ローム面）から約15cm掘り込んだ部分より床面が検出された。また、南壁および西壁下では幅10～20cm、深さ約10cmの壁溝がめぐらされ、カマドは東壁のやや南寄りに設けられた形跡が認められた。柱穴は残存部分から4本、カマドのすぐ南に約90×80cm、深さ約70cmの長方形の貯蔵穴が確認できた。住居内からは古墳時代後期の土師器坏、甕などが出土した。

B地点

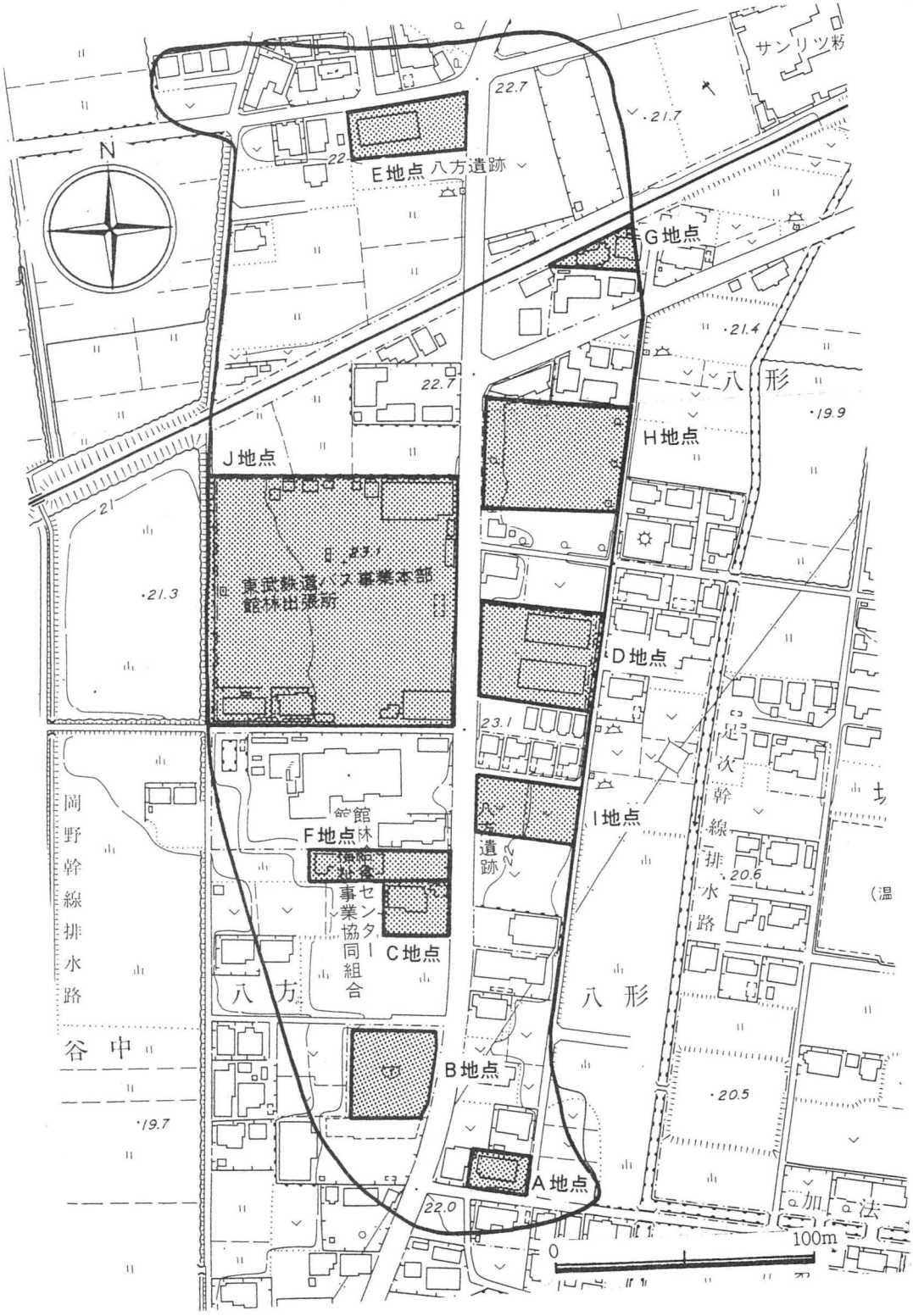
館林市大字岡野（現岡野町）字八方18－1にあり、昭和58年、配送用倉庫建設の事前調査として発掘調査を実施し、古墳時代中期の竪穴住居2軒（2・3号住居址）ならびに中世以降の溝状遺構1条が検出された。

2号住居址は、調査区のほぼ中央から比較的良好な保存状態で確認され、約4.8×4.3mの長方形をし、確認面から約38cm掘り込んだ部分より床面が検出された。壁溝は認められず、南壁寄りの中央部に約90×55cmの楕円形をした炉が認められた。柱穴は4本で、南東コーナーに約80×70cm、深さ約90cmの楕円形をした貯蔵穴が確認できた。床面と壁部分には全体的に焼成を受けた形跡があり、東壁中央部に炭化材や焼成灰がまとまって検出された。住居内からは古墳時代中期の土師器甕、壷、坏、高坏、甑など11個体がほぼ完形で出土した。

3号住居址は、調査区の北隅から確認され、住居の北半分は溝状遺構により破壊されていた。南壁からの推定で一辺が約5.2mの方形をした住居で、確認面から約13cm掘り込んだ部分より床面が検出された。壁溝は認められず、中央部に炉の一部が認められた。柱穴は残存部分から2本、南東コーナーに深さ約75cmの貯蔵穴の一部が確認できた。住居内からは古墳時代中期の土師器坏、高坏などが出土した。

溝状遺構は調査区の北隅から東西に延びる形で確認され、3号住居址の北半分を破壊して構築されていた。上端幅約3.1m、底部幅60～90cm、深さ約2.9mの箱堀の形をした比較的大規模な溝である。覆土に白粘土のブロックが多量に混入していることから、溝底面に白粘土を敷き詰めていたことが推定される。調査は長さ7.6mのみで、全体の規模や形状は不明であるが、東端、西端ともさらに延びることが予想され、構造は城館址の環濠に酷似している。遺構内からは中世の擂鉢や内耳鍋の一部などが出土した。

その他、遺構には伴わないものの、調査区内から縄文時代の石器（石鏃、石斧など）や土器



第3図　八方遺跡全体図（A～J地点）

片も多く出土した。

C地点

館林市大字岡野（現岡野町）字八方22－3にあり、昭和59年、個人住宅建設の事前調査として発掘調査を実施し、重複する竪穴住居2軒（4号住居址A・B）が検出された。この住居址は調査区の北側から検出され、約7.4×7.0mのほぼ正方形をした住居（B）の中に、約6.3×6.0mのほぼ正方形をした住居（A）が確認された。4号住居址Bは確認面から約12cm掘り込んだ部分より床面が検出され、壁溝は認められず、カマドは南西壁のほぼ中央に設けられていた。柱穴は4本確認できた。柱穴内から古墳時代後期の土師器坏が出土したことから、4号住居址Bは古墳時代後期の時期と比定できた。内側から検出された4号住居址Aは、柱穴4本が確認できたのみで、時期は不明である。

その他、遺構には伴わないものの、調査区内から縄文時代の石器（石鏃、石斧など）や土器片などの他、石錐や平安時代の土師器坏、近世の灯明皿や古銭なども出土した。

E地点

館林市大字岡野（現足次町）字八方42－1にあり、昭和60年、個人住宅建設の事前調査として発掘調査を実施した。特に遺構等の検出は認められなかった。

G地点

館林市大字岡野字八方869－6（現足次町字八方2869－6）にあり、昭和61年、個人住宅建設の事前調査として発掘調査を実施し、調査区南端から地下式横穴の一部が検出された。この遺構は、ローム面における平面形約1.3×1.8mの楕円形をし、ローム層を約90cm掘り込んだ部分から床面が検出された。底面は約1.4×2.5mの長方形と確認された。遺構内からは古墳時代後期の土師器坏の他、灰釉陶器や石臼、さらに、縄文時代の石器（石斧）や土器片、中世の焙烙などが出土したが、遺構の時期を確定することはできなかった。

H地点

館林市坂下町字八形3244－1、3244－2にあり、平成5年、配送用倉庫建設の事前調査として発掘調査を実施した。特に遺構等の検出は認められなかった。

I地点

館林市坂下町字八形3238にあり、平成7年、個人住宅建設の事前調査として発掘調査を実施した。特に遺構等の検出は認められなかった。

第Ⅱ章　D地点の調査

1. 調査の概要

D地点は、館林市坂下町字八形3241にあり、昭和60年、共同住宅建設の事前調査として発掘調査を実施した。本地点は、八方遺跡のほぼ中央部にあたり、標高約23mの高さにある。東へとゆるやかに傾斜し、遺跡地の東側は開析谷へと続く。

確認調査では、開発予定区域に一辺2mのメッシュをかけ、南西の杭を基本に、南北にA～Rまでの18列、東西に1～20までの20列の合計360個のグリッドを設定し、ちどり方式で試掘をし、遺構確認作業を行った。その結果、遺構と思われる部分を順次拡張し、8軒の竪穴住居（5～12号住居址）の他、溝状遺構（2～4号溝）や特殊遺構の存在が確認された。5号住居址は調査区の南東部分より検出され、その北に南北に延びる溝状遺構（2～4号溝）が確認された。6～8号ならびに11号住居址の5軒の住居は調査区中央部から南西部分に集中し、重複が見られる。10・12号住居址と特殊遺構は調査区の北西部分から確認されている。この他住居址等の遺構とは判断できなかったが、遺物が集中して出土した不明遺構が2か所認められた。特にここからは中世の板碑の一部も数点出土した。

また、遺構には伴わないものの、縄文時代の石器や土器片も多数出土している。

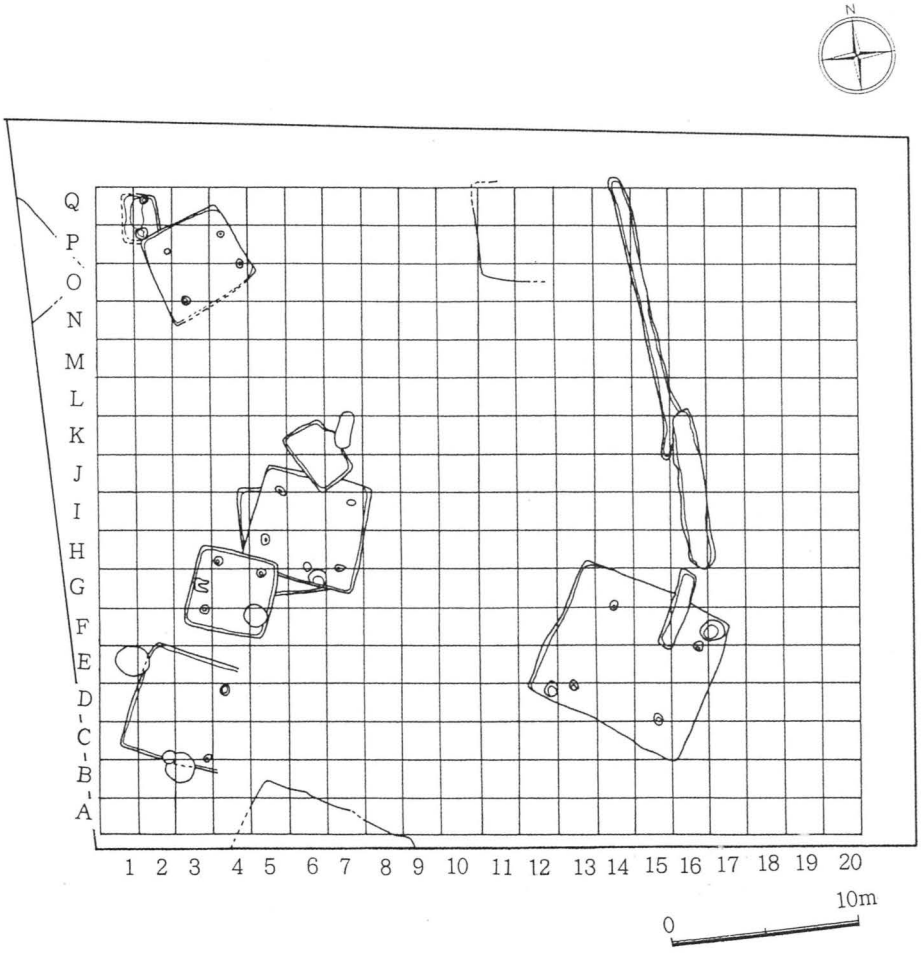
このうち、5号住居址は確認調査の範囲で調査を実施し、報告を行った（『館林市埋蔵文化財調査報告書第13集館林市内遺跡発掘調査報告書』）。5号住居址は、約8.4×7.4mの長方形をし、確認面から約20cm掘り込んだ部分より床面が検出された。住居内は撹乱が著しく、カマドの痕跡が北壁の一部に認められたのみであった。

第4図　D地点位置図

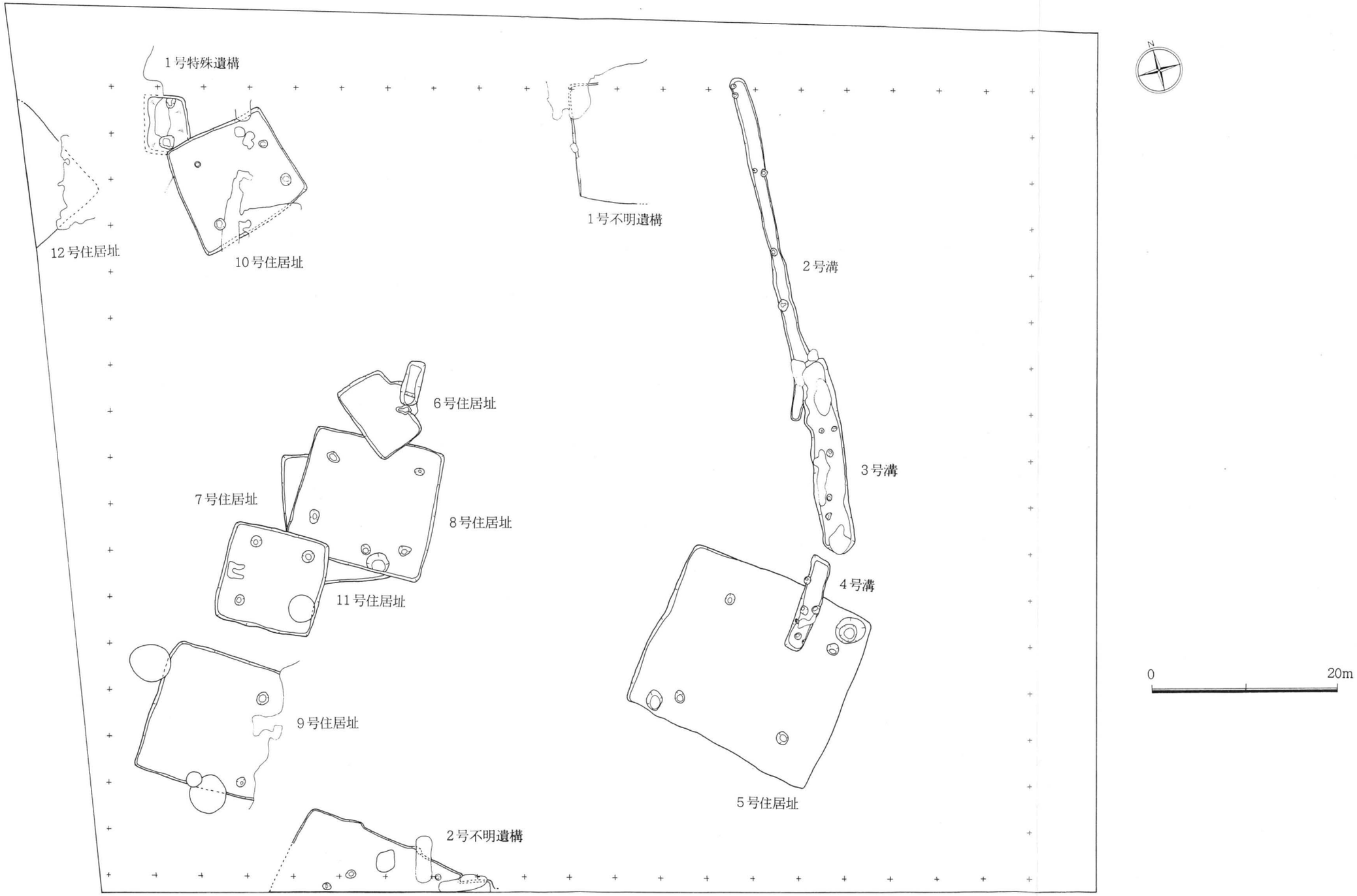
柱穴は4本、東コーナーに深さ約80cm、直径約1.3mの円形をした貯蔵穴が確認できた。住居内からは古墳時代後期の土師器甕の他、土錘や羽口の一部が出土した。

本調査は、確認調査に引き続き実施し、6～12号住居址ならびに溝状遺構や特殊遺構などの調査を行い、住居址はいずれも古墳時代後期のものであることが明らかになった。

調査区は、畑地として使用されていた土地で、土層は地表面から約30cmが耕作土で、その下からローム層が確認された。しかし、耕作時の撹乱がローム層まで達し、遺構の一部を破壊しているため、調査には困難を極めた。



第5図　D地点グリッド設定図



第6図　D地点遺構配置図

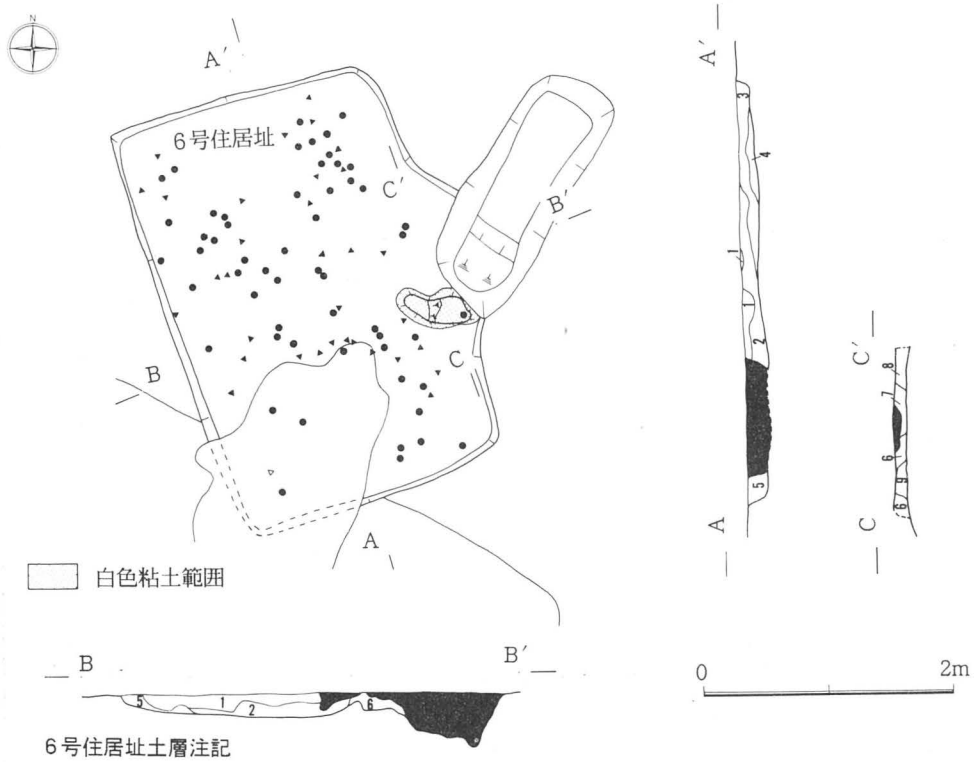
2. 検出された遺構と遺物

(1) 住居址

6号住居址（第7図）

調査区のほぼ中央部から検出され、8号住居址と重複する。約3.4×2.2mの長方形をした小規模な住居で、方位は北東75°である。壁高は約8～14cmを残す。住居内は撹乱が著しく、カマドは東壁の中央部に設置されていたが、そのほとんどは破壊されていた。壁溝、柱穴、貯蔵穴とも検出されていない。

遺物は、土師器坏・甕などの破片は多数出土したが、時期を確定できるものはなかった。



6号住居址土層注記
第1層　暗褐色土　粘性有　ロームブロック・焼土粒子多量含む
第2層　明褐色土　締り・粘性有　ロームブロック少量、焼土粒子多量含む
第3層　褐色土　締り・粘性無　ローム粒子多量含む
第4層　褐色土　粘性有　ロームブロック少量含む
第5層　黄褐色土　締り・粘性無　ローム粒子多量含む
第6層　暗褐色土　締り有　ローム粒子・カーボン粒子多量、焼土粒子少量含む
第7層　暗褐色土　締り有　ローム粒子・カーボン粒子多量含む
第8層　暗褐色土　締り有　ローム粒子多量・カーボン粒子少量含む
第9層　灰白色土　締り・粘性有　白色粘土層

第7図　6号住居址遺構図

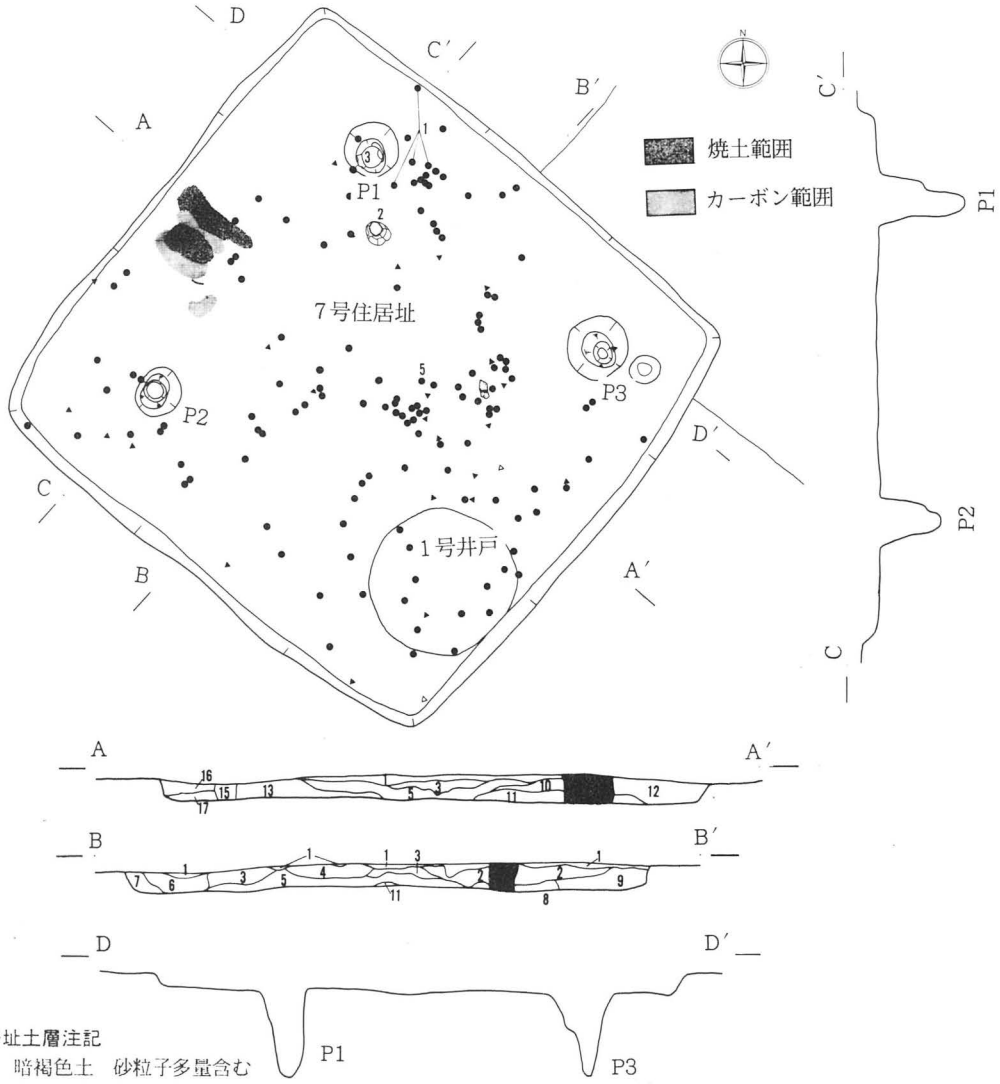
7号住居址（第8図）

調査区の南西部から検出され、8・11号住居址と重複する。約4.3×4.4mのほぼ正方形をし、方位は北西50°である。壁高は約15～19cmを残す。住居内は撹乱が著しく、井戸址により住居内の一部が破壊されているが、床面はほぼ全面に比較的良く残されている。西壁の中央部付近に焼成灰や炭化物等が認められたことから、カマドの痕跡とも推定される。柱穴は3本検出され、南東部の柱穴は井戸址により破壊されていた。壁溝、貯蔵穴とも検出されていない。

7号住居址出土遺物（第9図）

遺物は、古墳時代後期の土師器甕・壷、須恵器壷等が出土し、実測可能なものは6点であった。このうち、土師器甕（1・2）は西壁のカマドの痕跡付近のほぼ床面上から出土。土師器壷（3）は北西部の柱穴内より出土。須恵器壷（5）の破片は住居内中央部のほぼ床面上から出土。各遺物の詳細は次のとおりである。

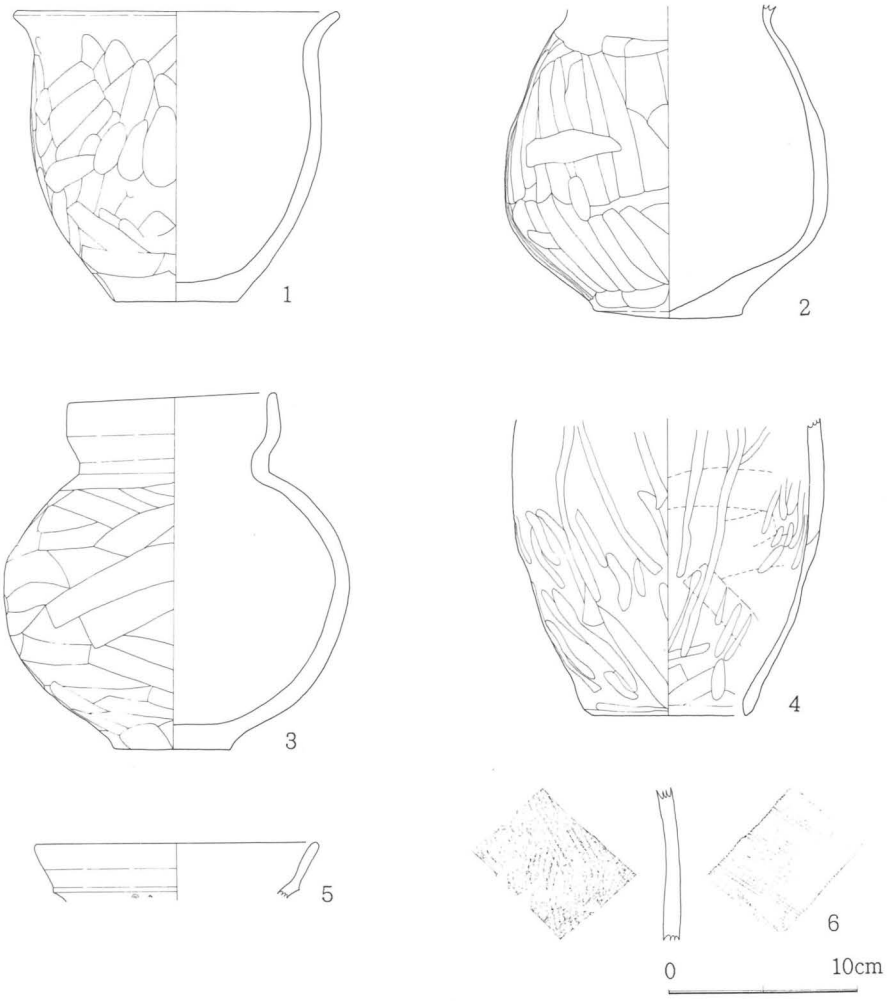
番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	土師器 甕	口径　17.0 器高　15.3	2／3	①赤褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削り。
2	土師器 甕	器高（16.6）	胴部	①赤褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削り。 内面は篦なで。
3	土師器 壷	口径　10.8 器高　18.9	完形	①明褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削り。
4	土師器 甑	器高　（8.1）	1／4	①淡褐色②良 ③細砂粒	胴部篦磨き。内面は篦なで後、篦磨き。
5	須恵器 壷		口縁部 破片	①暗灰白色②還元焔・良 ③砂粒	外面に波状沈線の一部あり。 内面に暗緑色釉がかかる。
6	須恵器 甕		胴部 破片	①暗灰白色②還元焔・良 ③細砂粒	ロクロ整形。外面は平行叩き目。



7号住居址土層注記

第１層　暗褐色土　砂粒子多量含む
第２層　暗褐色土　締り・粘性有　ローム粒子・カーボン粒子少量含む
第３層　褐色土　締り・粘性有　ローム粒子多量含む
第４層　黒褐色土　締り・粘性有　ローム粒子・カーボン粒子多量含む
第５層　褐色土　締り・粘性有　ローム粒子多量、ロームブロック少量含む
第６層　暗褐色土　締り・粘性有　ローム粒子少量含む
第７層　褐色土　締り・粘性有　ローム粒子・ロームブロック多量含む
第８層　暗褐色土　締り・粘性有　ロームブロック多量含む
第９層　暗褐色土　締り・粘性有　ローム粒子多量含む
第10層　暗褐色土　締り・粘性有　ローム粒子・ロームブロック少量含む
第11層　黄褐色土　締り・粘性有　ローム粒子・ロームブロック多量含む
第12層　暗褐色土　締り・粘性有　ローム粒子少量含む
第13層　黄褐色土　粘性有　ロームブロック多量含む
第14層　暗褐色土　締り有　ロームブロック多量含む
第15層　黒褐色土　締り有　ローム粒子・ロームブロック微量含む
第16層　赤褐色土　締り有　焼土粒子・焼土ブロック多量含む
第17層　灰褐色土　締り有　焼土・カーボン粒子少量含む

第８図　７号住居址遺構図



第9図　7号住居址出土遺物

8号住居址（第10図）

調査区のほぼ中央部から検出され、6・7・11号住居址と重複する。約5.5×5.9mのほぼ正方形をし、方位は北西60°である。壁高は約4～7cmを残す。住居内は撹乱が著しいが、床面はほぼ全面に比較的良く残されている。西壁の中央部付近に焼土や焼成灰、炭化物等が認められたことから、カマドの痕跡とも推定される。柱穴は4本検出された。壁溝、貯蔵穴とも検出されていない。

8号住居址土層注記

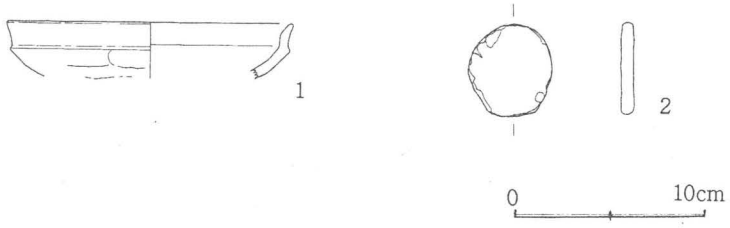
第1層　暗褐色土　締り有　砂粒子多量含む
第2層　暗褐色土　締り有　ローム粒子・焼土粒子少量含む
第3層　暗褐色土　締り有　ローム粒子多量、焼土粒子少量含む
第4層　黄褐色土　締り有　ロームブロック多量含む
第5層　褐色土　締り・粘性有　ローム粒子少量含む
第6層　暗褐色土　締り有　カーボン粒子多量含む
第7層　暗褐色土　締り有　焼土粒子少量、カーボン粒子多量含む
第8層　暗褐色土　締り・粘性有　ローム粒子多量、焼土・カーボン粒子少量含む
第9層　暗褐色土　締り・粘性有　焼土粒子微量含む

第10図　8号住居址遺構図

8号住居址出土遺物（第11図）

遺物は、古墳時代後期の土師器坏等が出土し、実測可能なものは2点であった。このうち、土師器坏（1）は住居内中央部のほぼ床面上から、土製円板（2）は東壁際より出土した。各遺物の詳細は次のとおりである。

番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	土師器坏	口径 15.0 器高 (2.9)	1／5	①明赤褐色②良 ③細砂粒、黒雲母粒	口縁部横なで。体部は篦削り。内面は篦磨き。
2	土師質土製円板	縦 4.7 横 4.2	完形	①暗褐色②良 ③細砂粒	土師器底部片を利用し、周囲を削って円形に加工。



第11図　8号住居址出土遺物

9号住居址（第12図）

調査区のほぼ南西部から検出された。西壁の長さが約7.5mの方形であるが、東壁部分が破壊されているため、全体の規模は不明である。方位は北西57°である。壁高は約5～14cmを残す。住居内は撹乱が著しく、2基の井戸址により住居の西壁と南壁の一部が破壊されている。床面は東壁中央部に一部残されている。西壁の中央部付近に焼土や焼成灰、炭化物等が認められたことから、カマドの痕跡とも推定される。柱穴は2本検出され、北西部と南西部の柱穴は撹乱により破壊されていた。壁溝、貯蔵穴とも検出されていない。

9号住居址出土遺物（第13図）

遺物は、古墳時代後期の土師器坏、甕、須恵器片などが多数出土した他、土錘や鉄製の刀子等も出土し、実測可能なものは7点であった。このうち、土師器坏（1・2）は住居の南西隅から、土師器坏（3）は住居内中央部のほぼ床面上から出土。土師器甕（4）は住居の東部分から、須恵器片（5）は西壁際より出土した。また、土錘（6）は住居の北部分から、鉄製刀子（7）は住居の南部分から出土した。各遺物の詳細は次のとおりである。

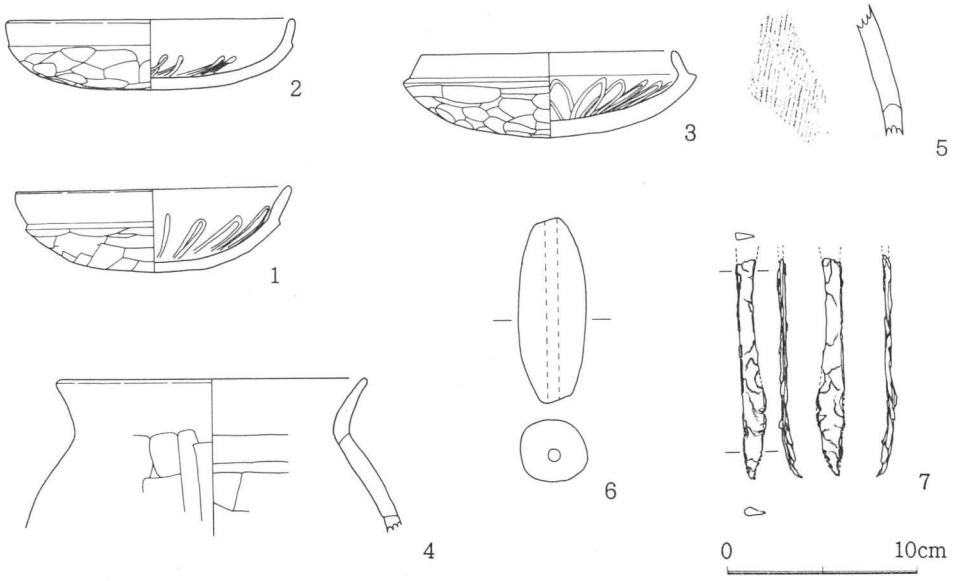
9号住居址土層注記

第1層　暗褐色土　締り・粘性無　砂粒子多量含む
第2層　暗褐色土　締り・粘性無　ローム粒子・砂粒子多量含む
第3層　暗褐色土　締り・粘性無　ローム粒子多量、ロームブロック・焼土粒子少量含む
第4層　明褐色土　締り有　ローム粒子少量含む
第5層　暗褐色土　締り有　ローム粒子・ロームブロック・粘土ブロック少量含む
第6層　暗褐色土　締り有　ローム粒子多量含む

0　2m

第12図　9号住居址遺構図

番号	器 種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	土師器 坏	口径　14.2 器高　4.4	2／3	①明褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は箆削り。 内面は箆磨き。
2	土師器 坏	口径　14.8 器高　4.3	1／3	①明褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は箆削り。 内面は箆磨き。
3	土師器 坏	口径　13.0 器高　4.9	1／2	①明褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は箆削り。 内面は箆磨き。
4	土師器 甕	口径　16.0	口縁部	①明黄褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。胴部は箆削り。 内面は箆なで。
5	須恵器 甕		胴部 破片	①暗灰白②還元焔・良 ③砂粒	外面は平行叩き目。
6	土師質 土錘	長さ　9.9 径　　3.5	完形	①赤褐色②良 ③細砂粒	穿孔径　0.6cm。
7	鉄製 刀子	長さ　(11.7) 幅　　(1.5)	両端欠損		



第13図　9号住居址出土遺物

10号住居址（第14図）

調査区のほぼ北西部から検出された。約4.7×4.9mのほぼ正方形をし、方位は北西13°である。壁高は約10～18cmを残す。住居内は撹乱が著しいが、床面はほぼ中央部から南部分にかけて比較的良く残されている。北東隅に焼土や炭化物等が認められ、さらにカマドの袖部と思われる粘土塊の一部が検出され、カマドの痕跡と推定される。柱穴は4本検出された。壁溝、貯蔵穴とも検出されていない。

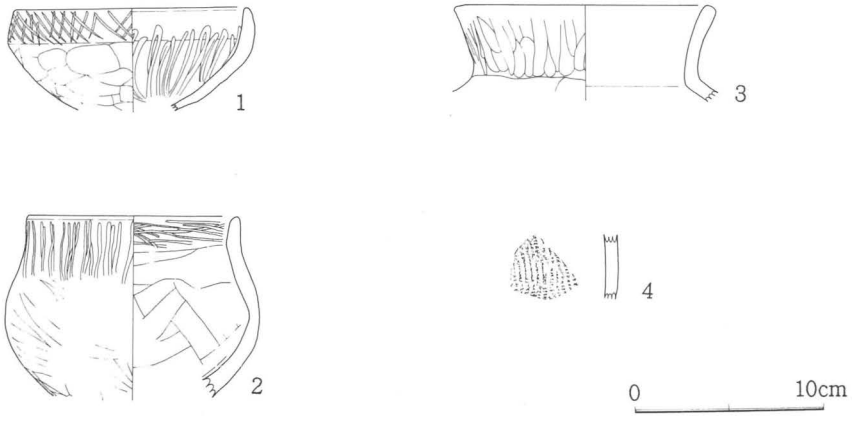
第14図　10号住居址遺構図

10号住居址土層注記
第1層　暗褐色土　締り・粘性有　ローム粒子・カーボン粒子少量含む
第2層　褐色土　締り・粘性無　ローム粒子・ロームブロック多量含む
第3層　褐色土　粘性有　ローム粒子少量含む
第4層　褐色土　締り・粘性有　ローム粒子・ロームブロック多量含む

10号住居址出土遺物（第15図）

遺物は、古墳時代後期の土師器坏、甕、須恵器片などが多数出土し、実測可能なものは4点であった。このうち、土師器坏（1）と土師器甕（2・3）は住居の中央部周辺の床面上から出土。須恵器片（4）は東壁際より出土した。各遺物の詳細は次のとおりである。

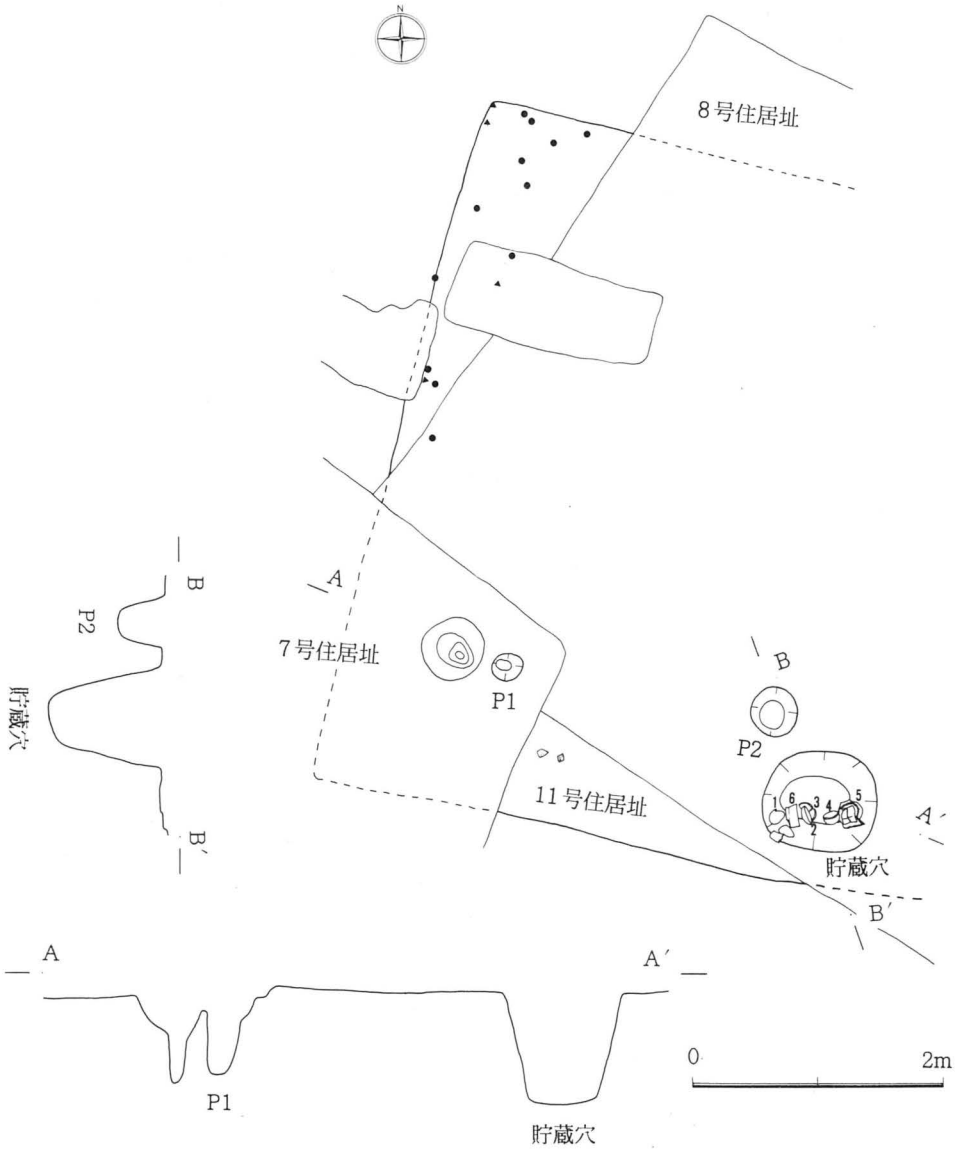
番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	土師器 坏	口径　12.2 器高　(5.5)	1／2	①赤褐色②良 ③粗砂粒	口縁部外面は横なでの上に箆磨き。体部は箆削り。内面は箆磨き。
2	土師器 小型甕	口径　20.8 器高　(9.6)	2／3	①赤褐色②良 ③細砂粒	口縁部内外面とも箆磨き。胴部は箆削り。内面は箆なで。
3	土師器 甕	口径　13.0	口縁部	①淡褐色②良 ③細砂粒	口縁部外面は箆なで。
4	須恵器 甕		胴部 破片	①灰白②還元焔・良 ③細砂粒	外面は平行叩き目。



第15図　10号住居址出土遺物

11号住居址（第16図）

調査区のほぼ中央部から検出され、7・8号住居址と重複する。特に8号住居址によってほぼ破壊されているため、全体の規模は不明である。壁高は約4～8cmを残す。住居の南東隅の柱穴1本と貯蔵穴1基のみ確認できた。貯蔵穴は長軸95cmの楕円形をし、深さが約86cmであった。

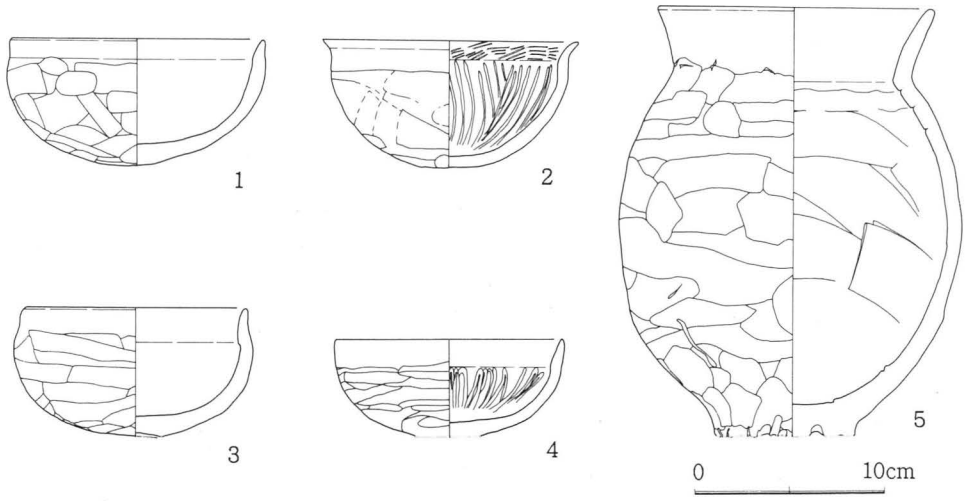


第16図　11号住居址遺構図

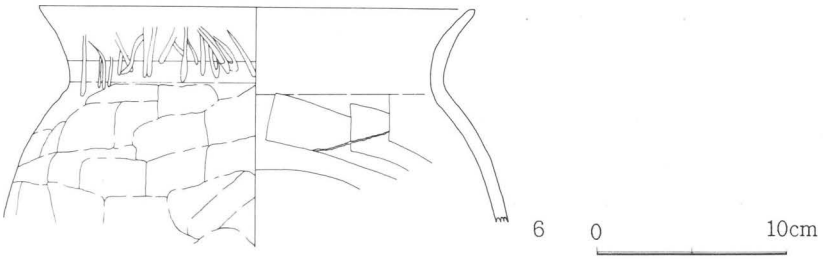
11号住居址出土遺物（第17・18図）

遺物は、貯蔵穴より古墳時代後期の土師器坏、甕等が出土し、実測可能なものは6点であった。このうち、土師器坏（1・2・3）は貯蔵穴の上層部から、土師器坏（4）と土師器甕（5・6）は貯蔵穴の下層部より出土した。各遺物の詳細は次のとおりである。

番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	土師器 坏	口径　13.2 器高　6.7	完形	①明褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。体部は箆削り。内面に剥離がみられる。
2	土師器 坏	口径　13.5 器高　6.7	完形	①赤褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。口縁部内面に櫛なで。体部は箆削り。内面は箆磨き。
3	土師器 坏	口径　11.6 器高　6.7	完形	①明褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は箆削り。内面に剥離がみられる。
4	土師器 坏	口径　12.0 器高　5.2	完形	①赤褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は箆削り。内面は箆磨き。
5	土師器 甕	口径　14.5 器高　22.7	完形	①淡褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。胴部は箆削り。内面は箆なで。
6	土師器 甕	口径　23.0	口縁部	①淡褐色②良 ③細砂粒	口縁部外面は横なでの上に箆磨き。胴部は箆削りの上に箆なで。



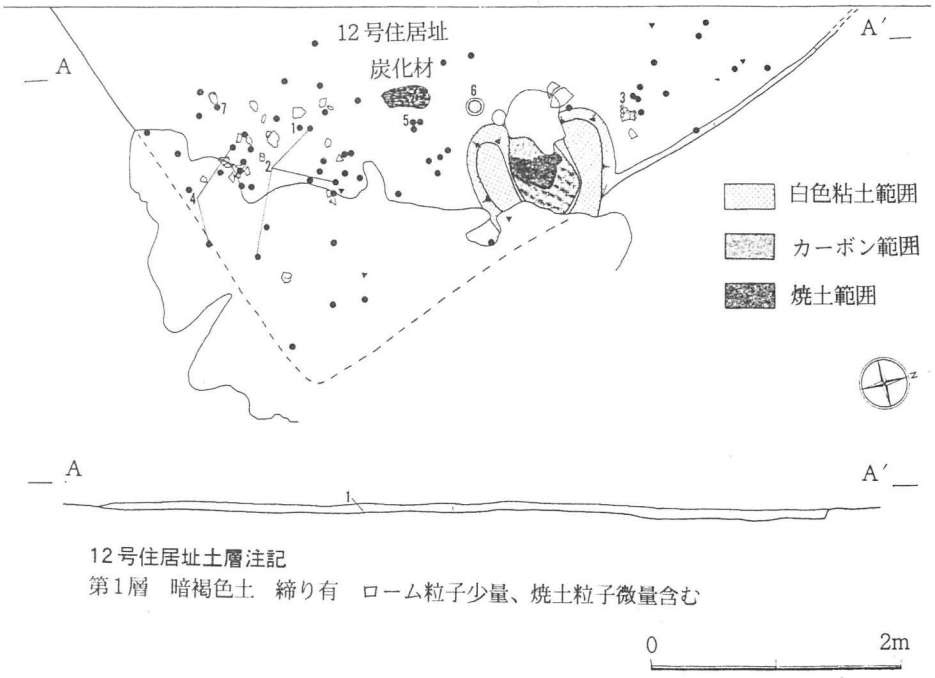
第17図　11号住居址出土遺物（1）



第18図　11号住居址出土遺物（2）

12号住居址（第19図）

調査区の北西部から住居の南東部分約1／4が検出され、それ以外は調査区外で未調査のため、全体の規模は不明である。方位は北東70°である。壁高は約7～8cmを残す。住居の南東隅は撹乱が著しく破壊されているが、床面は中央部に残されている。また、中央部やや東よりの床面上から炭化材が検出された。東壁のほぼ中央部からカマドが検出され、全長90cm、袖幅1.1mが残されていた。また、焚き口には焼土や焼成灰、炭化物等が認められた。柱穴、壁溝、貯蔵穴とも検出されていない。



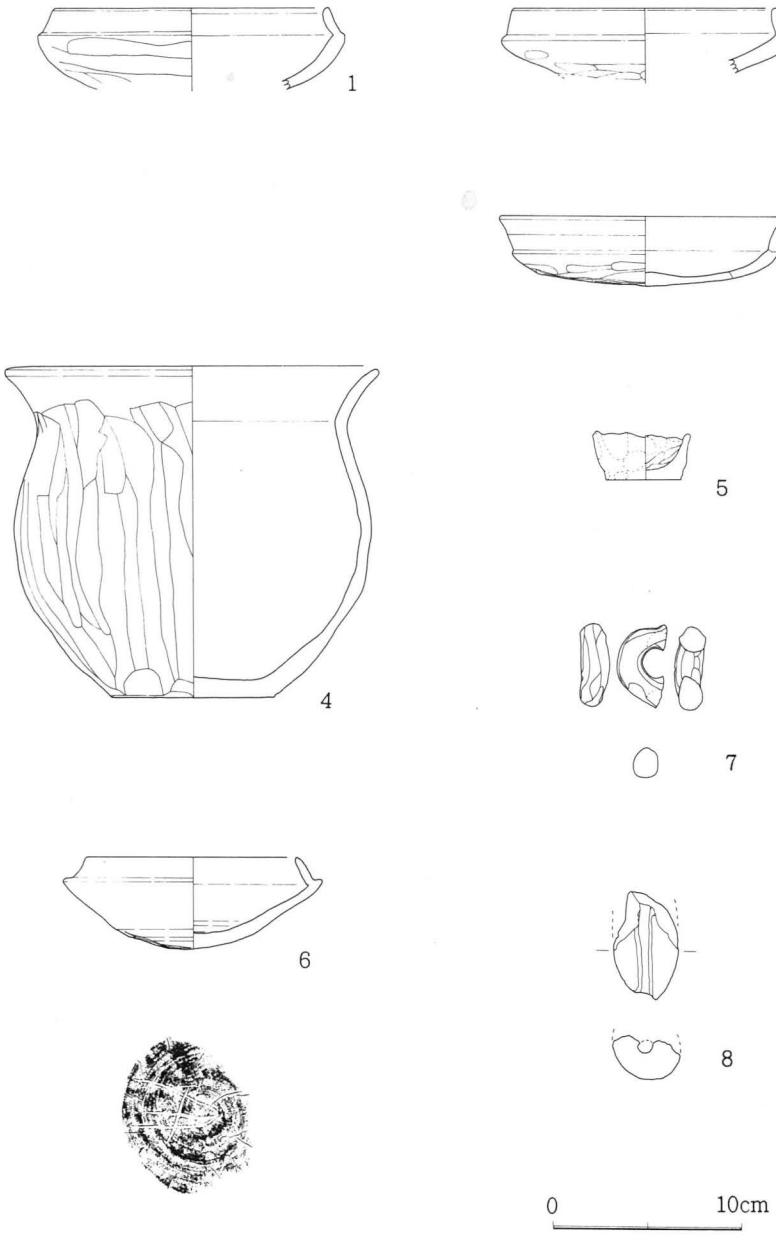
12号住居址土層注記
第1層　暗褐色土　締り有　ローム粒子少量、焼土粒子微量含む

第19図　12号住居址遺構図

12号住居址出土遺物（第20図）

遺物は、古墳時代後期の土師器坏、甕、須恵器坏などが多数出土した他、土錘なども出土し実測可能なものは8点であった。このうち、土師器坏（1・2）、土師器甕（4）、須恵器片（7）は住居の南壁付近から、土師器坏（3）は住居の東壁付近から出土。また、土師器手捏土器（5）、須恵器坏（6）、土錘（8）は住居内中央部のほぼ床面上から出土した。各遺物の詳細は次のとおりである。

番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	土師器坏	口径　24.5	1／4	①暗赤褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。
2	土師器坏	口径　13.8	1／3	①暗褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。
3	土師器坏	口径　15.2 器高　3.7	1／2	①赤褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。
4	土師器甕	口径　19.8 器高　17.5	3／4	①暗褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削り。内面は篦なで。
5	土師器手捏	口径　5.6 器高　2.6	完形	①赤褐色②良 ③細砂粒	内面は指なで。内面の一部と外面に指頭痕あり。
6	須恵器坏	口径　11.2 器高　5.4	ほぼ完形	①灰白色②還元焔・良 ③細砂粒	ロクロ整形。底部篦削り。底部に篦記号あり。
7	須恵器提瓶		把手破片	①暗灰白色②還元焔・良 ③細砂粒	
8	土師質土錘		1／2	①明淡褐色②良 ③粗砂粒	外面は指なで。

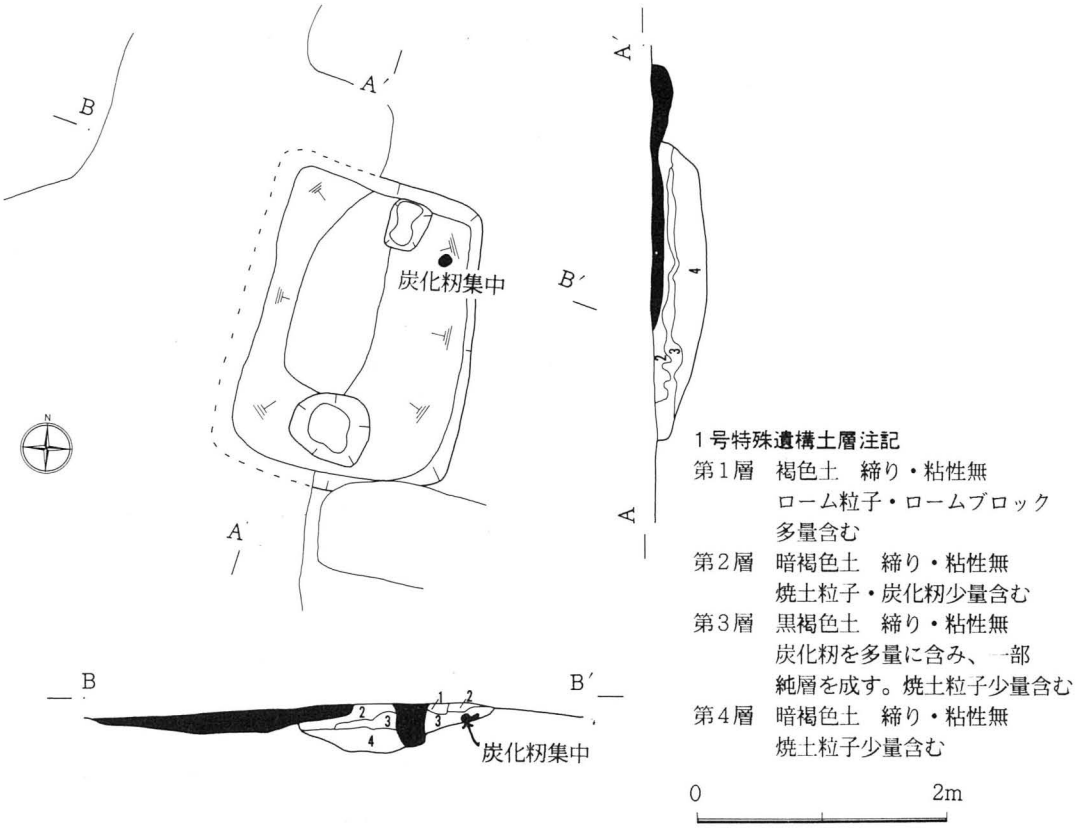


第20図　12号住居址出土遺物

(2) 特殊遺構

1号特殊遺構（第21図）

調査区のほぼ北西部から検出された。約2.5×1.9mのほぼ長方形をした掘り込みで、南東隅を10号住居址により破壊され、西壁を撹乱により破壊されている。確認面からの深さは約30～35cmである。北壁と南壁際にピット状の掘り込みが検出された。さらに、遺構の西半分より炭化した籾殻の純層が約20cmの層を成して確認された。このことから、本遺構は貯蔵用の遺構の一つとも考えられる。

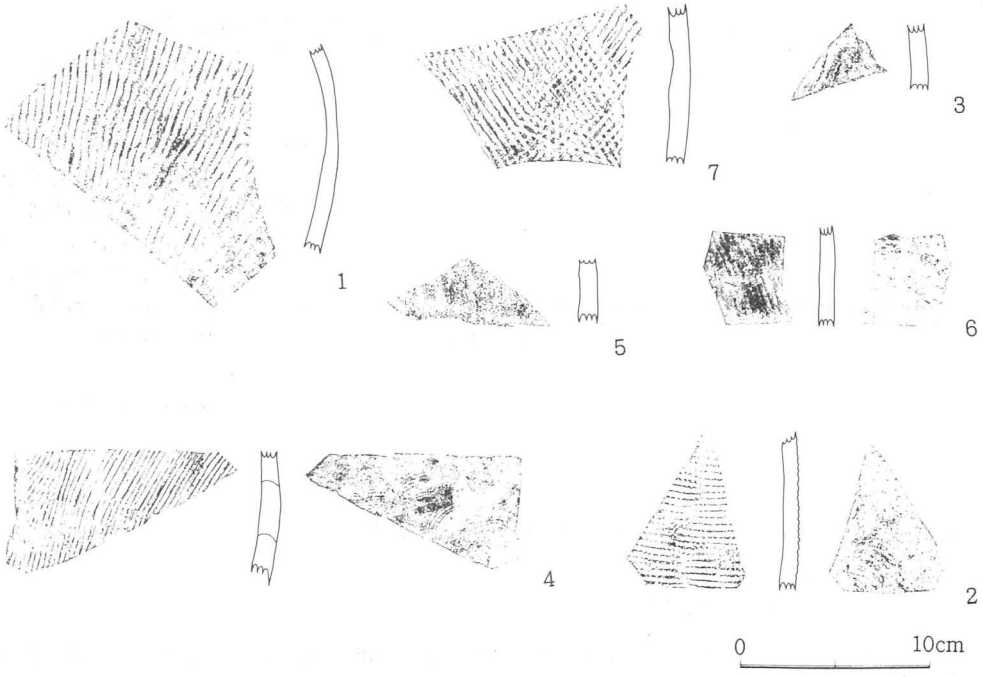


第21図　1号特殊遺構遺構図

1号特殊遺構出土遺物（第22図）

遺物は、古墳時代後期の須恵器甕の破片が出土し、実測可能なものは7点であった。各遺物の詳細は次のとおりである。

番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	須恵器 甕		胴部 破片	①灰白色②還元焔・良 ③砂粒	外面は平行叩き目。
2	須恵器 甕		胴部 破片	①暗灰白色②還元焔・良 ③砂粒	外面は櫛目。内面は叩き目。
3	須恵器 甕		胴部 破片	①灰白色②還元焔・良 ③砂粒	外面に暗緑色釉がかかる。
4	須恵器 甕		胴部 破片	①灰白色②還元焔・良 ③砂粒	外面は櫛目。内面は叩き目。
5	須恵器 甕		胴部 破片	①灰白色②還元焔・良 ③砂粒	外面に暗緑色釉がかかる。
6	須恵器 甕		胴部 破片	①暗灰白色②還元焔・良 ③砂粒	外面は平行叩き目。内面は叩き目。
7	須恵器 甕		胴部 破片	①暗灰白色②還元焔・良 ③砂粒	外面は平行叩き目。



第22図　1号特殊遺構出土遺物

(3) 溝状遺構

2号溝（第23図）

調査区の東部分、5号住居址の北側から検出された。走行は南北に直線的に延び、規模は幅約60cm、長さ約12.6m、深さ12～18cmを測る。溝の南端を3号溝によって切られている。

3号溝（第24図）

調査区の東部分、5号住居址の北側から検出された。2号溝を切り、ほぼ継続するような形で南北に直線的に延びる。規模は幅約1.5m、長さ約8.2m、深さ約30cmを測る。

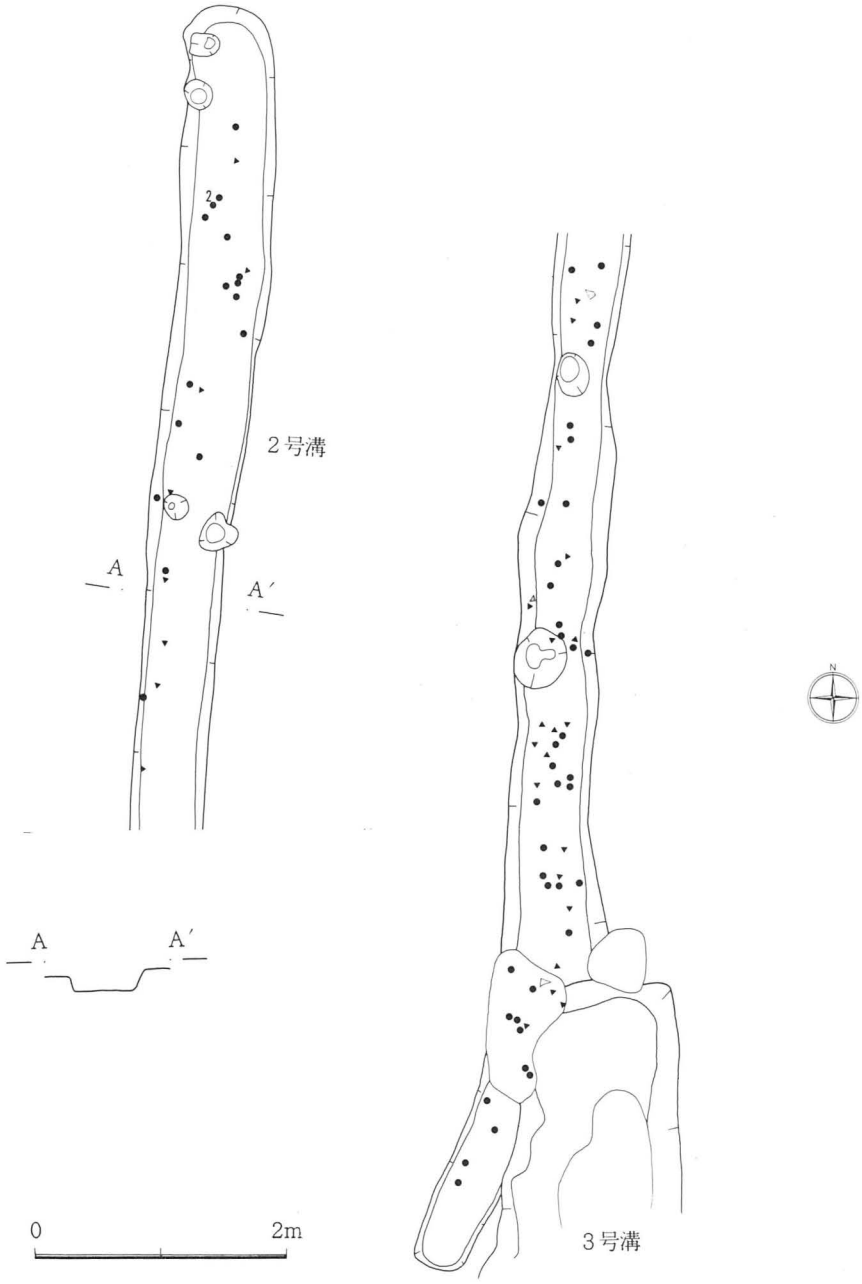
4号溝（第25図）

調査区の南東部、5号住居址を半分切るような形で検出された。走行はやや東西に傾きながら南北に直線的に延びる。規模は幅約90cm、長さ約4.1m、深さ約12cmを測る。

溝状遺構出土遺物（第26図）

2、3号溝からは、古墳時代後期以降の土師器や須恵器の破片が出土し、実測可能なものは3点であった。4号溝からの遺物の出土は少なかった。このうち、須恵器坏片（1）と土錘（2）は2号溝から、須恵器甕の破片（3）は3号溝から出土した。各遺物の詳細は次のとおりである。

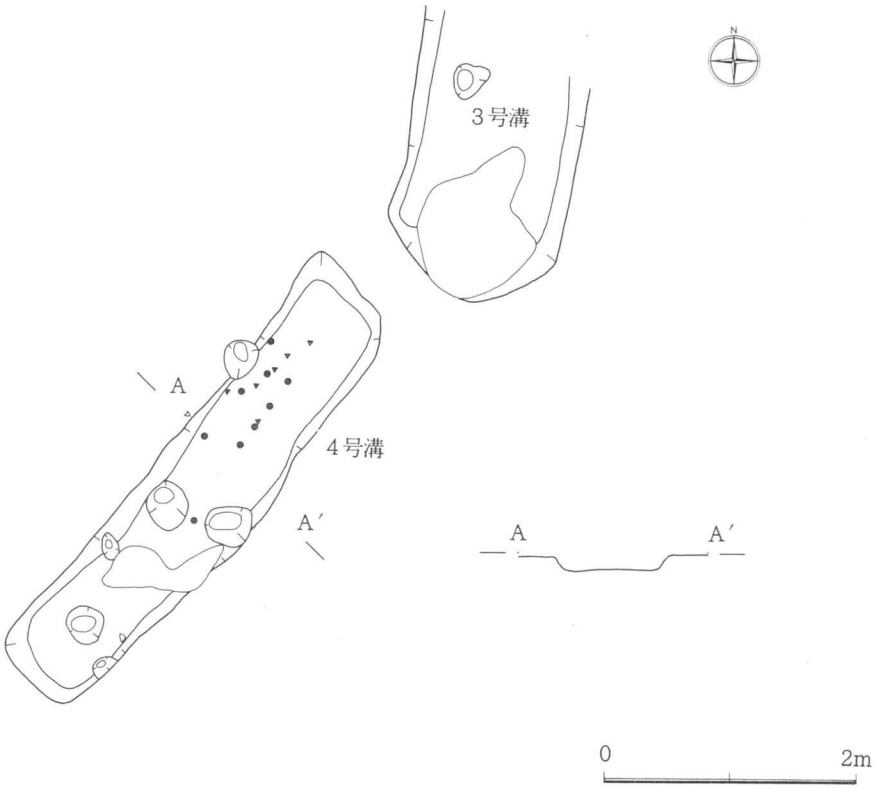
番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	須恵器 坏		底部 破片	①暗灰白色②還元焔・良 ③細砂粒	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
2	土師質 土錘	径　3.2	両端 欠損	①赤褐色②良 ③細砂粒	
3	須恵器 甕		胴部 破片	①灰白色②還元焔・良 ③細砂粒	外面は平行叩き目に暗灰白色の自然釉がかかる。



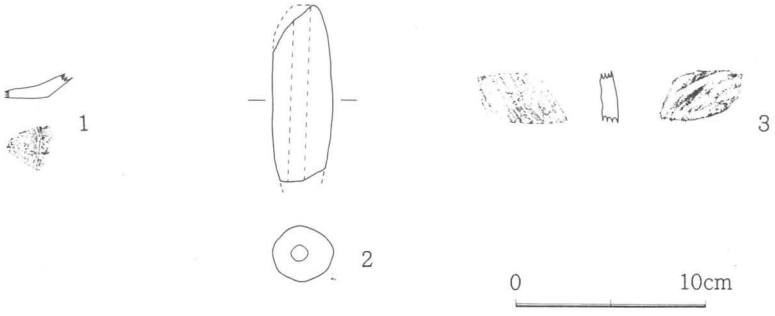
第23図　2号溝遺構図

2号溝
3号溝
4号溝
A
A′
B
B′
N
3号溝土層注記
第1層　暗褐色土　締り有
ローム粒子多量、ロームブロック少量含む
第2層　暗褐色土　締り有
ロームブロック・焼土粒子少量含む
第3層　褐色土　締り有
ロームブロック多量含む
第4層　暗褐色土　締り有
ローム粒子・焼土粒子少量含む
第5層　黄褐色土　締り・粘性有
ロームブロック多量含む
第6層　褐色土　締り有
ロームブロック・ローム粒子多量含む
0
2m

第24図　3号溝遺構図



第25図　4号溝遺構図

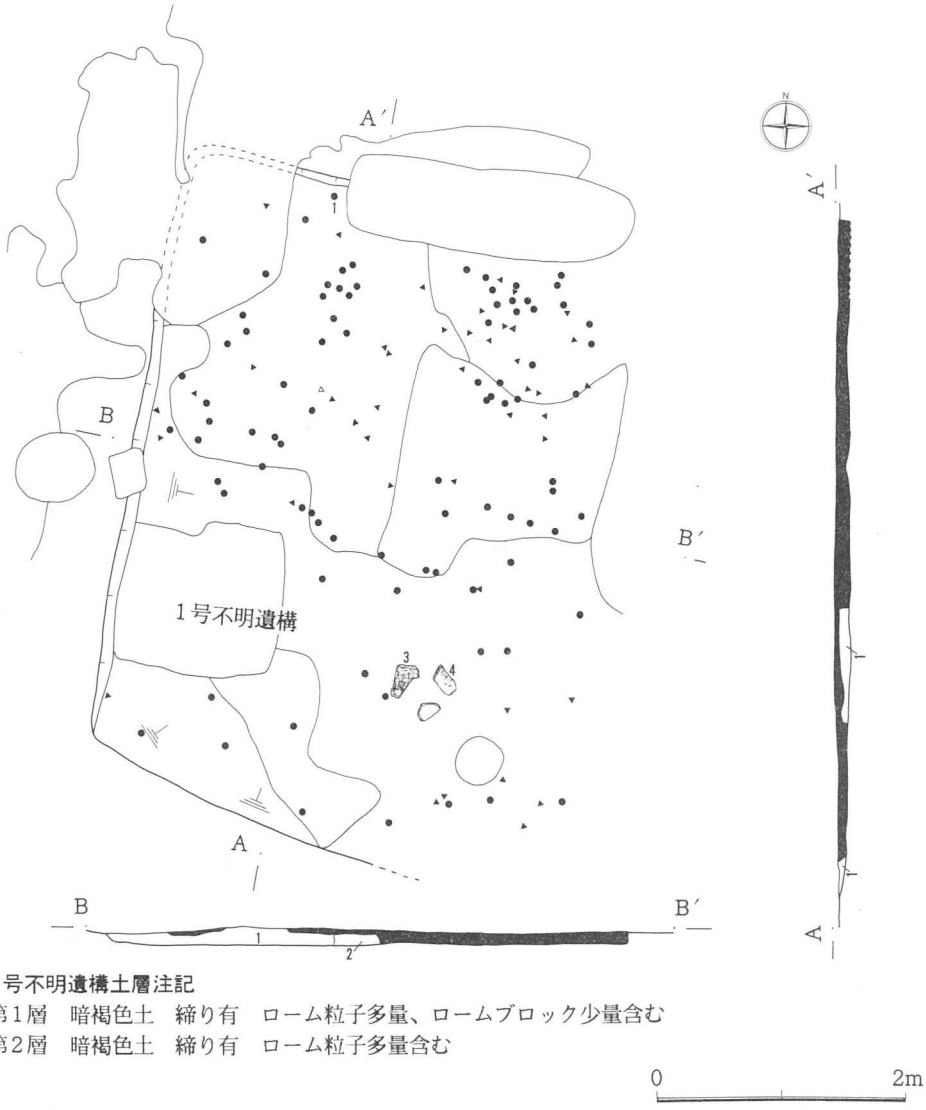


第26図　溝状遺構出土遺物

(4) 不明遺構

1号不明遺構（第27図）

調査区の北側中央部から検出された。東側は撹乱により破壊されていたが、南北辺が約4.8mの方形の掘り込みの一部が確認された。北面と東面に住居の壁を思わせる立ち上がりが見られ、深さは約9cmである。

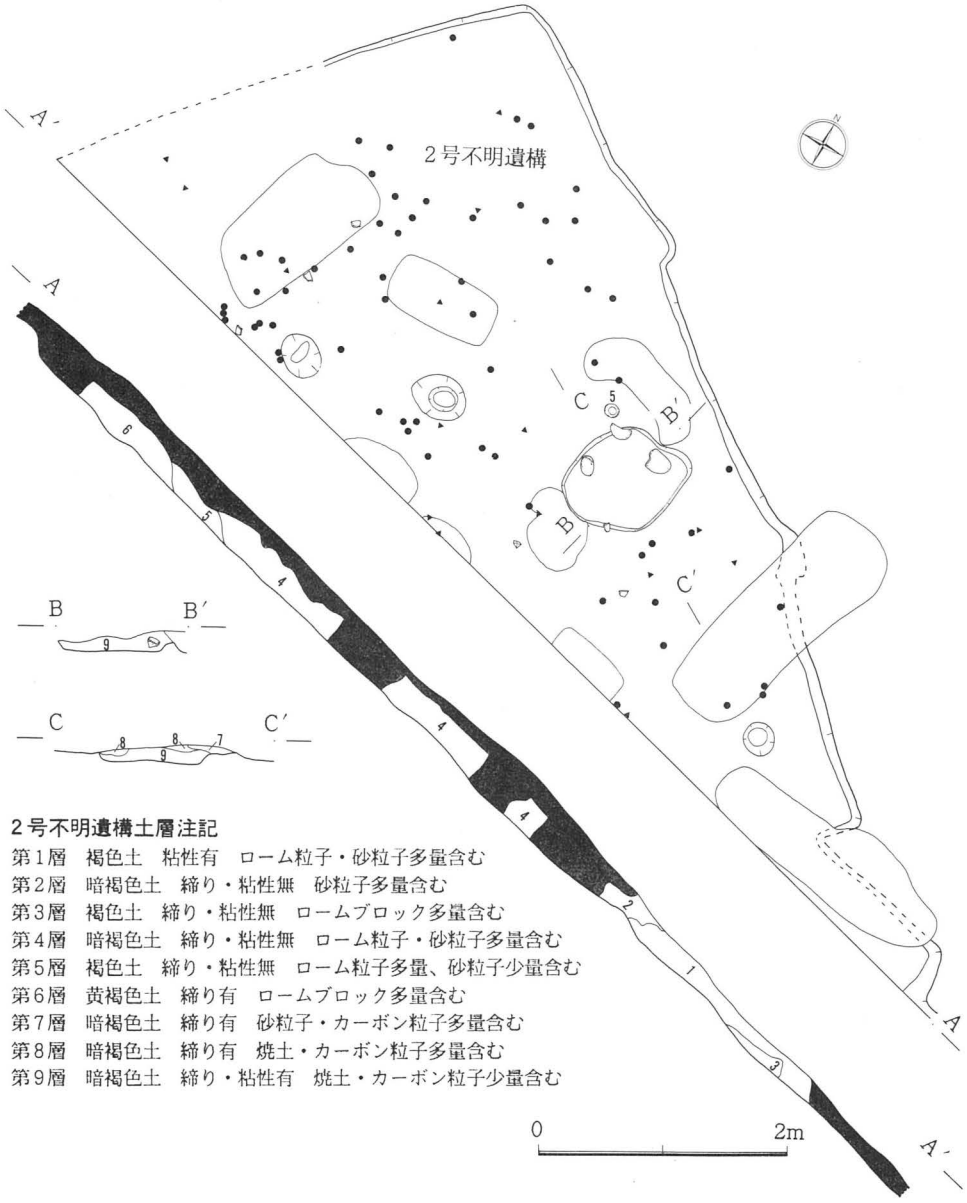


1号不明遺構土層注記
第1層　暗褐色土　締り有　ローム粒子多量、ロームブロック少量含む
第2層　暗褐色土　締り有　ローム粒子多量含む

第27図　1号不明遺構遺構図

2号不明遺構（第28図）

調査区の南東部から検出された。北にコーナーを持ち、東西辺が約8.5mの方形の掘り込みの一部が確認された。北面に住居の壁を思わせる立ち上がりが見られ、深さは約5～9cmである。遺構の北壁際に長軸90cm、深さ約5cmの楕円形をした掘り込みが確認できた。この掘り込みの壁際に3個の石が設置されていた。

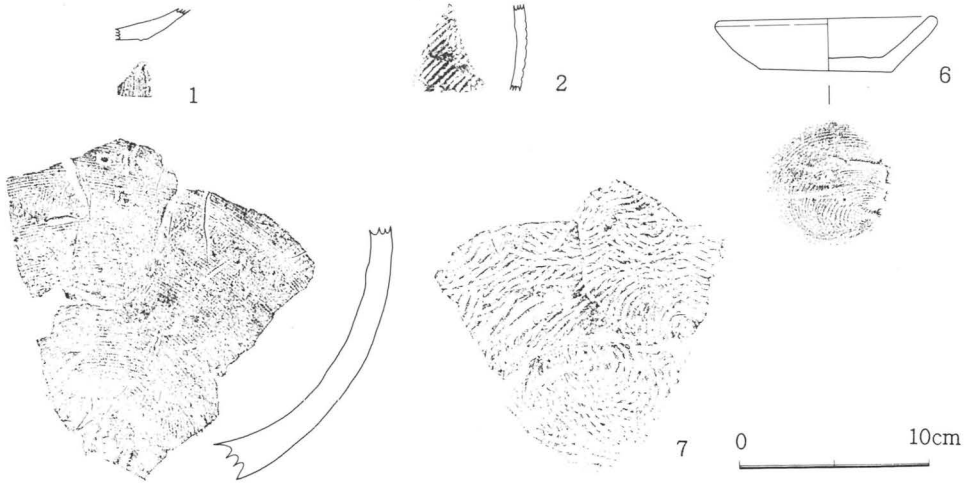


第28図　2号不明遺構遺構図

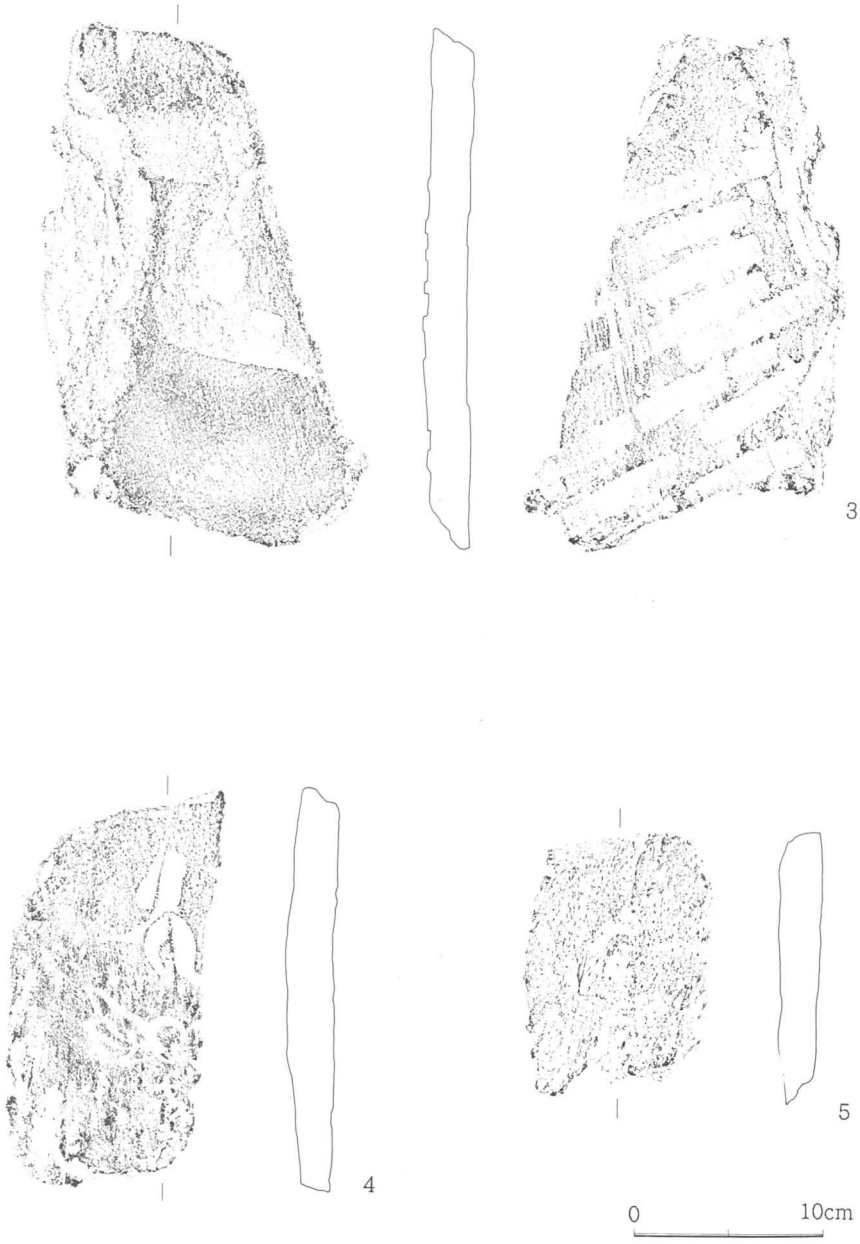
不明遺構出土遺物（第29・30図）

1・2号不明遺構からは、古墳時代後期以降の土師器や須恵器の破片や板碑などが出土し、実測可能なものは7点であった。各遺物の詳細は次のとおりである。

番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	須恵器 坏		底部 破片	①暗灰白色②還元焔・良 ③細砂粒	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
2	須恵器 甕		胴部 破片	①暗灰白色②還元焔・良 ③細砂粒	外面は平行叩き目に黒緑色釉がかかる。
3	板碑	長さ　(28.5) 幅　(17.5)	上部 破片		裏面に鑿痕あり。
4	板碑	長さ　(22.6) 幅　(11.9)	胴部 破片		表面に梵字（キリーク）、蓮座、文字「□□」あり。
5	板碑	長さ　(16.2) 幅　(11.0)	胴部 破片		表面に文字「八月□□」あり。
6	土師器 坏	口径　11.0 器高　2.7	完形	①赤褐色②良 ③細砂粒	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。
7	須恵器 大甕		胴部 破片	①暗灰白色②還元焔・良 ③粗砂粒	ロクロ整形。内面は縄状叩き目。



第29図　不明遺構出土遺物（1）



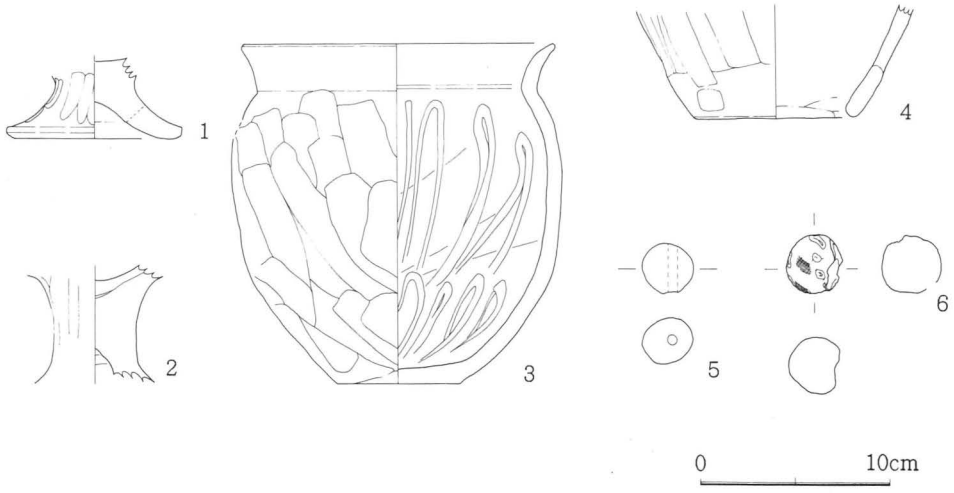
第30図　不明遺構出土遺物（2）

(5) 遺構外出土遺物

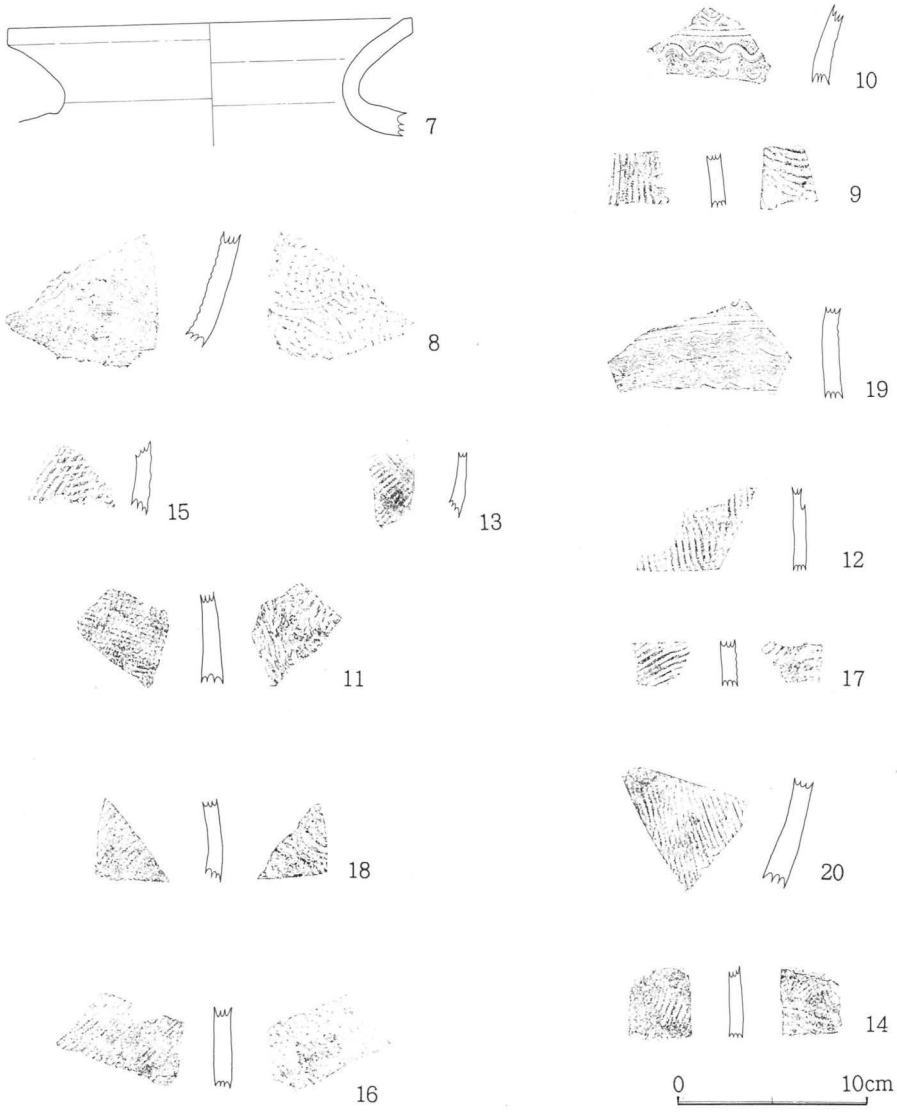
調査区域内からは、遺構に伴わずに出土した遺物も多数あり、実測可能なものは20点であった。その内訳は土師器高坏（1・2）、土師器甕（3）、土師器甑（4）、土師質の土錘（5）、土玉（6）、須恵器甕等の破片が14点（7～20）である。各遺物の詳細は次のとおりである。（第31・32図）

番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	土師器 高坏		脚部	①赤褐色②良 ③細砂粒	脚部底面は横なで。脚部外面は篦削り。坏部内面は篦磨き。
2	土師器 高坏		脚部	①淡褐色②良 ③細砂粒	外面は篦削り。坏部内面は篦磨き。
3	土師器 甕	口径　16.3 器高　18.0	3／5	①淡赤褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。胴部篦削り。 内面は篦なで後、粗く篦磨き。
4	土師器 甑		底部	①茶褐色②良 ③細砂粒	胴部篦削り。
5	土師質 土錘	軸長　2.6 径　　2.7	完形	①淡褐色②良 ③極細砂粒	穿孔径　0.5cm。
6	土師質 土玉	径　　3.1	ほぼ完形	①明褐色②良 ③細砂粒	穿孔なし、布目痕あり。
7	須恵器 壺	口径　21.4	口縁部	①暗灰白色②還元焔・良 ③細砂粒	ロクロ整形。
8	須恵器 甕		胴部 破片	①暗灰白色②還元焔・良 ③細砂粒	ロクロ整形。内面は叩き目。
9	須恵器 甕		胴部 破片	①淡灰白色②還元焔・良 ③細砂粒	外面、内面とも平行叩き目。
10	須恵器		破片	①暗灰白色②還元焔・良 ③細砂粒	外面に波状沈線あり。
11	須恵器 甕		胴部 破片	①灰褐色②還元焔・良 ③細砂粒	外面、内面とも叩き目。
12	須恵器 甕		胴部 破片	①暗灰色②還元焔・良 ③細砂粒	外面は平行叩き目。

番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
13	須恵器 甕		胴部 破片	①暗灰色②還元焔・良 ③細砂粒	外面は櫛状押形。
14	須恵器 甕		胴部 破片	①灰白色②還元焔・良 ③細砂粒	外面は暗緑色釉がかかる。
15	須恵器 甕		胴部 破片	①灰白色②還元焔・良 ③細砂粒	外面は平行叩き目。
16	須恵器 甕		胴部 破片	①暗灰色②還元焔・良 ③細砂粒	外面、内面とも叩き目。
17	須恵器 甕		胴部 破片	①暗灰色②還元焔・良 ③細砂粒	外面、内面とも叩き目。
18	須恵器 甕		胴部 破片	①暗灰色②還元焔・良 ③細砂粒	外面、内面とも叩き目。
19	須恵器 甕		胴部 破片	①灰色②還元焔・良 ③細砂粒	外面に波状沈線あり。
20	須恵器 甕		胴部 破片	①灰白色②還元焔・良 ③細砂粒	外面は平行叩き目。



第31図　遺構外出土遺物（1）



第32図　遺構外出土遺物（2）

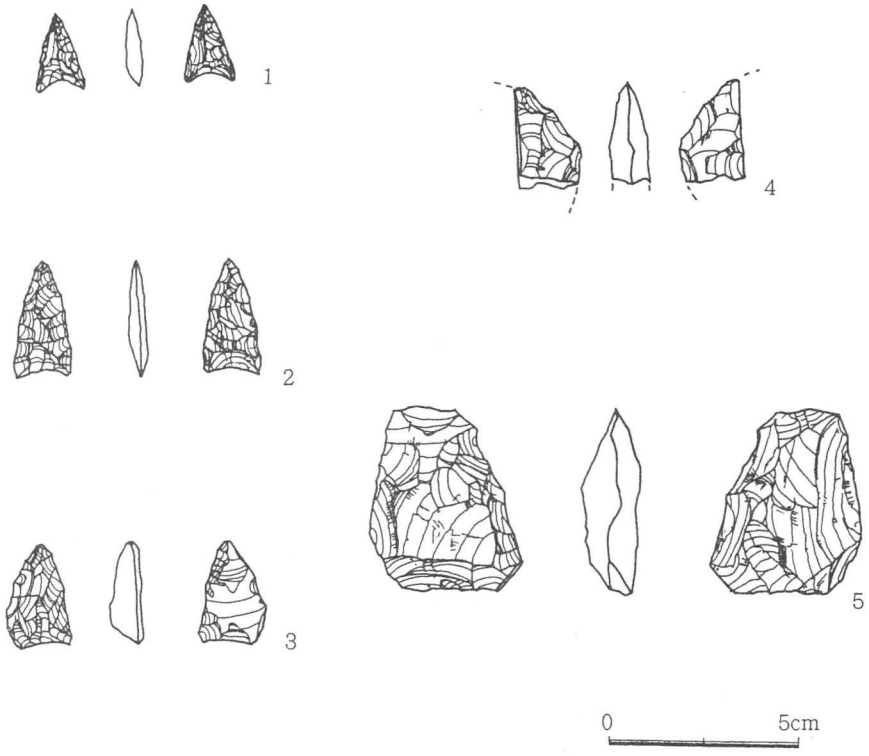
(6) 石器・その他の遺物

本遺跡からは、実測可能な石器が10点（石鏃、スクレーパー、打製石斧、敲石）の他、縄文時代の土器片5点ならびに近世の古銭3点が出土している。

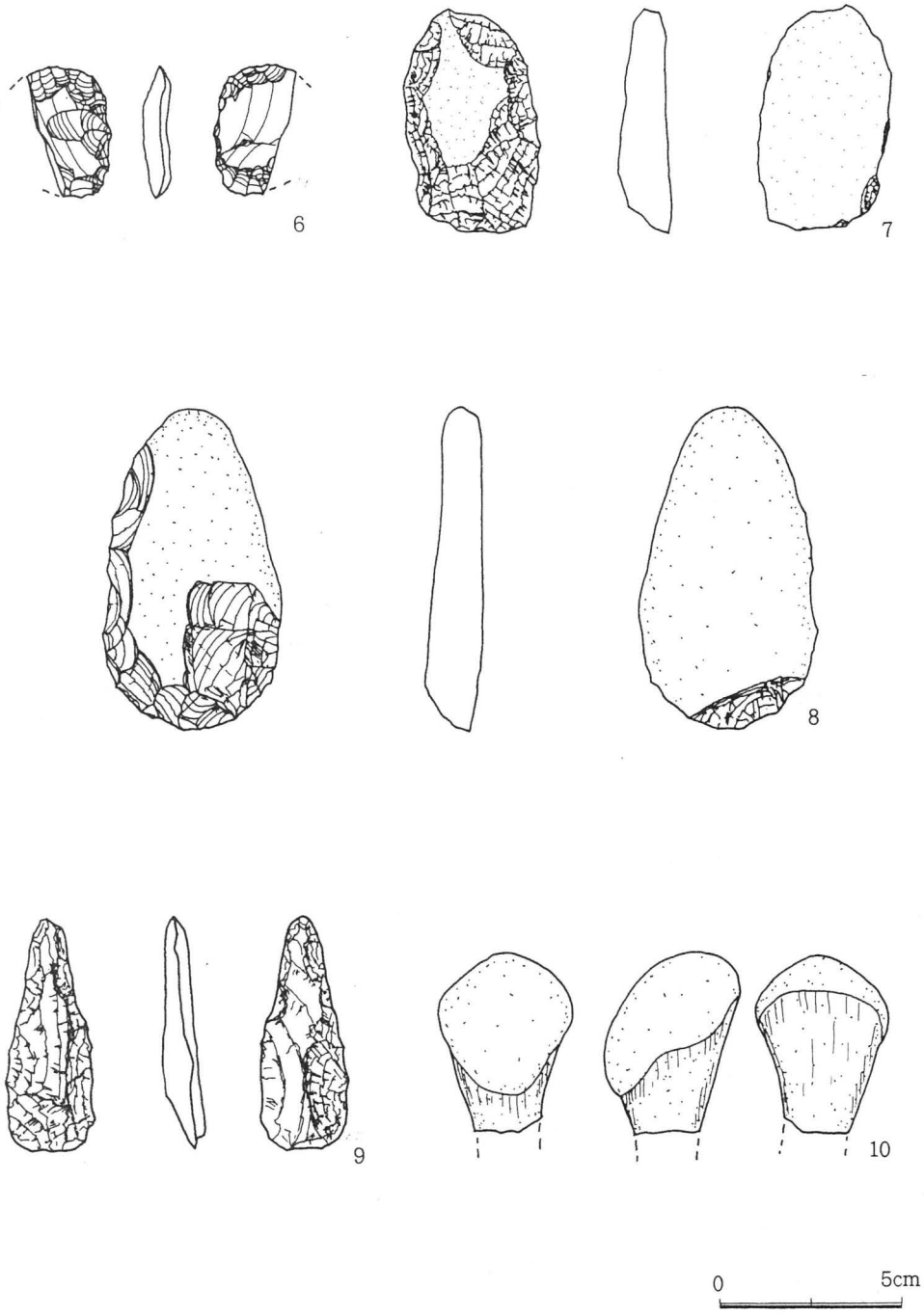
石器の内容は、1～3は石鏃で、石材は1・2がチャート、3が黒曜石である。4～6はスクレーパーで、石材は4・5がチャート、6が頁岩である。7～9は石斧で、石材は8がチャート、9が砂岩である。10は敲石で、石材は凝灰岩である。（第33・34図）

縄文時代の土器片は、前期から中期にかけてのものである。11は表面に条痕文を施し、胎土に繊維を多量に含む。12・13は表面に縄文を施し、胎土に繊維を多量に含む。14は表面に櫛状工具による沈線を施す。15は表面に縄文を施す。（第35図）

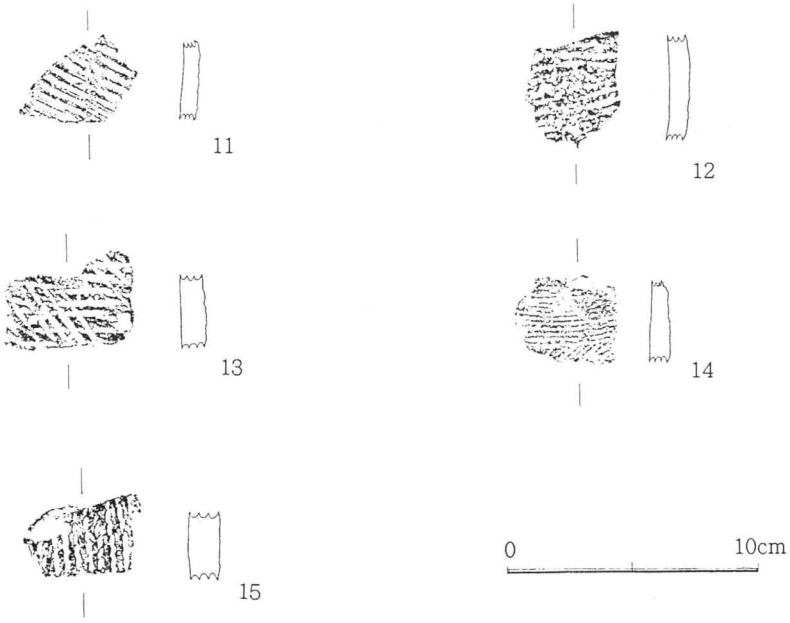
近世の古銭はいずれも銅銭で、内容は「寛永通寶」（16）「皇宗通寶」（17）「元□□寶」（1
である。（第36図）



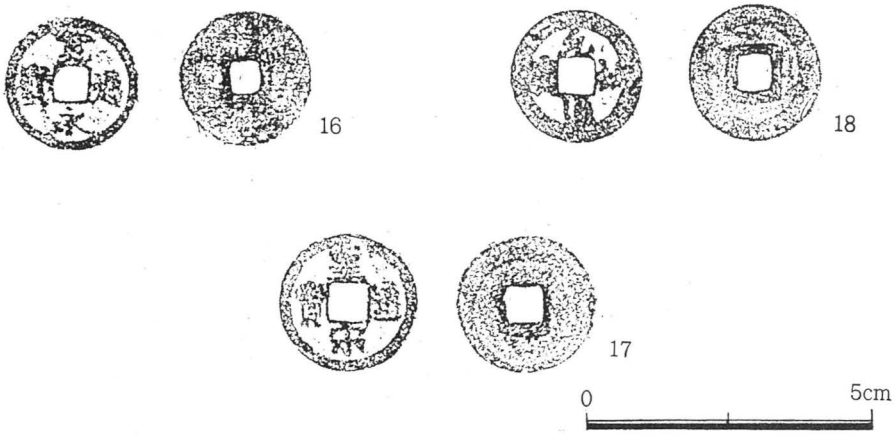
第33図　石器・その他の遺物（1）



第34図　石器・その他の遺物（2）



第35図　石器・その他の遺物（3）（縄文土器）



第36図　石器・その他の遺物（4）（古銭）

写真１　Ｄ地点調査区全景

写真２　Ｄ地点調査風景（1）

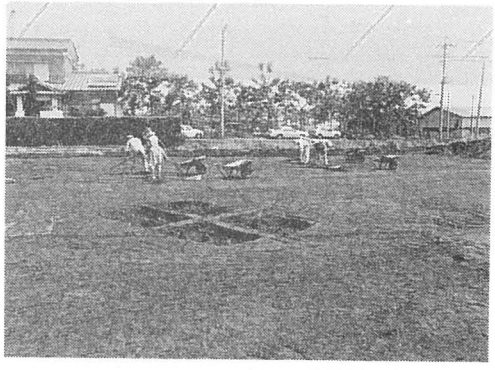


写真３　Ｄ地点調査風景（2）

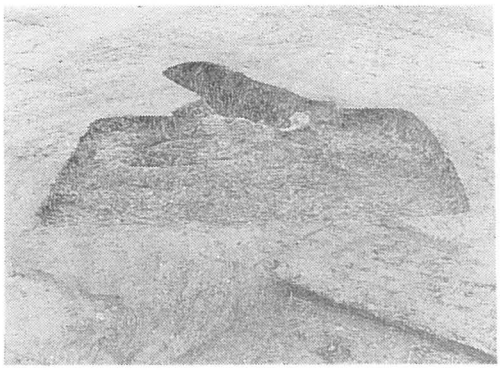


写真４　６号住居址完掘状態

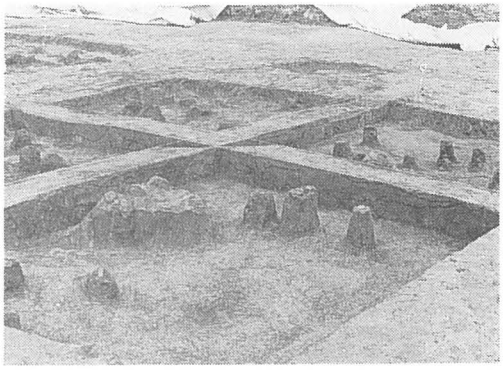


写真５　７号住居址土層断面

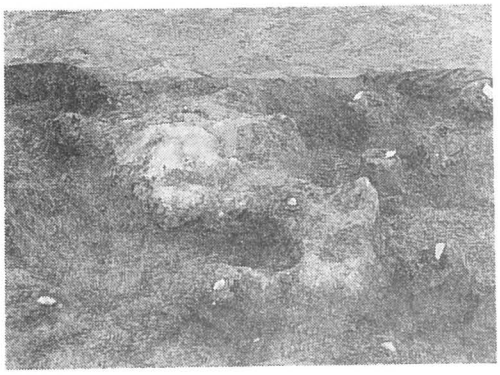


写真６　７号住居址カマド検出状態

写真７　７号住居址遺物出土状態（1）

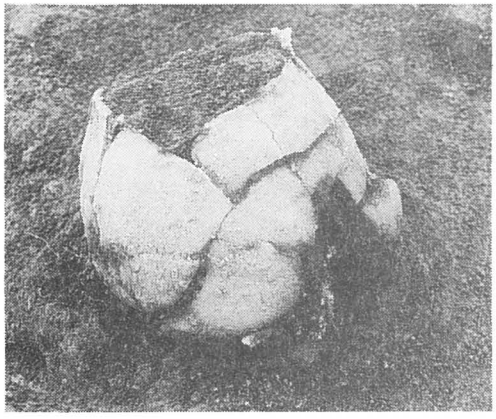


写真８　７号住居址遺物出土状態（2）

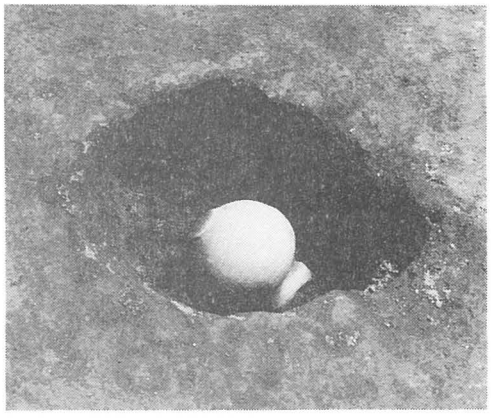


写真９　７号住居址遺物出土状態（3）

写真10　6・7・8号住居址完掘状態

写真11　9号住居址完掘状態

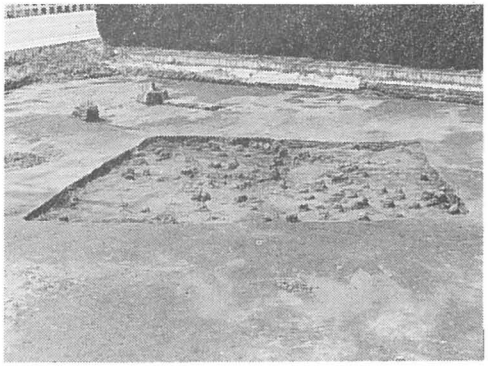


写真12　10号住居址遺物出土状態

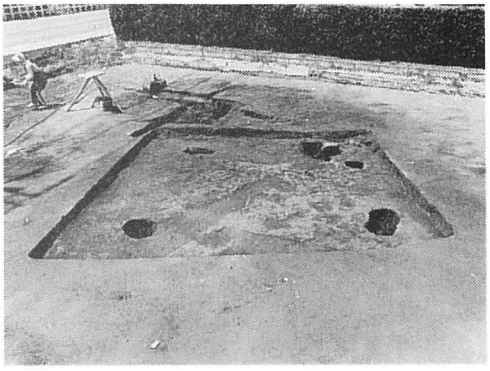


写真13　10号住居址完掘状態

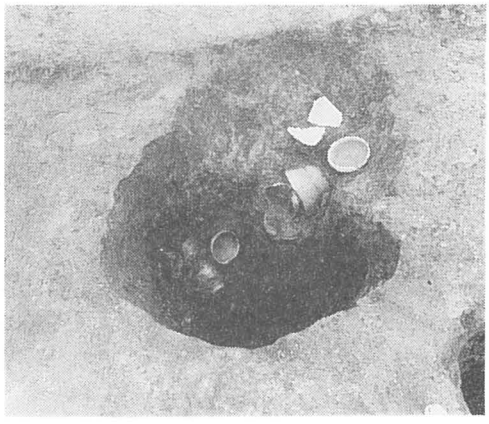


写真14　11号住居址貯蔵穴遺物出土状態

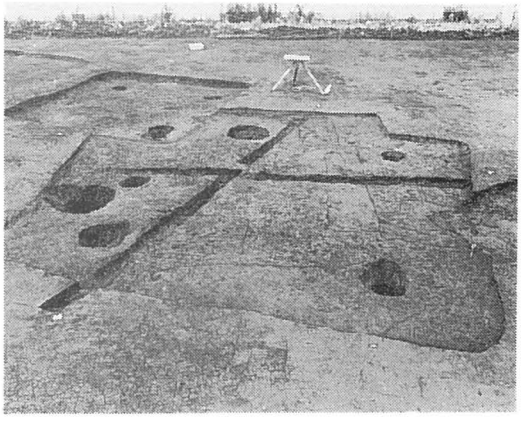


写真15　11号住居址完掘状態

写真16　12号住居址遺物出土状態(1)

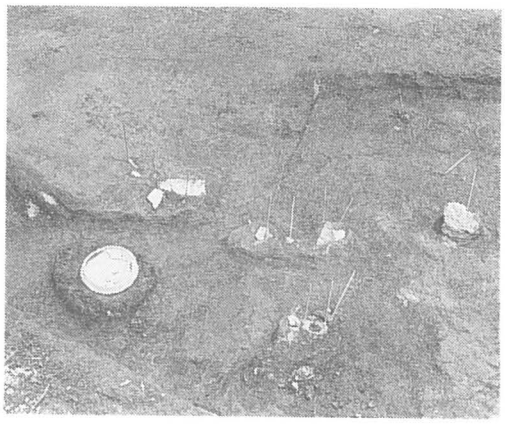


写真17　12号住居址遺物出土状態(2)

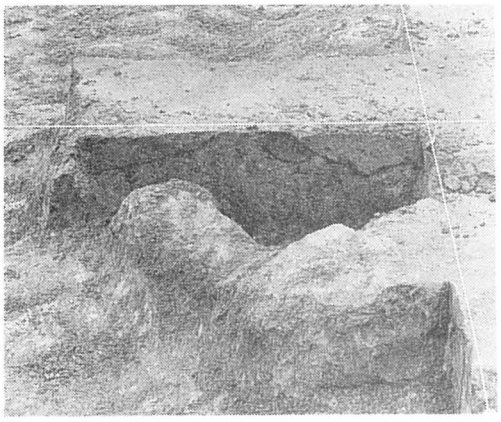


写真18　12号住居址カマド検出状態

写真19　12号住居址完掘状態

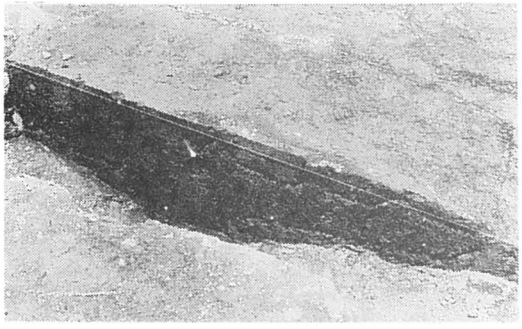


写真20　1号特殊遺構土層断面

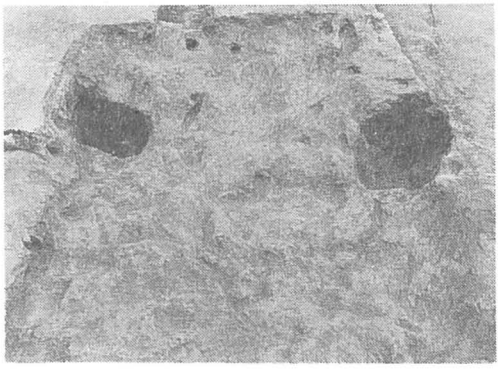


写真21　1号特殊遺構完掘状態

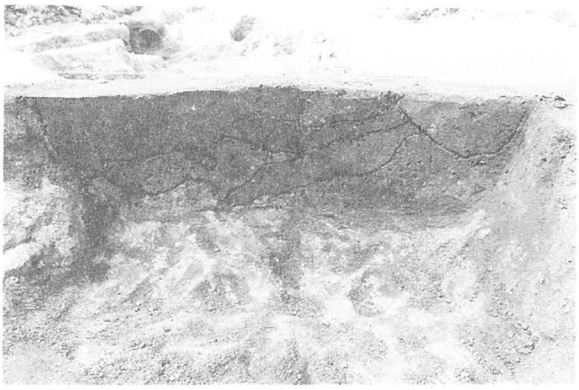


写真22　3号溝土層断面

写真23　2・3・4号溝完掘状態

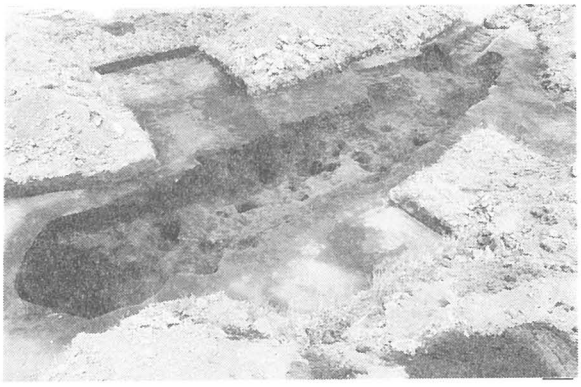


写真24　3号溝完掘状態

写真25　1号不明遺構遺物出土状態

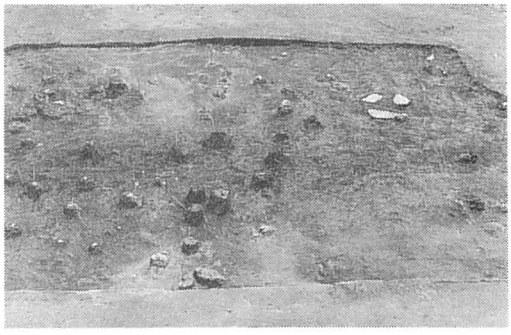


写真26　2号不明遺構遺物出土状態

写真27　7住－1

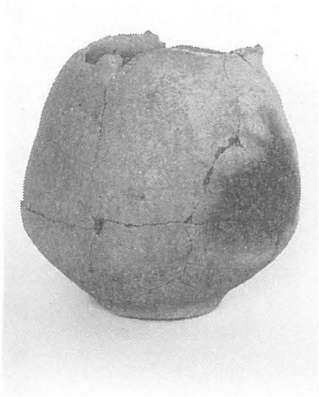


写真28　7住－2

写真29　7住－3

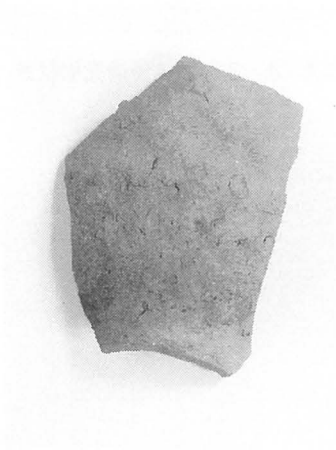


写真30　7住－4

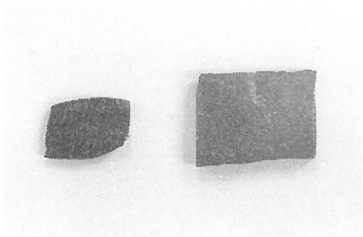


写真31　7住－5・6

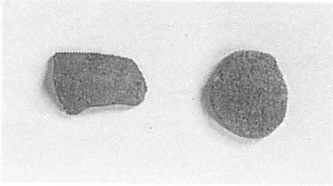


写真32　8住－1・2

写真33　9住－1

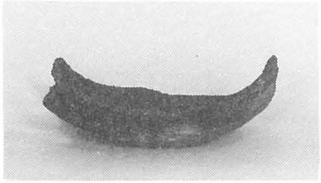


写真34　9住－2

写真35　9住－3

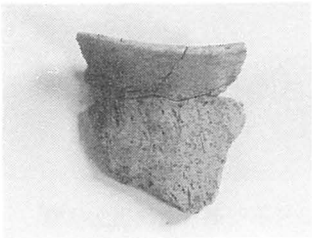


写真36　9住－4

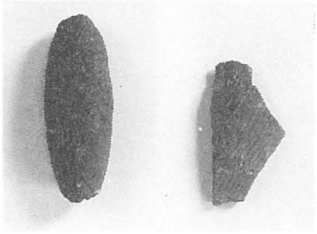


写真37　9住－5・6

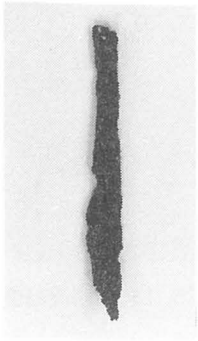


写真38
9住－7

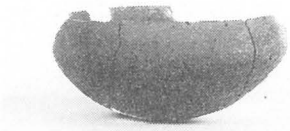


写真39　10住－1

写真40　10住－2

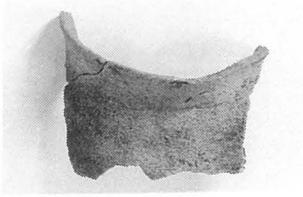


写真41　10住－3

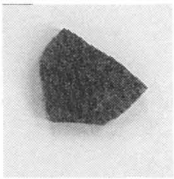


写真42　10住－4

写真43　11住－1

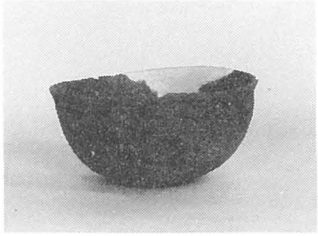


写真44　11住－2

写真45　11住－3

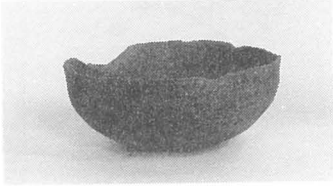


写真46　11住－4

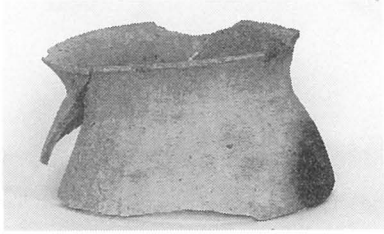


写真48
11住－6

写真47　11住－5

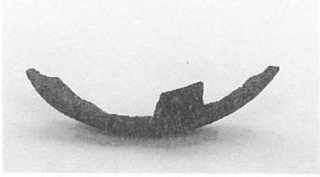


写真49　12住－1

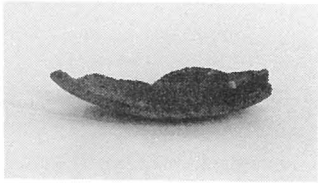


写真50　12住－2

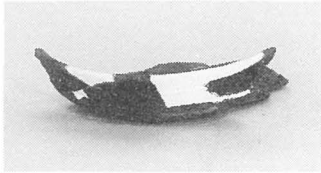


写真51　12住－3

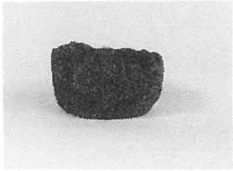


写真52　12住－5

写真53　12住－4

写真54　12住－6

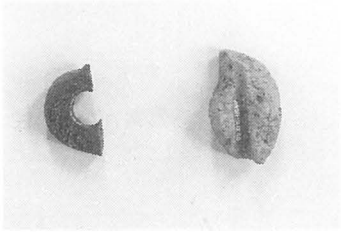


写真55　12住－7・8

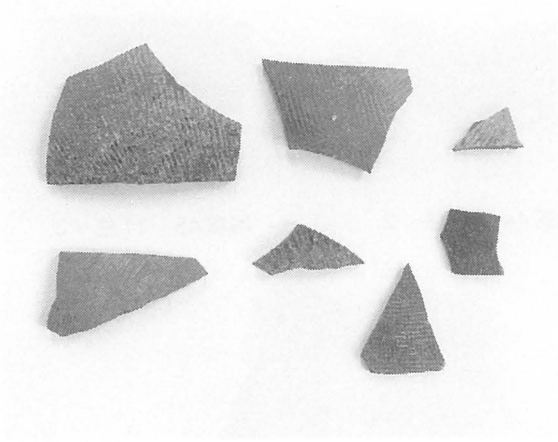


写真56　1号特殊遺構－1～7

写真57　1号特殊遺構－炭化米

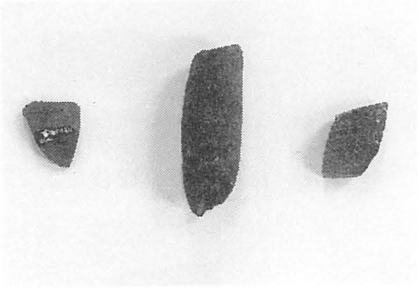


写真58　溝状遺構－1～3

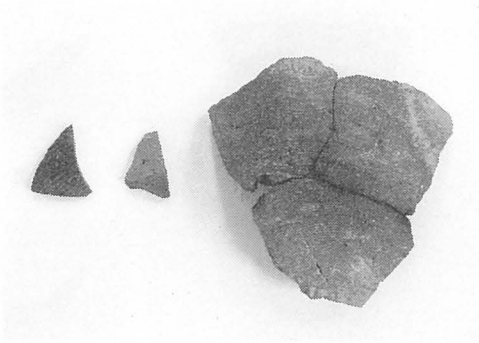


写真59　不明遺構－1～3

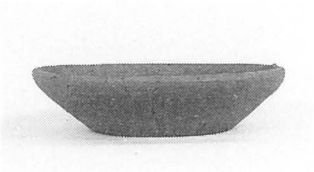


写真60　不明遺構－6

写真63　不明遺構－5

写真61　不明遺構－3

写真62　不明遺構－4

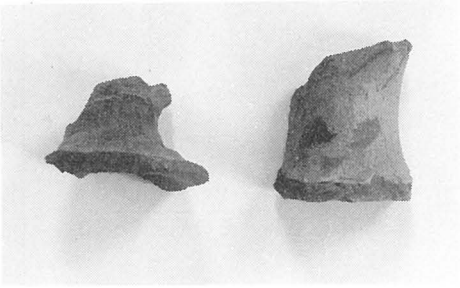


写真64　遺構外－1・2

写真65　遺構外－3

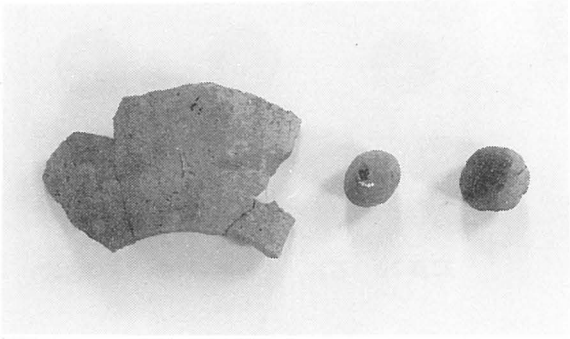


写真66　遺構外－4・5・6

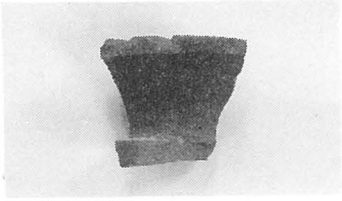


写真67　遺構外－7

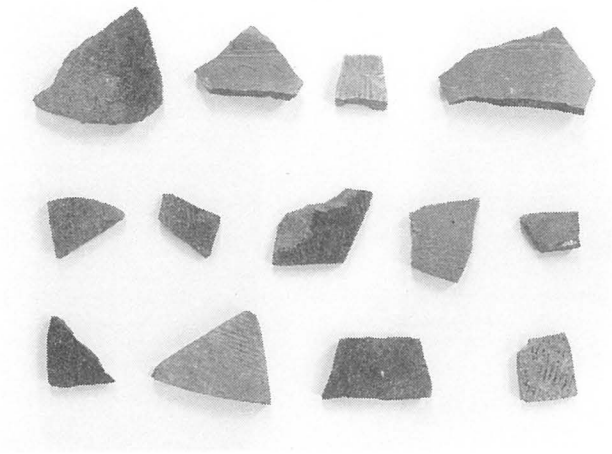


写真68
遺構外－8～20

写真69　石器・その他－1～6

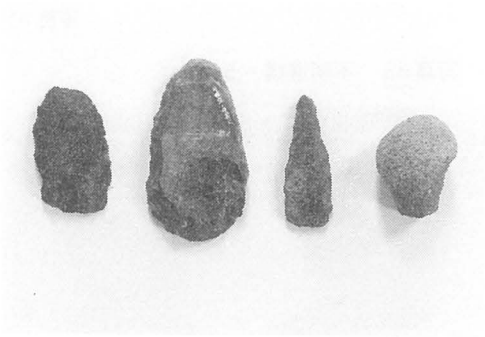


写真70　石器・その他－7～10

写真71　石器・その他－11～15（縄文土器）

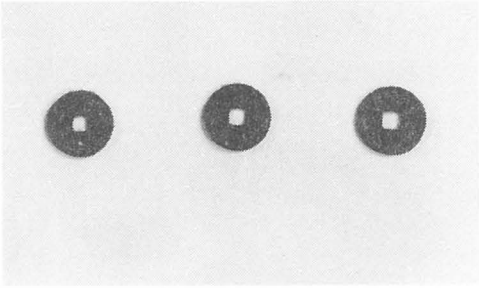


写真72　石器・その他－16～18（古銭）

第Ⅲ章　F地点の調査

1. 調査の概要

F地点は、館林市岡野町字八方23－1にあり、昭和60年、共同住宅建設の事前調査として発掘調査を実施した。本地点は、八方遺跡の中央部のやや南寄りにあたり、調査区のほぼ真ん中が標高約23mで一番高く、東西へとゆるやかに傾斜し開析谷へと続く。

確認調査では、開発予定区域の東部分に幅1.2m、長さ約20mのトレンチを1本、西部分に幅1.2m、長さ約23mのトレンチを1本設定し、遺構確認作業を行った。その結果、東トレンチから遺構と思われる掘り込みが確認できたが、撹乱が著しく、遺構の性格が特定できなかったため、東部分全体の表土除去を行った。

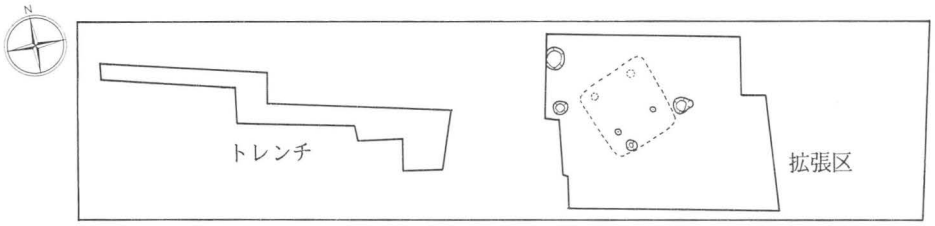
その結果、1軒の竪穴住居（13号住居址）と井戸址3基（4～6号井戸址）の存在が確認された。

このうち13号住居址は調査区の中央部より東斜面にかけて確認され、13号住居址の東に6号井戸址、西に4・5号井戸址が確認された。

本調査は、確認調査に引き続き実施し、13号住居址は出土遺物から古墳時代後期のものであることが明らかになった。また、遺構には伴わないものの、出土した遺物の中には、擂鉢や陶器、硯など中・近世にかけてのものが多いのも特色である。

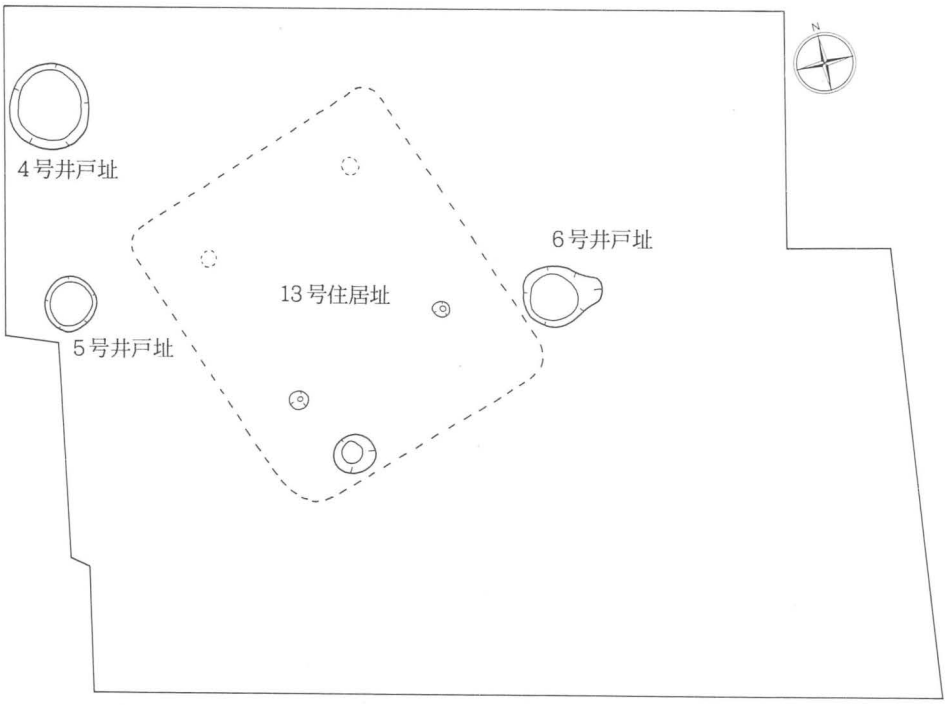
調査区は畑地として使用されていた土地で、土層は、地表面から約30cmが耕作土で、その下からローム層が確認された。しかし、耕作時による撹乱がローム層まで達し、ほとんどの遺構を破壊しているため、調査には困難を極めた。

第37図　F地点位置図



F地点調査区全体図

0　10m



F地点拡張区遺構配置図

0　5m

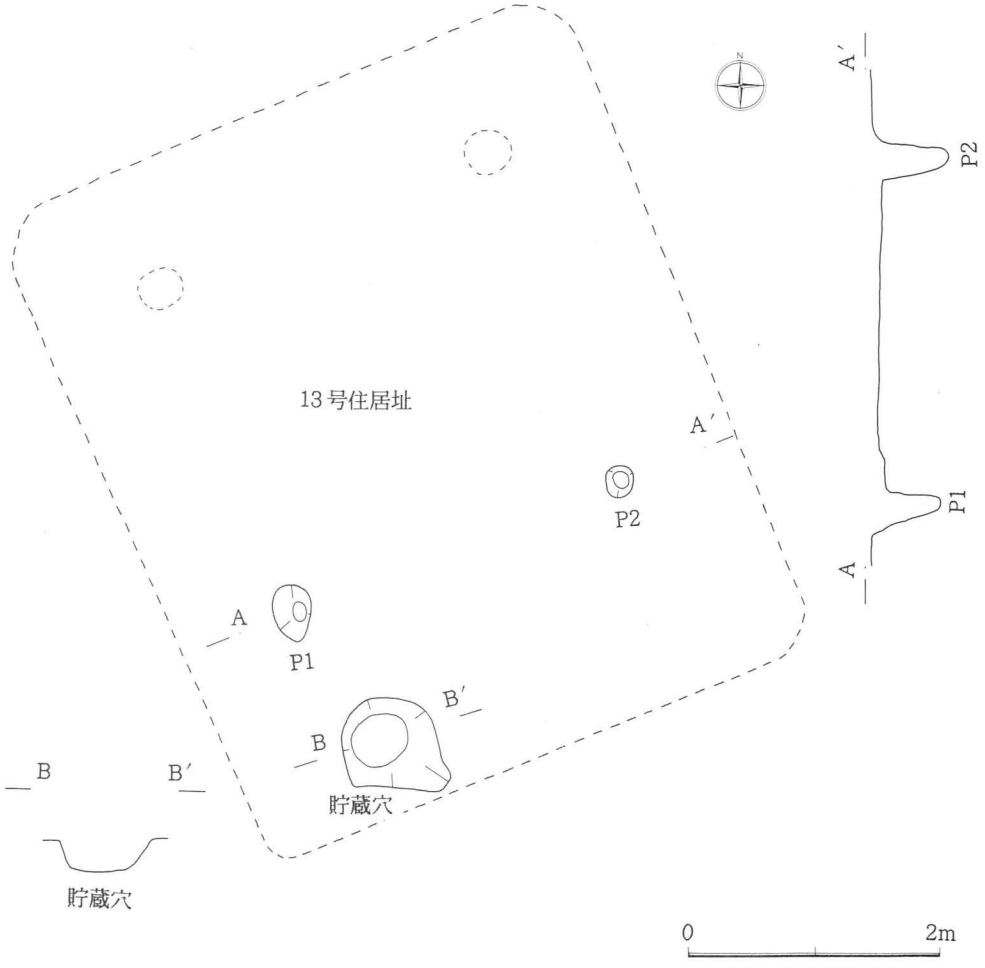
第38図　F地点調査区全体図ならびに遺構配置図

2. 検出された遺構と遺物

(1) 住居址

13号住居址（第39図）

調査区の中央部やや東寄りから検出された。撹乱が著しく、平面形や規模を確認することはできなかったが、柱穴2本と貯蔵穴1基のみ確認できた。貯蔵穴は長軸95cmの楕円形をし、深さが約20cmであった。2本の柱穴の間は約2.8mを測る。

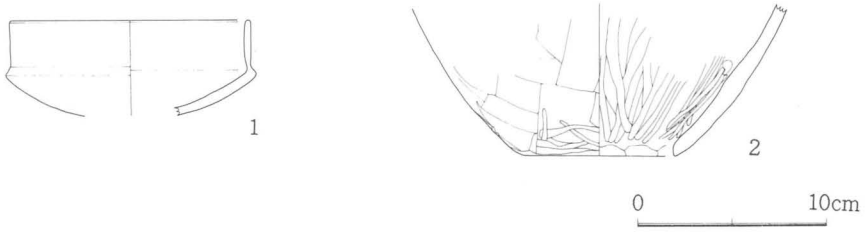


第39図　13号住居址遺構図

13号住居址出土遺物（第40図）

遺物は、貯蔵穴から古墳時代後期の土師器坏（1）、甑（2）等が出土し、実測可能なものは2点であった。各遺物の詳細は次のとおりである。

番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	土師器 坏	口径　12.7	1／4	①橙褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。
2	土師器 甑	底径　8.0	底部	①淡褐色②良 ③細砂粒	外面は篦削り。内面は篦磨き。



第40図　13号住居址出土遺物

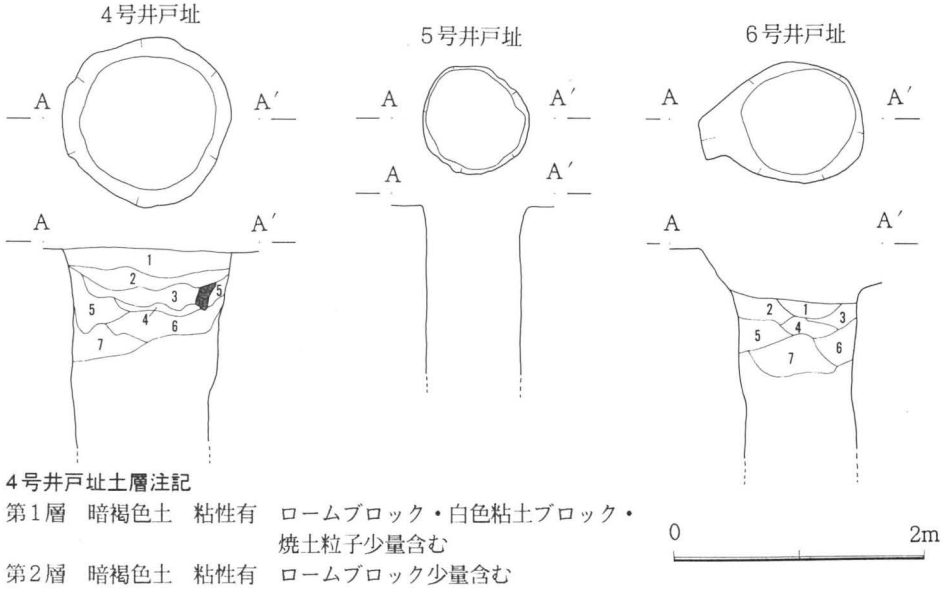
(2) 井戸址

4～6号井戸址（第41図）

4号井戸址は、調査区のほぼ中央部、13号住居址の北西側から検出された。円形で直径は約1.3mを測る。

5号井戸址は、調査区のほぼ中央部、13号住居址の西側から検出された。円形で直径は約85cmを測る。

6号井戸址は、調査区の東部、13号住居址のすぐ東側から検出された。円形で直径は約95cmを測る。



4号井戸址土層注記

第1層　暗褐色土　粘性有　ロームブロック・白色粘土ブロック・焼土粒子少量含む
第2層　暗褐色土　粘性有　ロームブロック少量含む
第3層　黒褐色土　締り有　ロームブロック少量含む
第4層　暗褐色土　締り・粘性有　ロームブロック多量含む
第5層　黄褐色土　締り・粘性有　ロームブロック・ローム粒子多量含む
第6層　暗褐色土　締り有　ローム粒子多量含む
第7層　暗褐色土　締り・粘性有　ロームブロック・ローム粒子多量含む

6号井戸址土層注記

第1層　暗褐色土　締り・粘性無　ローム粒子多量、ロームブロック・白色粘土ブロック少量含む
第2層　暗褐色土　締り・粘性有　ローム粒子多量、ロームブロック・焼土粒子少量含む
第3層　暗褐色土　締り・粘性無　ローム粒子・ロームブロック少量含む
第4層　明褐色土　締り有　ローム粒子多量含む
第5層　明褐色土　締り・粘性無　ローム粒子多量、ロームブロック少量含む
第6層　暗褐色土　粘性有　ローム粒子少量含む
第7層　明褐色土　粘性有　ロームブロック多量含む

第41図　4～6号井戸址遺構図

井戸址出土遺物（第42図）

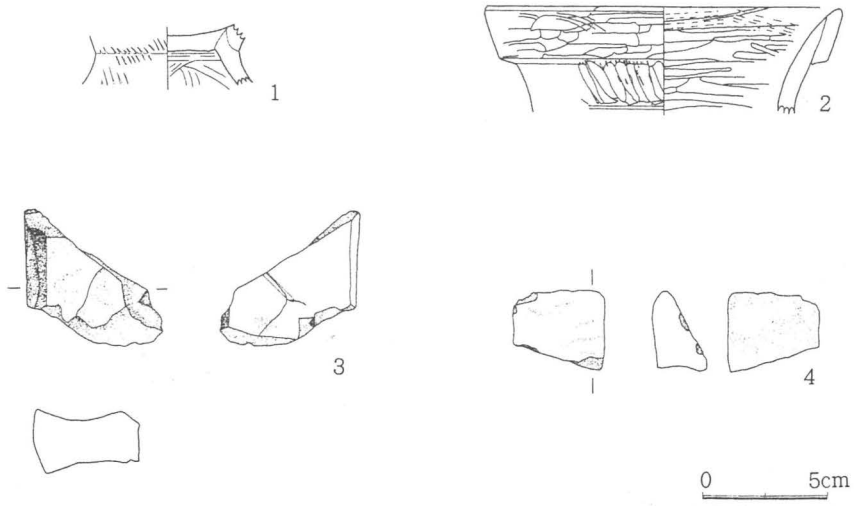
4号井戸址からは、石が比較的多く出土し、石以外では古墳時代以降の土師器台付甕の破片（1）など数点の土器片が出土した。

5号井戸址からは、砥石等の石器類（2・3）が出土。

6号井戸址からは、古墳時代中期の土師器壷の破片（4）などが出土した。

実測可能なものは4点で、各遺物の詳細は次のとおりである。

番号	器 種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	土師器 台付甕		底部	①明赤褐色②良 ③細砂粒	外面は櫛目。胴部内面は篦なで。台部内面は指なで。
2	土師器 壺	口径　14.2	口縁部	①暗褐色②良 ③細砂粒	口縁部ならびに内面は篦磨き。頸部外面は櫛目の後、篦磨き。
3	砥　石	長さ　(5.5) 厚み　(2.5)	破片		
4	砥　石	長さ　(3.5) 厚み　(2.1)	破片		

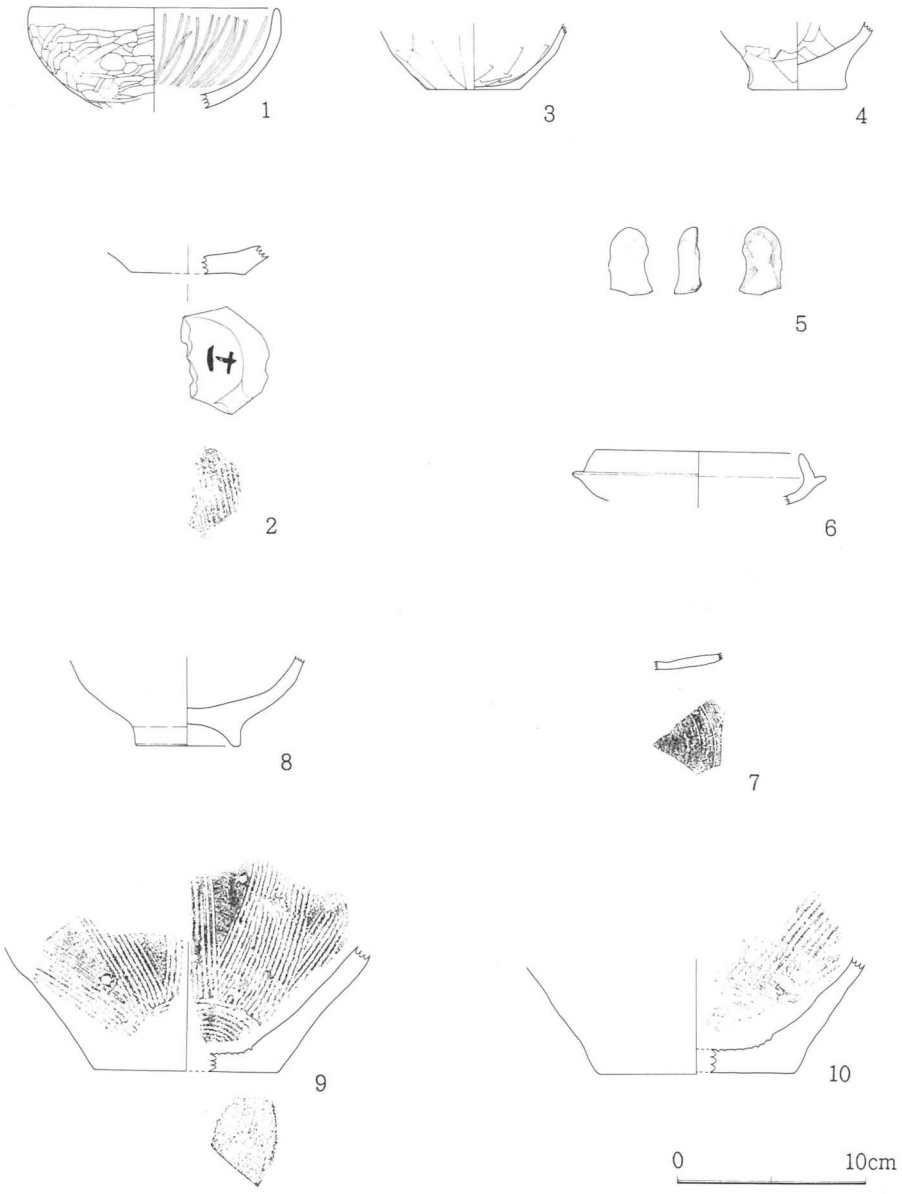


第42図　4～6号井戸址出土遺物

(3) 遺構外出土遺物

調査区域内からは、遺構に伴わずに出土した遺物も多数あり、実測可能なものは10点であった。その内訳は古墳時代後期の土師器坏（1）や須恵器坏（6）など時代を特定できるものの他、古墳時代以降の土師器甕（3・4）、底部に墨書で「十一」と書かれた土師器坏（2）、また、中世以降の遺物として、陶器埦（8）や擂鉢の一部（9・10）なども出土した。各遺物の詳細は次のとおりである。（第43図）

番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	土師器坏	口径　13.0	1／3	①褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は箆削りの後、箆磨き。内面は箆磨き。
2	土師器坏		底部破片	①淡褐色②良 ③細砂粒	底部に平行叩き目があり、その上に墨書「十一」あり。
3	土師器甕		底部破片	①赤褐色②良 ③細砂粒	胴部は箆削り。内面は箆なで。
4	土師器甕		底部破片	①赤褐色②良 ③細砂粒	胴部は箆削り。内面は箆なで。
5	土師質土器		破片	①橙褐色②良 ③細砂粒	指頭痕あり。
6	須恵器坏	口径　10.8	1／4	①暗灰色②還元焔・良 ③細砂粒	ロクロ整形。
7	須恵器坏		底部破片	①暗灰白色②還元焔・良 ③細砂粒	ロクロ整形。底部に回転箆削り痕。
8	陶器埦	底径　5.4	底部	①淡褐色②良 ③細砂粒	ロクロ整形。表面に青緑色の釉がかかる。
9	擂鉢		底部破片	①淡褐色②還元焔 ③砂粒	ロクロ整形。表面に暗褐色釉がかかる。内面に平行な掻目あり。
10	擂鉢		底部破片	①淡褐色②還元焔 ③細砂粒	ロクロ整形。表面に暗褐色釉がかかる。内面に平行な掻目あり。



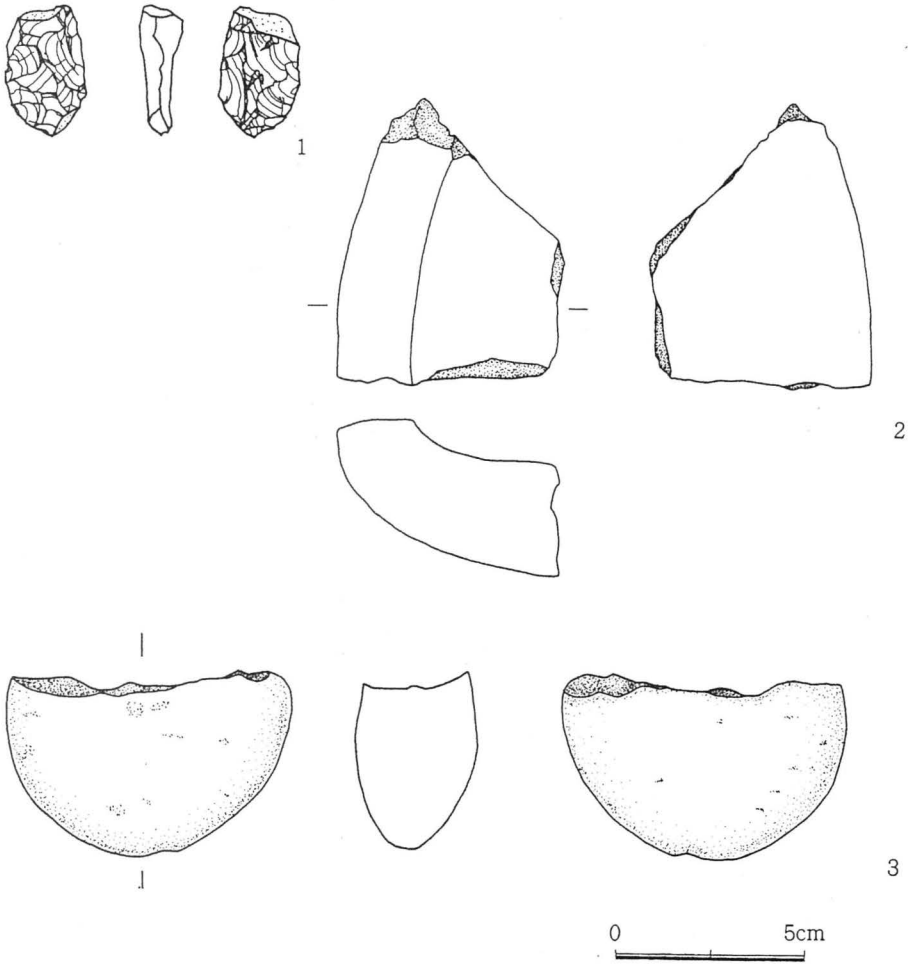
第43図　遺構外出土遺物

(4) 石器・その他の遺物

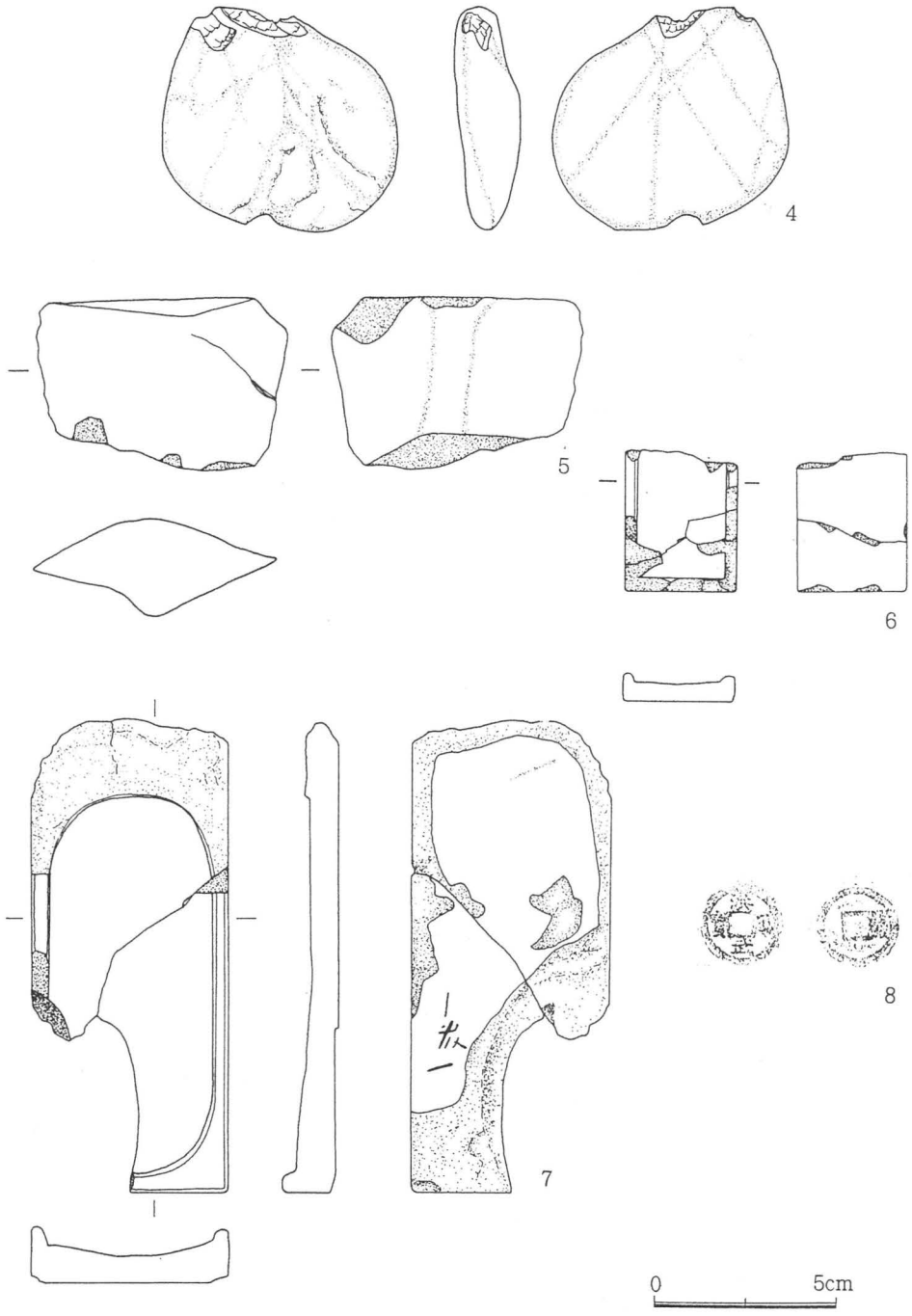
本遺跡からは、実測可能な石器が7点（スクレーパー、石皿、磨石、石錘、砥石、硯）の他、近世の古銭1点が出土している。

石器の内容は、1がスクレーパーで、石材はチャートである。2は石皿、3は磨石、4は石錘、5は砥石、6・7は硯である。2～4の石材は凝灰岩質である。

近世の古銭は銅銭で、内容は「洪武□寳」(8) である。(第44・45図)



第44図　石器・その他の遺物 (1)



第45図　石器・その他の遺物（2）

写真73　F地点調査区全景

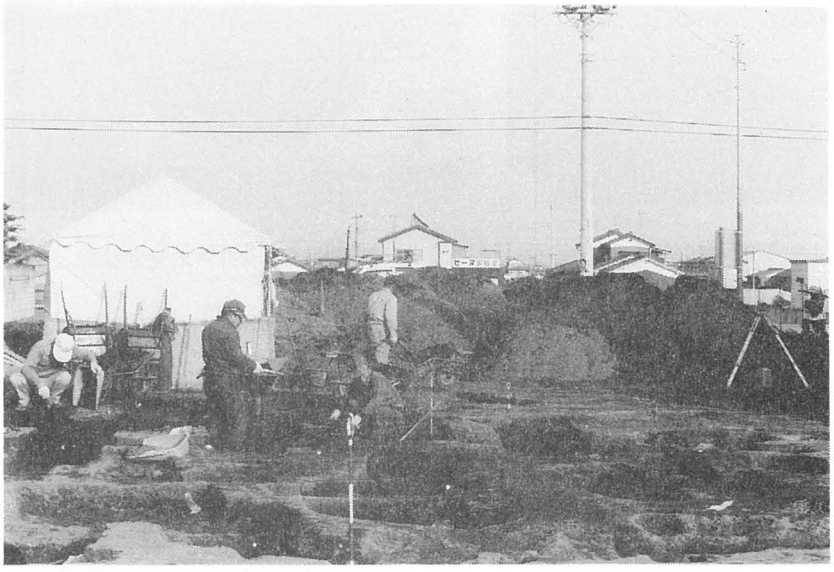


写真74　F地点調査風景

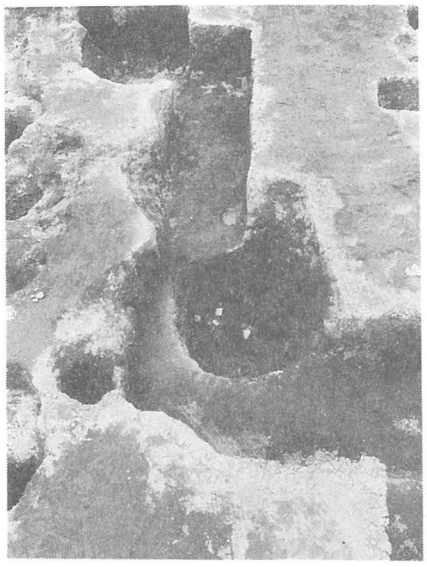


写真75　13号住居址貯蔵穴付近

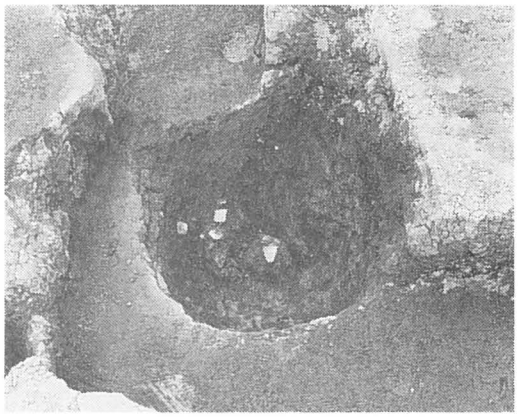


写真76　13号住居址貯蔵穴遺物出土状態

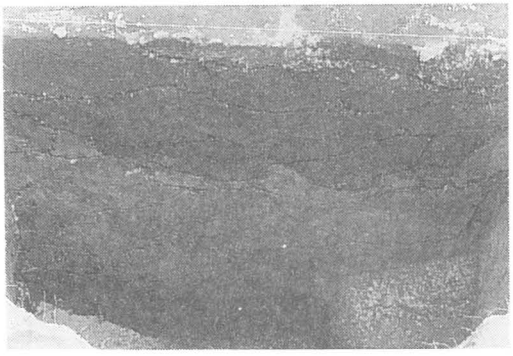


写真77　4号井戸址土層断面

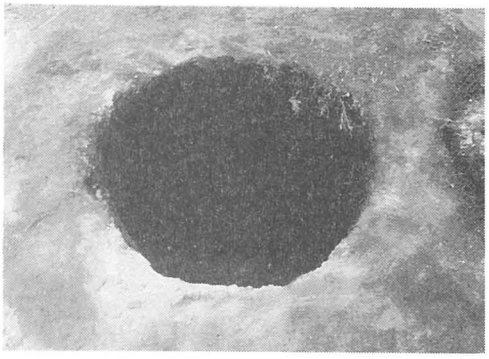


写真78　4号井戸址完掘状態

写真79　6号井戸址土層断面

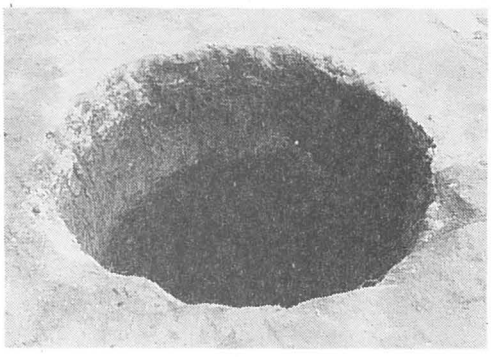


写真80　6号井戸址完掘状態

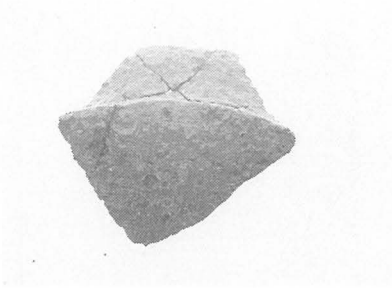


写真81　13住－1

写真82　13住－2

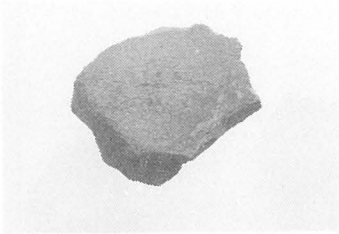


写真83　井戸址－1（4号井戸址）

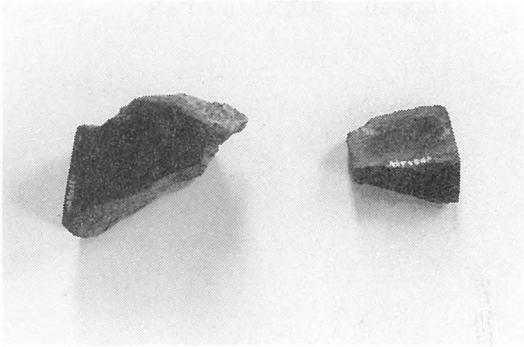


写真85　井戸址－3・4（5号井戸址）

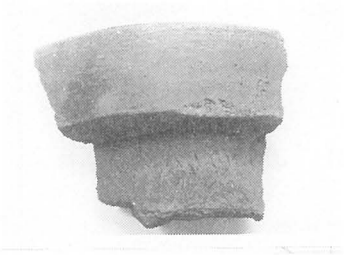


写真84　井戸址－2（6号井戸址）

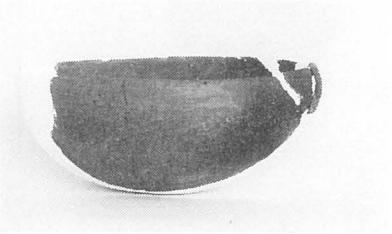


写真86　遺構外－1

写真87　遺構外－2

写真89　遺構外－5

写真88
遺構外－3・4

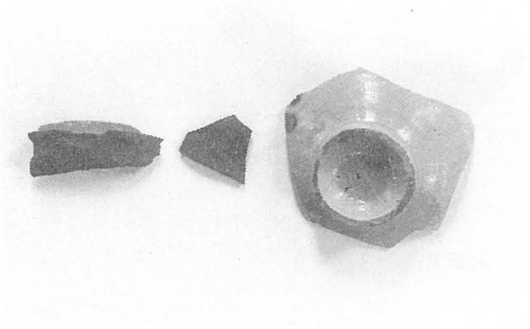


写真90　遺構外－6・7・8

写真91　遺構外－9・10

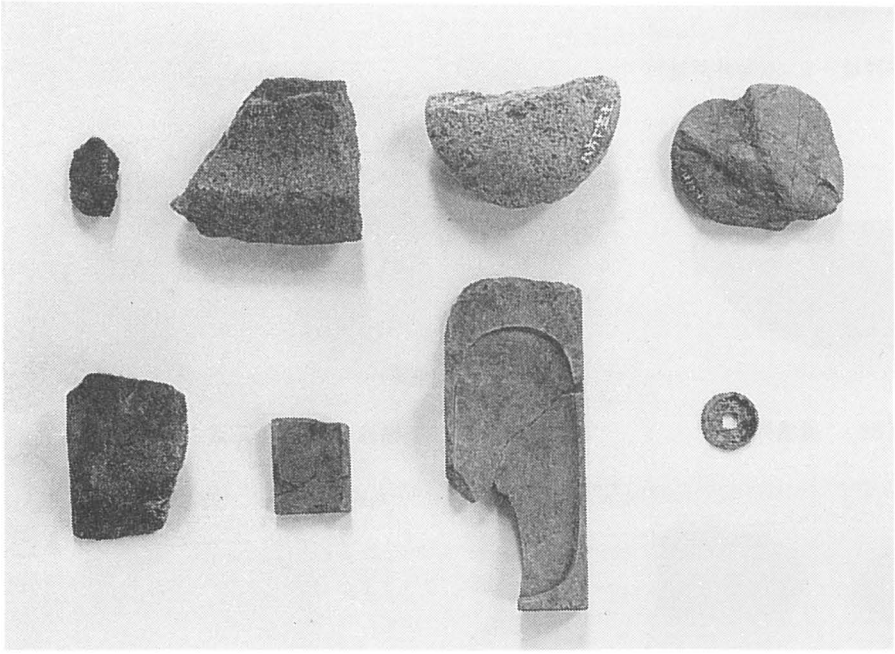


写真92　石器・その他の遺物

第Ⅳ章　J地点の調査

1. 調査の概要

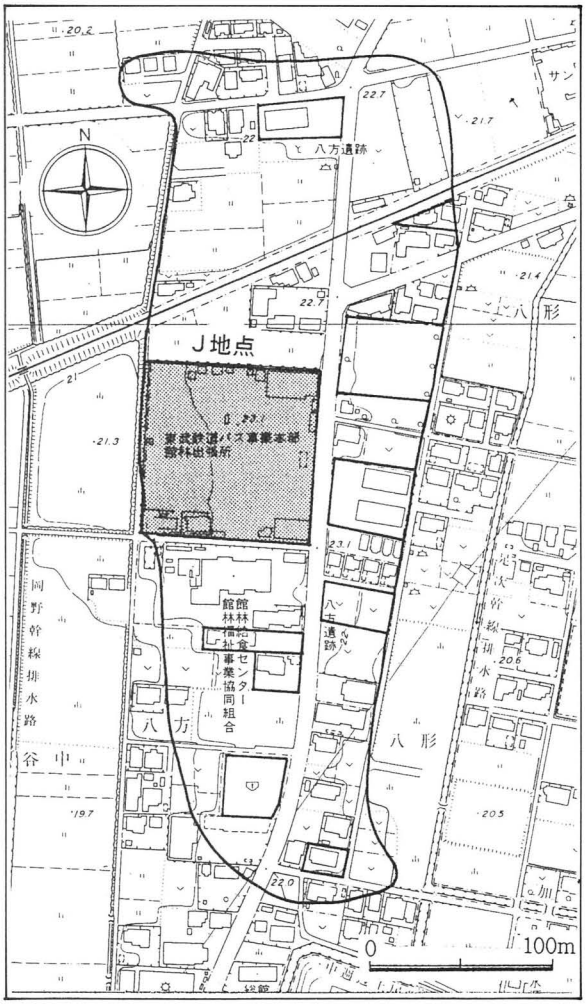
J地点は、館林市坂下町字八形27－1にあり、平成8年、住宅団地建設の事前調査として発掘調査を実施した。本地点は、八方遺跡のほぼ中央部にあたり、標高約23mの高さにある。西へとゆるやかに傾斜し、遺跡地の西側は開析谷へと続く。

確認調査では、開発予定区域に、幅1m、長さ70m前後の東西方向のトレンチを16本、幅1m、長さ約20mと6mの南北方向のトレンチを各1本、合計18本のトレンチを設定し、遺構確認作業を行った。その結果、調査区の南部分の1～3トレンチ内から、遺構と思われる掘り込みが確認できたため、1～3トレンチ周辺の約700㎡の表土除去を行った。

その結果、拡張区の東部分より、2軒の竪穴住居（1・2号住居址）や土坑（1～10号土坑）、溝状遺構（1号溝）などの存在が確認された。

本調査は、確認調査に引き続き実施し、2軒の竪穴住居（1・2号住居址）は出土遺物から古墳時代後期のものであることが明らかになった。また、土坑10基のうち、1号土坑は大型の円形有段遺構となり、古墳時代後期の遺物を共伴し、5～8・10号土坑は井戸址であることが確認できた。さらに1号溝からは中世の板碑や内耳鍋の一部が出土した。

なお、確認調査の際に、各トレンチからは、遺構は確認できなかったものの古墳時代後期の遺物も多数出土し、さらには、調査区の中央から北部分にかけての9～15トレンチから、13基の井戸址も確認された。この他、縄文時代の遺物も少量出土している。

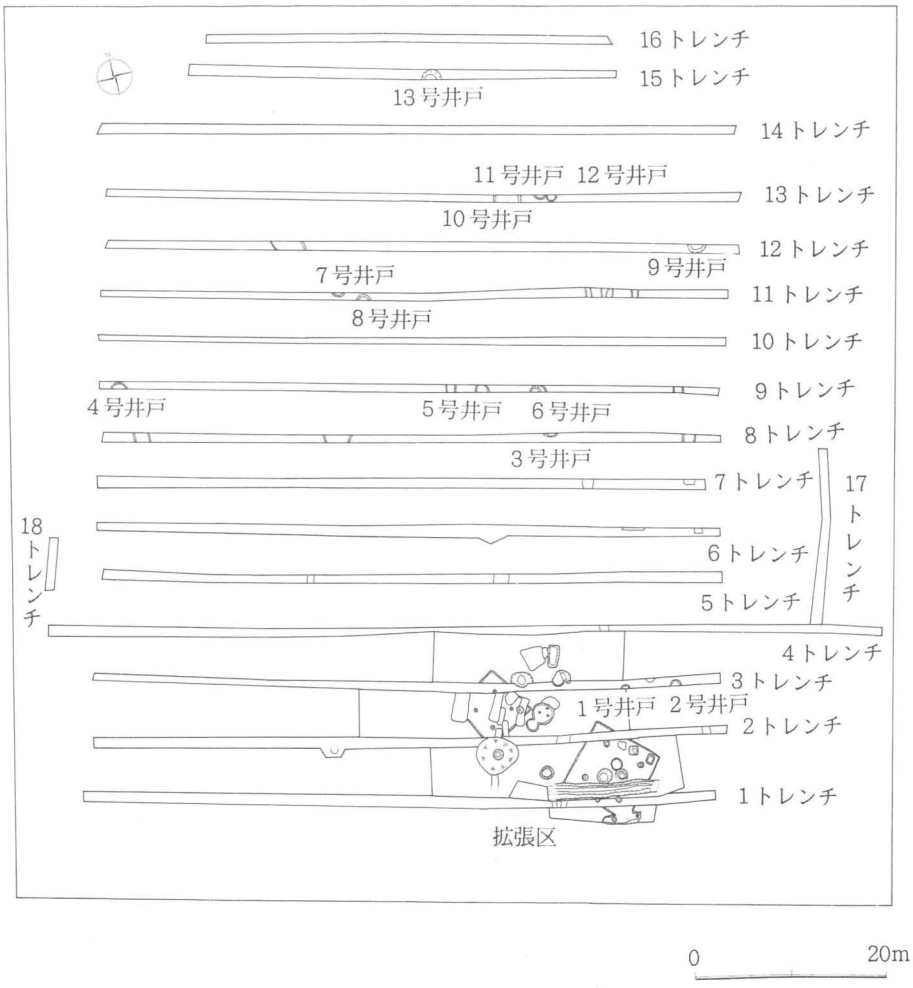


第46図　J地点位置図

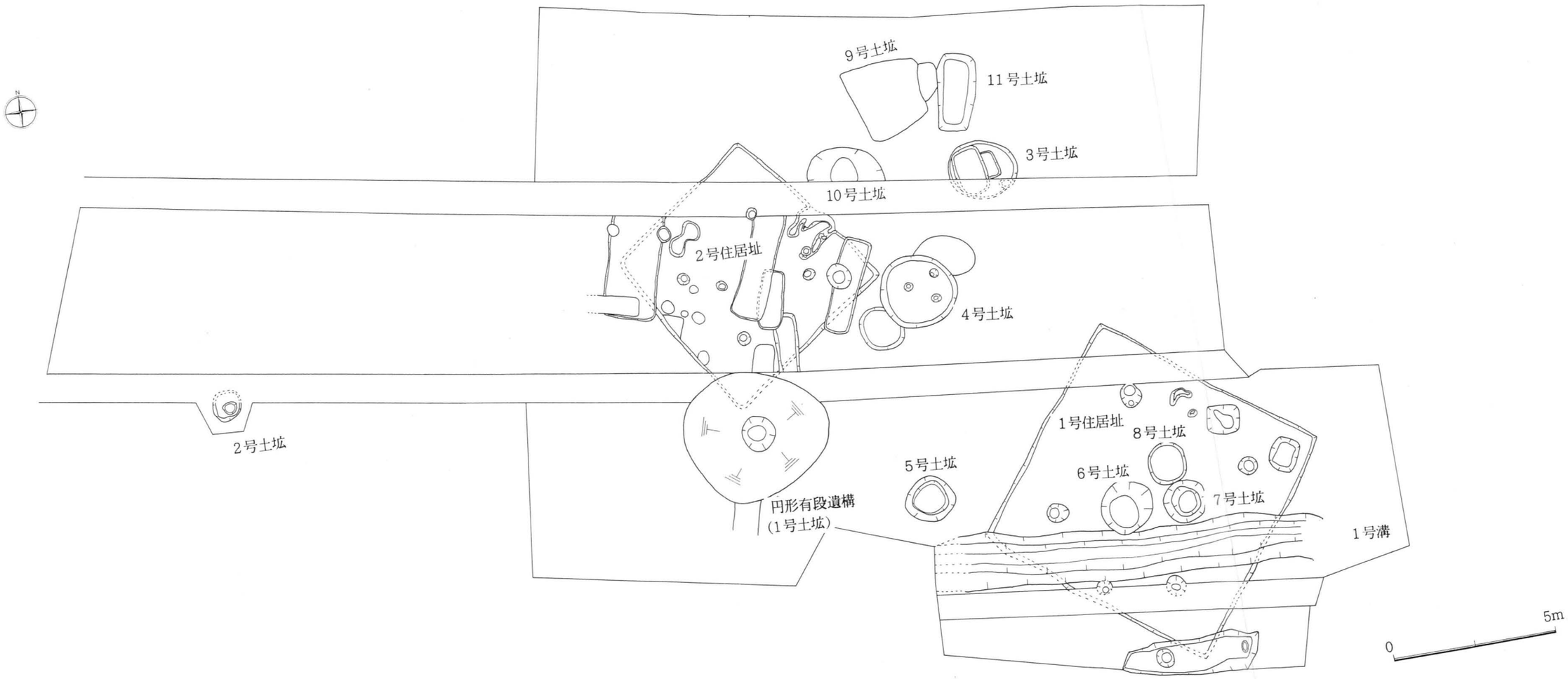
調査区は、昭和50年以前より民間会社の駐車施設として使用されていた土地で、地表面は大規模な土地改変が行われ、現況の地表面はズリによって覆われていた。

土層は、2トレンチの東部分で地表面から約40cmがズリによる客土であったが、さらにその下に約30cmの暗褐色土層があり、その下からローム層が確認された。しかし、2トレンチの西部分では、ズリによる客土は約15cmで、その下からローム層が確認されたことから、調査区東部分は比較的地下の保存状態が良好なものの、西部分はローム層まで土地改変が達していたことがわかる。

こうしたことから、調査区域内の遺構破壊はすでに進んでいたとも予想され、検出された遺構以外に、広い範囲で多数の遺構が存在していたことが考えられる。



第47図　J地点調査区全体図



第48図　J地点拡張区遺構配置図

2. 検出された遺構と遺物

(1) 住居址

1号住居址（第49図）

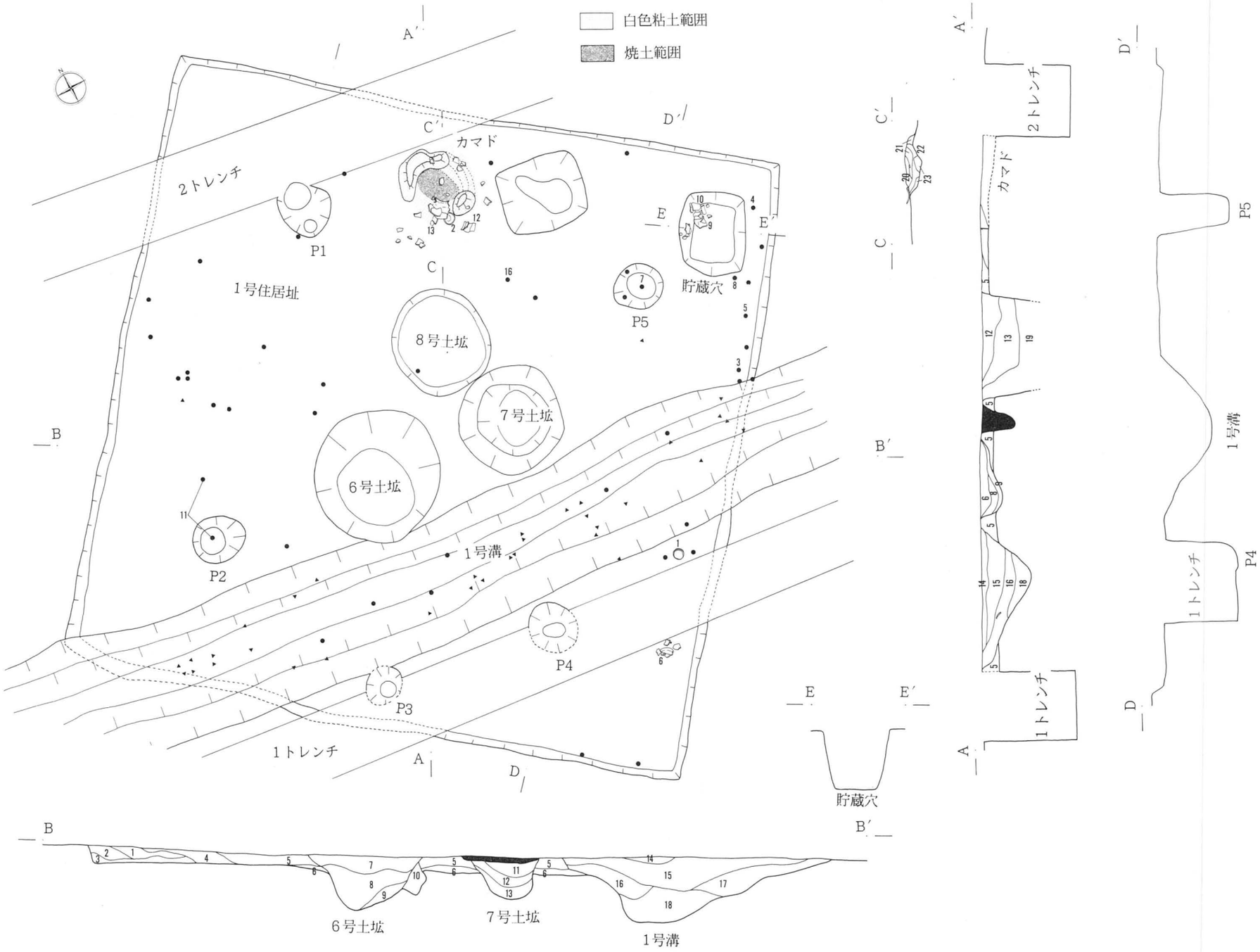
調査区の南東部から検出された。約7.9×7.7mのほぼ正方形をした大型の住居で、方位は北東40°である。壁高は約11～20cmを残す。住居内は撹乱が著しく、井戸址3基（6・7・8号土坑）と1号溝により住居内の一部が破壊されているが、床面はほぼ全面に比較的良く残されている。北東壁の中央部からカマドが検出され、壁より約40cm内側に、全長67cm、袖幅1.05mが残されていた。また、焚き口には焼土や焼成灰、炭化物等が認められた。柱穴は5本で、4本は住居の平面形に相似する形で、1本はカマドと反対側の南西壁内側のほぼ中央部から検出された。貯蔵穴は、住居の東隅に1基確認でき、約1m×80cmの長方形をし、深さが約72cmであった。壁溝は検出されていない。

1号住居址出土遺物（第50・51図）

遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕・甑、須恵器甕等が出土し、実測可能なものは18点であった。このうち、カマドの焚き口付近から土師器坏（2）、土師器甕（12・13）、土師器甑（16）が出土し、貯蔵穴からは土師器甕（9・10）が出土し、東隅の柱穴から土師器甕（7）、西隅の柱穴から土師器甕（11）が出土した。また、住居の南壁付近の床面上から土師器坏（1・3～6）、土師器甕（8）が出土。各遺物の詳細は次のとおりである。

番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	土師器坏	口径 13.6 器高 5.0	完形	①赤褐色②良 ③砂粒	口縁部横なで後、篦磨き。体部は篦削り。内面は篦磨き。
2	土師器坏	口径 12.5 器高 5.2	完形	①赤褐色②良 ③砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。内面は篦磨き。
3	土師器坏	口径 13.0 器高 4.5	3／5	①明赤褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。内面は篦磨き。
4	土師器坏	口径 12.0 器高 5.1	3／5	①赤褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。内面は篦磨き。
5	土師器坏	口径 12.0 器高 4.6	1／2	①明灰褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。内面は篦磨き。

番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
6	土師器 坏	口径　12.5 器高　5.6	3／5	①明赤褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。
7	土師器 甕	口径　14.4 器高　(8.3)	口縁部	①淡赤褐色②良 ③砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削り。内面は篦なで。
8	土師器 甕	口径　14.8 器高　(8.3)	口縁部	①明灰褐色②良 ③砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削り。内面は篦なで。
9	土師器 甕	口径　16.0 器高　(7.5)	口縁部	①淡赤褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削り。内面は篦なで。
10	土師器 甕	口径　18.0 器高　(18.5)	2／5	①淡褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削りの後、一部指なで。内面は篦なで。
11	土師器 甕	口径　11.8 器高　(15.0)	1／3	①黒褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削りの後、指なで。内面は篦なで。
12	土師器 甕	口径　15.5 器高　(14.8)	1／4	①淡赤褐色②良 ③砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削り。内面は篦磨き。
13	土師器 甕	口径　18.2 器高　(23.0)	1／2	①黄褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削り。内面は篦なで。
14	土師器 甑	口径　23.6 器高　(10.3)	口縁部	①淡褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削り。内面は篦磨き後、指なで。
15	土師器 甑	底径　8.6 器高　(11.3)	底部	①淡褐色②良 ③粗砂粒	胴部は篦削り。内面は篦なでの後、篦磨き。
16	土師器 甑	底径　7.5 器高　(11.2)	底部	①灰褐色②良 ③粗砂粒	胴部は篦削り。内面は篦なでの後、底部周辺は篦磨き。
17	土師器 甕		底部 破片	①赤褐色②良 ③粗砂粒	底部に木葉痕あり。
18	須恵器 甕		胴部 破片	①暗灰白色②還元焔・良 ③細砂粒	外面、内面とも平行叩き目。

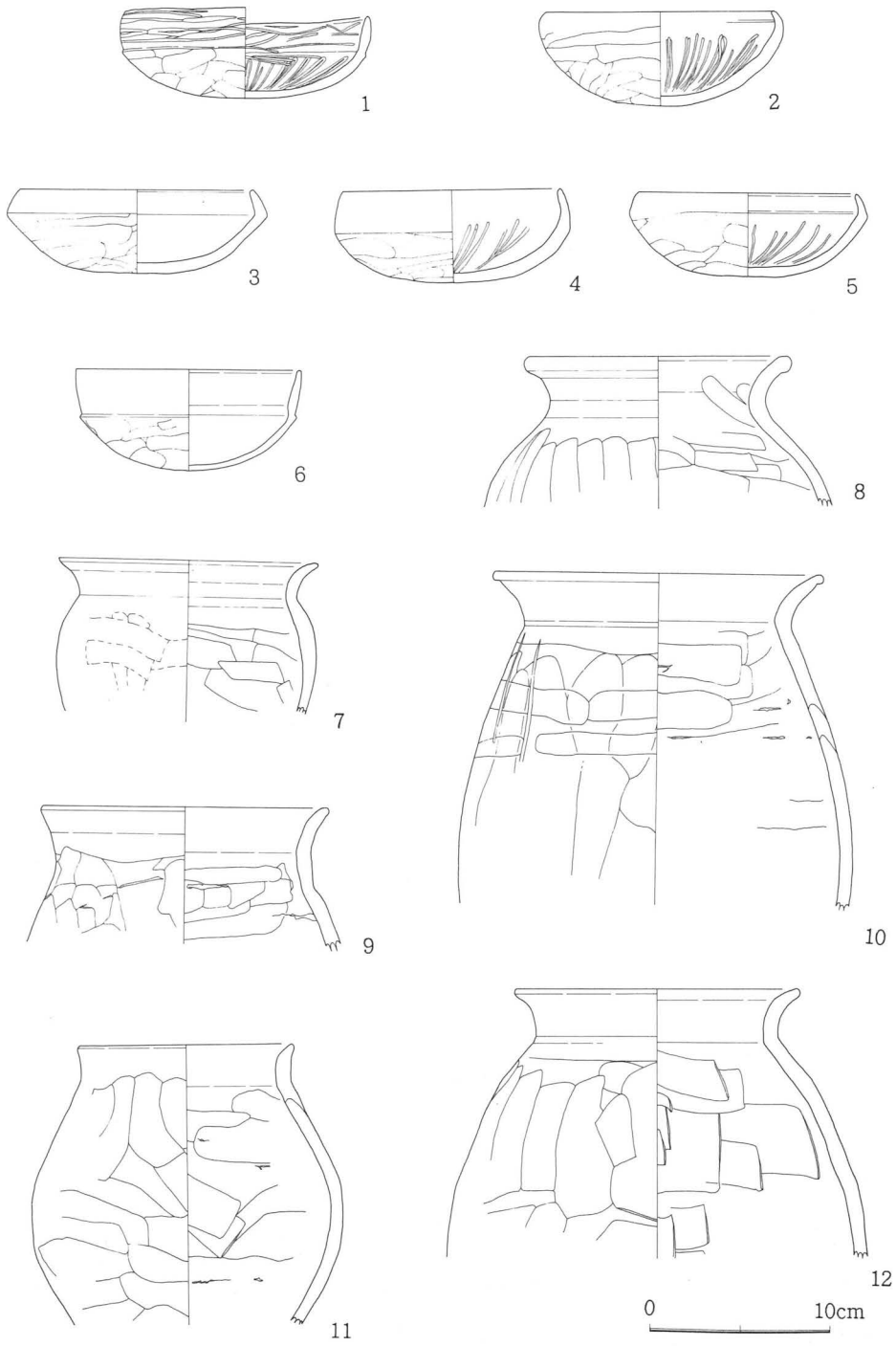


1号住居址土層注記

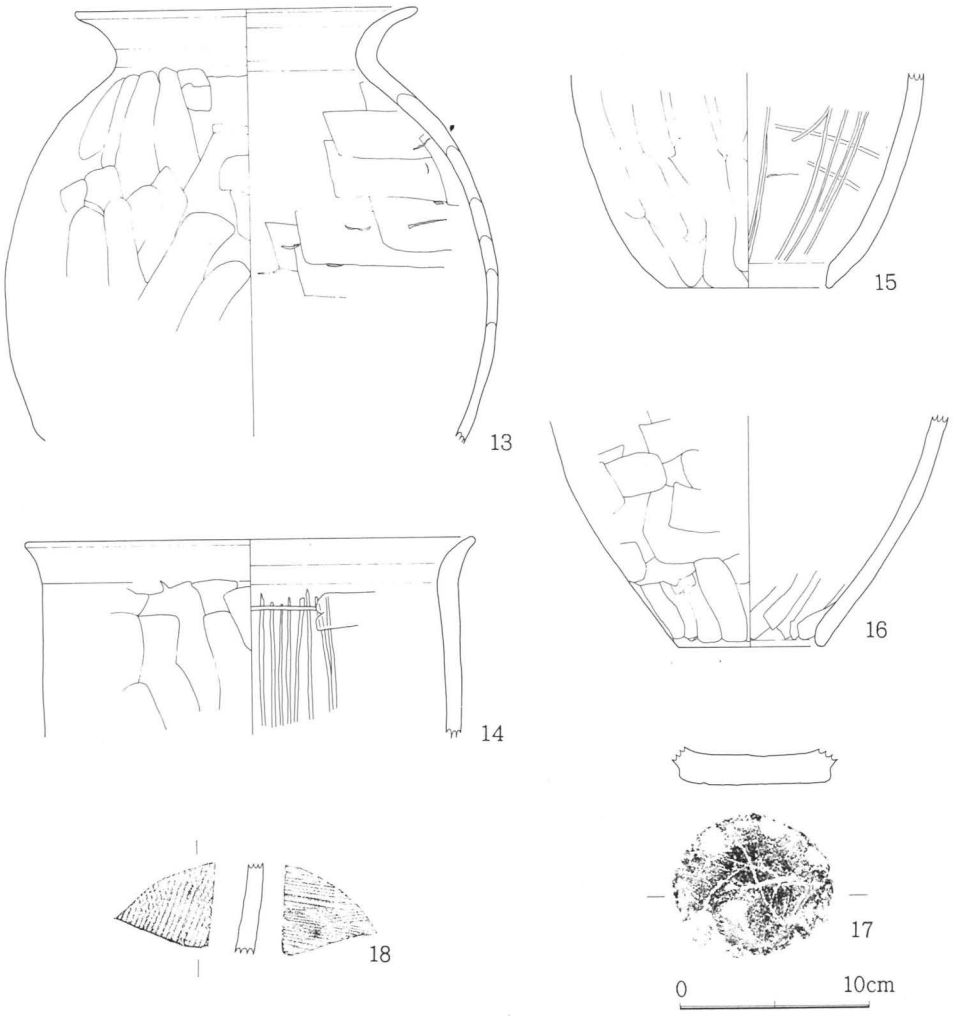
第1層　明褐色土　締り有
　　ローム粒子・焼土粒子多量含む
第2層　明褐色土　締り有
　　ローム粒子多量含む
第3層　黄褐色土　締り・粘性有
　　ロームブロック・ローム粒子多量含む
第4層　明褐色土
　　ローム粒子多量含む
第5層　暗褐色土　締り有
　　ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子少量含む
第6層　黄褐色土　締り・粘性有
　　ロームブロック多量含む
第7層　暗褐色土　締り・粘性有
　　ローム粒子多量、白色粘土ブロック少量含む
第8層　黒褐色土　締り有
　　ロームブロック・ローム粒子少量含む
第9層　明褐色土
　　ロームブロック・ローム粒子多量含む
第10層　褐色土　締り有
　　ロームブロック多量含む
第11層　暗褐色土　締り有
　　ローム粒子・白色粘土粒子多量含む
第12層　暗褐色土　締り有
　　ロームブロック・ローム粒子少量含む
第13層　黒褐色土　締り有
　　ローム粒子少量含む
第14層　褐色土　締り・粘性有
　　ロームブロック・ローム粒子多量含む
第15層　黒色土　締り・粘性有
　　ローム粒子微量含む
第16層　黒褐色土　締り有
　　ローム粒子・焼土粒子少量含む
第17層　暗褐色土
　　ローム粒子多量含む
第18層　黒褐色土
　　ローム粒子少量含む
第19層　灰白色土　締り・粘性有
　　白色粘土層
第20層　赤褐色土　締り有
　　焼土ブロックと白色粘土の混合
第21層　灰褐色土　締り有
　　白色粘土層　焼土粒子多量含む
第22層　赤色土
　　焼土純層
第23層　灰黄褐色土　締り・粘性有
　　白色粘土・ロームブロック・焼土粒子多量含む

0　2m

第49図　1号住居址遺構図



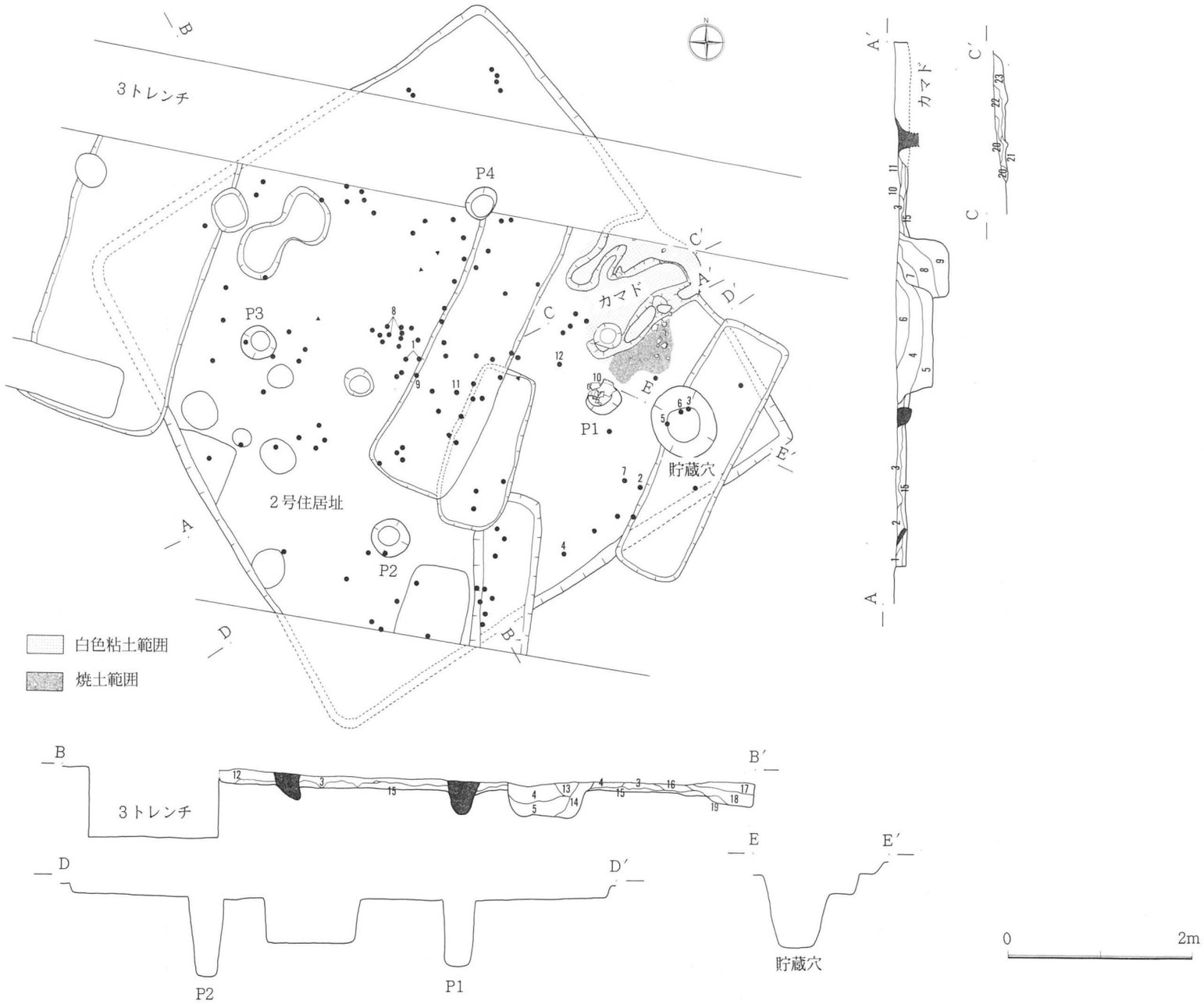
第50図　1号住居址出土遺物（1）



第51図　1号住居址出土遺物（2）

2号住居址（第52図）

調査区の南東部から検出された。南隅を1号土坑（円形有段遺構）によって切られている。約5.7×5.8mのほぼ正方形をし、方位は北東57°である。壁高は約14～18cmを残す。住居内は撹乱が著しいが、床面はほぼ全面に比較的良く残されている。北東壁のほぼ中央部からカマドが検出され、全長1.5m、袖幅1.2mが残されていた。また、焚き口には焼土や焼成灰、炭化物等が認められた。柱穴は4本検出された。貯蔵穴は、住居の東隅に1基確認でき、長軸約80cmの楕円形をし、深さが約20cmであった。壁溝は検出されていない。



2号住居址土層注記

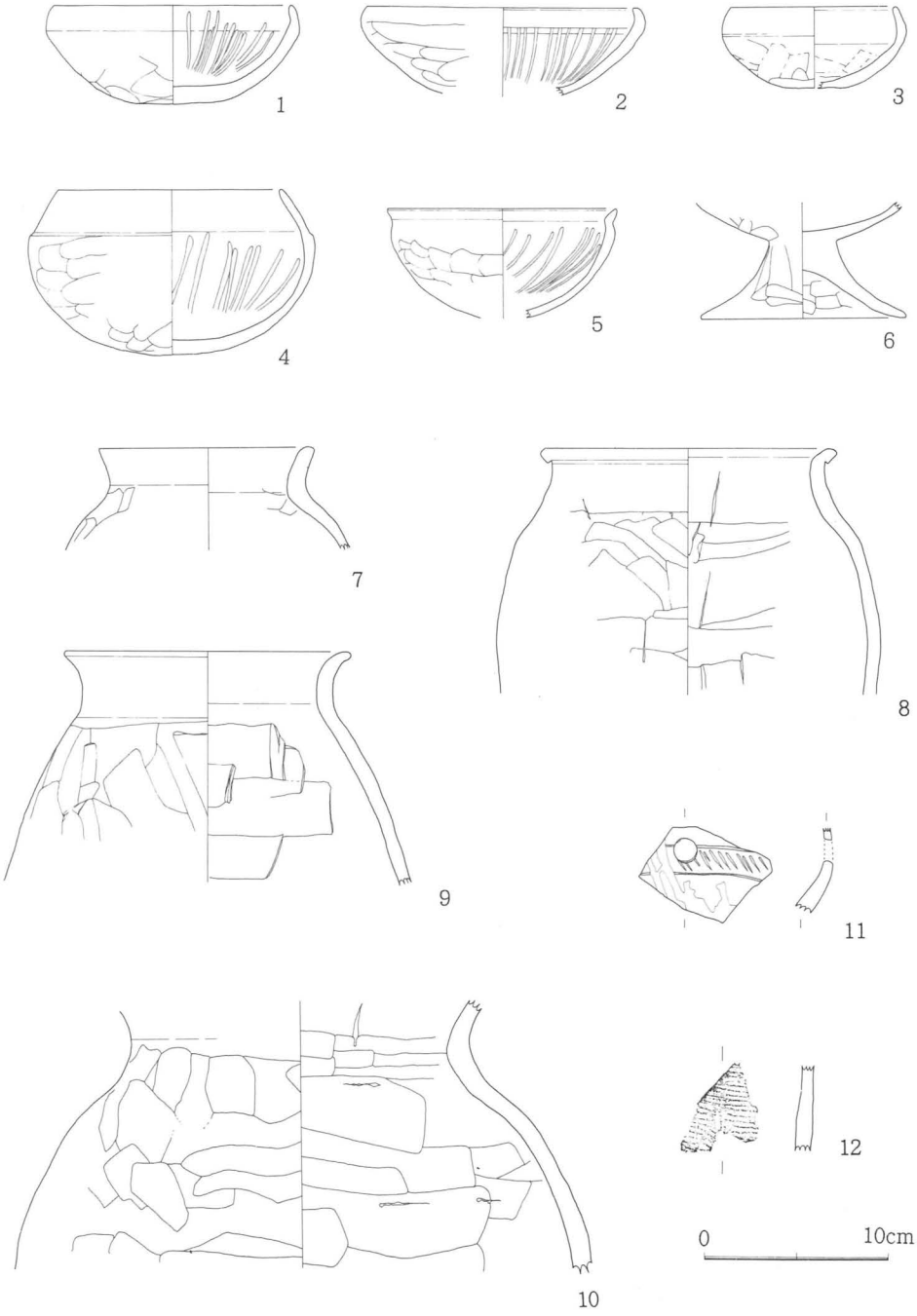
第1層　暗褐色土　締り有
　　ローム粒子多量、焼土粒子少量含む
第2層　明褐色土　締り・粘性有
　　ローム粒子多量含む
第3層　暗褐色土　締り・粘性有
　　ローム粒子多量、焼土・カーボン粒子少量含む
第4層　暗褐色土　締り有
　　ロームブロック少量、焼土・カーボン粒子少量含む
第5層　暗褐色土　締り有
　　ローム粒子少量含む
第6層　黒褐色土　締り有
　　ローム粒子・焼土・カーボン粒子少量含む
第7層　黒褐色土　締り有
　　ロームブロック・焼土・カーボン粒子少量含む
第8層　黒褐色土　締り有
　　ロームブロック少量含む
第9層　明褐色土　締り・粘性有
　　ロームブロック多量含む
第10層　明褐色土　締り有
　　焼土粒子多量含む
第11層　明褐色土　締り・粘性有
　　ロームブロック・焼土粒子多量含む
第12層　暗褐色土　締り有
　　ローム粒子多量含む
第13層　灰褐色土　締り有
　　砂粒子多量、焼土粒子少量含む
第14層　暗褐色土　締り有
　　ロームブロック多量、カーボン粒子少量含む
第15層　明褐色土　締り・粘性有
　　ロームブロック少量、焼土粒子多量含む
第16層　暗褐色土　締り有
　　砂粒子多量、焼土・カーボン粒子少量含む
第17層　暗褐色土　締り有
　　砂粒子・焼土・カーボン粒子少量含む
第18層　明褐色土　締り有
　　ローム粒子・焼土・カーボン粒子少量含む
第19層　明褐色土　締り・粘性有
　　ローム粒子・ロームブロック少量含む
第20層　灰褐色土　締り・粘性有
　　焼土ブロック・粘土ブロック・カーボン粒子
　　多量含む
第21層　赤褐色土　締り有
　　焼土純層
第22層　赤褐色土　締り・粘性有
　　焼土ブロック・焼土粒子多量含む
第23層　黄褐色土　締り・粘性有
　　焼土粒子・粘土粒子多量含む

第52図　2号住居址遺構図

2号住居址出土遺物（第53図）

遺物は、古墳時代後期の土師器坏・埦・高坏・甕、須恵器𤭯等が出土し、実測可能なものは12点であった。このうち、カマドの焚き口付近から土師器甕（10）が、貯蔵穴からは土師器坏（3）、土師器埦（5）、土師器高坏（6）が出土した。また、住居のほぼ中央部の床面上から土師器坏（1）、土師器甕（8・9）、須恵器𤭯（11）が、住居の南東壁付近の床面上から土師器坏（2）、土師器埦（4）が出土。各遺物の詳細は次のとおりである。

番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	土師器 坏	口径　6.7 器高　5.3	1／2	①赤褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。 内面は篦磨き。
2	土師器 坏	口径　14.8 器高　(4.7)	1／5	①赤褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。 内面は篦磨き。
3	土師器 坏	口径　9.0 器高　4.4	1／2	①淡橙色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。 内面は篦なで。
4	土師器 埦	口径　12.4 器高　9.0	1／4	①暗赤褐色②良 ③砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。 内面は篦磨き。
5	土師器 埦	口径　12.7 器高　(5.9)	1／2	①淡赤褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。 内面は篦磨き。
6	土師器 高坏	底径　11.2 器高　(6.3)	2／3	①淡橙色②良 ③粗砂粒	坏部、脚部とも外面は篦削り。 内面は篦なで。裾部指なで。
7	土師器 甕	口径　11.6	口縁部	①茶褐色②良 ③細砂粒、金雲母粒	口縁部横なで。胴部は篦削り。 内面は篦なで。
8	土師器 甕	口径　16.0 器高　(13.5)	1／5	①淡褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削り。 内面は篦なで。
9	土師器 甕	口径　15.6 器高　(12.5)	1／5	①淡褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削り。 内面は篦なで。
10	土師器 甕	器高　(14.5)	1／5	①黒褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削り。 内面は篦なで。
11	須恵器 𤭯		胴部 破片	①暗灰色②還元焔・良 ③細砂粒	ロクロ整形。胴部下半は沈線区画内に篦描。外面に暗緑色釉がかかる。
12	須恵器 甕		胴部 破片	①淡灰白色②還元焔・良 ③細砂粒	外面、内面とも平行叩き目。



第53図　　2号住居址出土遺物

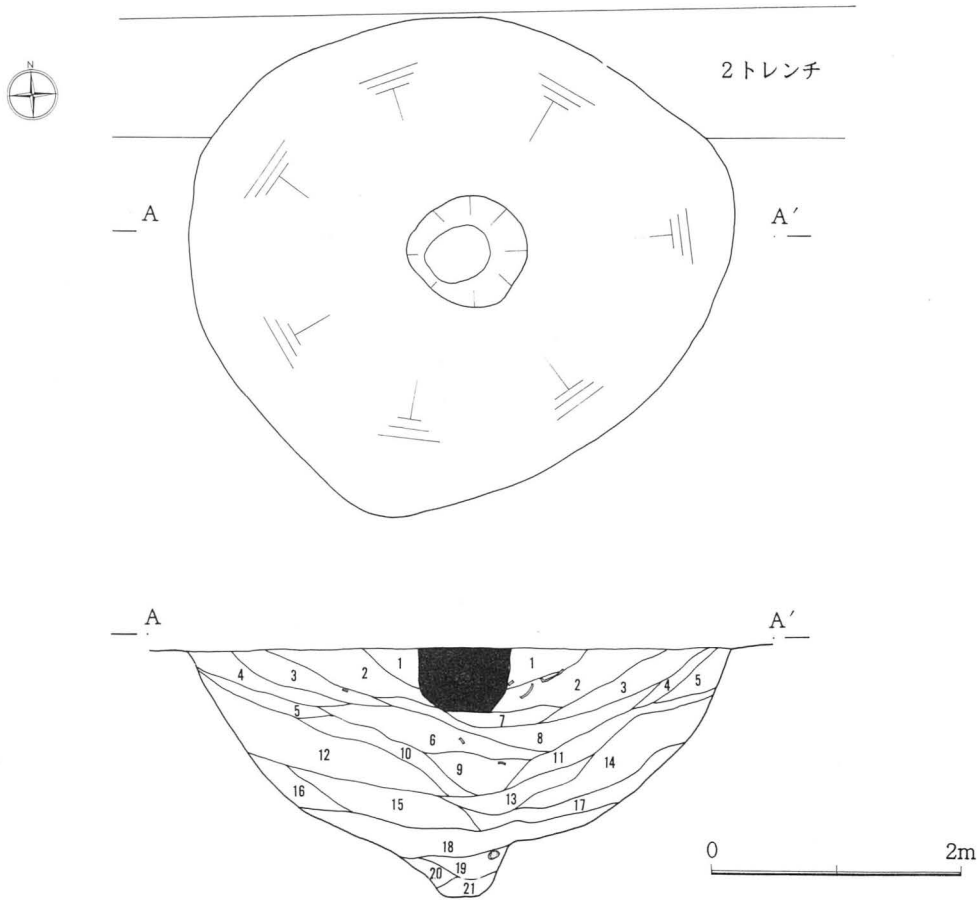
(2) 円形有段遺構

円形有段遺構（1号土坑）（第54・55図）

調査区の南東部、2号住居址の南隅と重複して検出された。長径4.5m、短径4.1m、深さ1.6mのほぼ円形をした掘り込みで、擂鉢状に壁は内側に湾曲する。さらに、底面に直径60cm、深さ40cmの円形の凹みがあり、段を構成する。断面形はお椀形である。

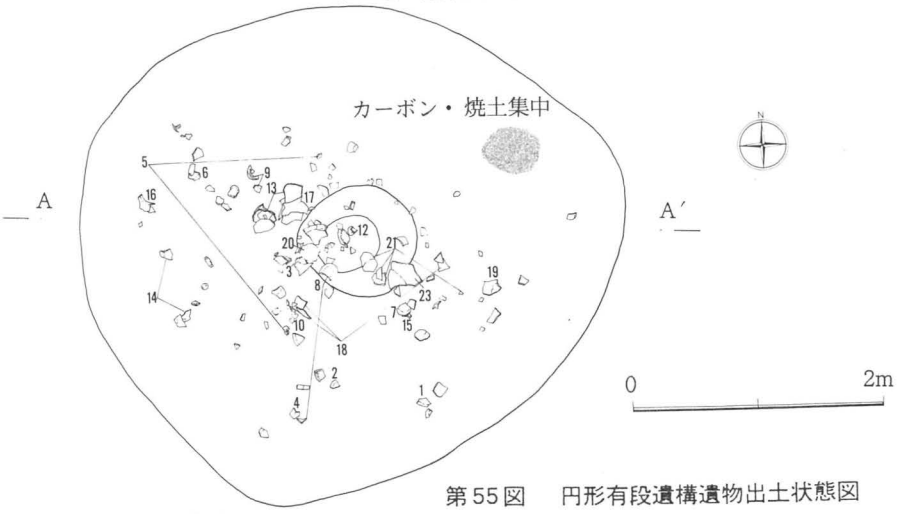
遺物は、深さ50cm～1mの覆土中から集中して出土し、北東壁際に直径40cmの範囲で焼土と炭化物も検出された。また、底面の凹みより拳大の自然石が6点出土している。

遺構の性格については、第Ⅴ章で後述する。



第54図　円形有段遺構遺構図

円形有段遺構土層注記
第1層　黒褐色土　締り有　ローム粒子・焼土粒子微量、白色石灰粒子多量含む
第2層　黒褐色土　締り有　ローム粒子多量、焼土・カーボン粒子少量含む
第3層　暗褐色土　締り有　ローム粒子・ロームブロック少量含む
第4層　黒褐色土　締り有　ローム粒子・焼土・カーボン粒子多量含む
第5層　暗褐色土　締り有　ローム粒子・ロームブロック・焼土・カーボン粒子多量含む
第6層　黒褐色土　締り・粘性有　ロームブロック・カーボン粒子多量含む
第7層　黒褐色土　締り・粘性有　焼土粒子多量含む
第8層　黒褐色土　締り・粘性有　ローム粒子・焼土粒子少量含む
第9層　暗褐色土　締り有　ローム粒子・ロームブロック多量、焼土・カーボン粒子少量含む
第10層　褐色土　締り・粘性無　ロームブロック多量含む
第11層　褐色土　締り・粘性有　ロームブロック・焼土・カーボン粒子多量含む
第12層　明褐色土　締り・粘性無　ローム粒子・ロームブロック多量含む
第13層　暗褐色土　締り有　ロームブロック・焼土・カーボン粒子多量含む
第14層　黄褐色土　締り・粘性無　ロームブロック多量含む
第15層　明褐色土　締り有　ロームブロック多量含む
第16層　暗褐色土　締り・粘性有　ロームブロック少量含む
第17層　暗褐色土　締り有　ロームブロック少量含む
第18層　黒褐色土　締り・粘性有　ローム粒子多量含む
第19層　黒褐色土　粘性有　ローム粒子・カーボン粒子少量含む
第20層　黒褐色土　締り・粘性無　ローム粒子・ロームブロック多量含む
第21層　黄褐色土　粘性有　粘土ブロック多量含む



第55図　円形有段遺構遺物出土状態図

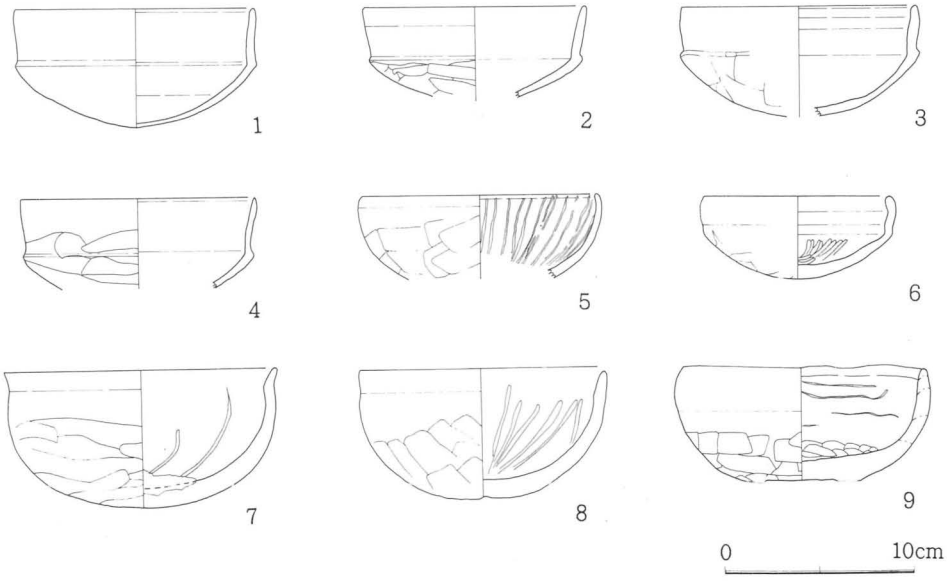
円形有段遺構出土遺物（第56～58図）

遺物は、古墳時代後期の土師器坏・埦・高坏・甕・甑、須恵器甕等が多数出土し、実測可能なものは26点であった。いずれも遺物は遺構の上層から中層にかけて集中していた。各遺物の詳細は次のとおりである。

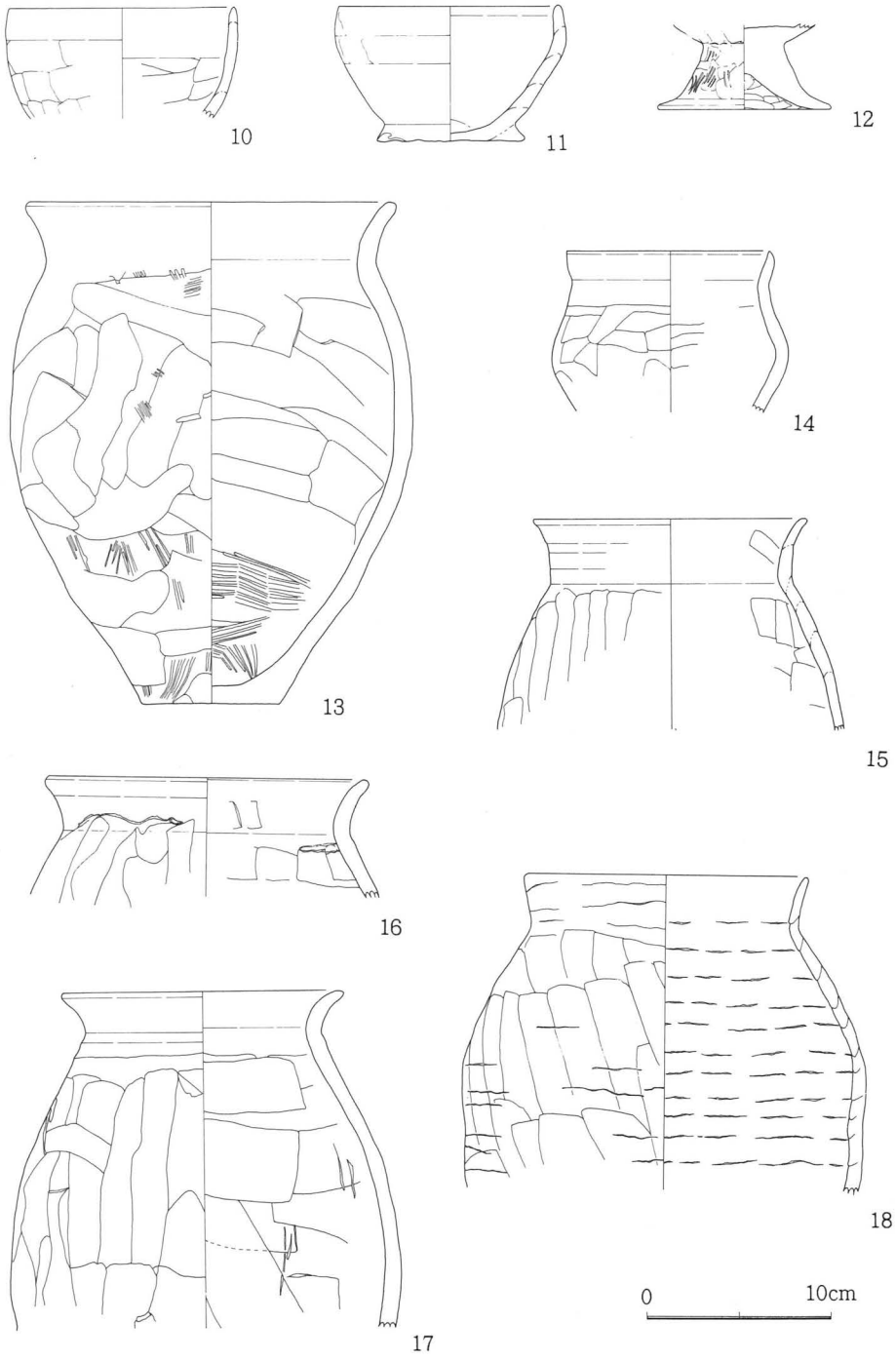
番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	土師器 坏	口径　12.6 器高　6.3	完形	①赤褐色②良 ③砂粒	口縁部横なで。体部は摩耗が著しく不明。内面は指なで。
2	土師器 坏	口径　11.6 器高　(4.7)	1／3	①明赤褐色②良 ③砂粒	口縁部横なで。体部は箆削り。
3	土師器 坏	口径　11.6 器高　(5.9)	1／2	①明赤褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。体部は箆削り。内面は箆なで。

番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
4	土師器 坏	口径　12.4 器高　(4.8)	1／2	①赤褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。
5	土師器 坏	口径　12.5 器高　(4.4)	1／3	①黒褐色②良 ③砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。内面は篦なで後、篦磨き。
6	土師器 坏	口径　10.0 器高　4.4	2／5	①淡赤褐色②良 ③粗砂粒、金雲母粒	口縁部横なで。体部は篦削り。内面は篦磨き。
7	土師器 埦	口径　14.5 器高　7.3	3／4	①黒褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。内面は篦なで後、篦磨き。
8	土師器 埦	口径　13.0 器高　7.0	完形	①暗褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り後、指なで。内面は篦磨き。
9	土師器 埦	口径　12.9 器高　6.1	完形	①淡赤褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。内面は篦なで。
10	土師器 埦	口径　6.4 器高　(5.9)	1／3	①明褐色②良 ③砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。内面は篦なで。
11	土師器 埦(手捏)	口径　6.0 器高　7.3	1／3	①淡褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。体部は粗く指なで。内面は指なで。
12	土師器 高坏	底径　9.4 器高　(4.6)	脚部	①赤褐色②良 ③細砂粒・金雲母粒	脚部外面は篦削り後、櫛目と指なで。内面は篦なで。
13	土師器 甕	口径　20.0 器高　27.1	1／2	①淡褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。胴部は櫛目後、篦削り。内面は櫛目後、篦磨き。
14	土師器 甕	口径　11.2 器高　(8.7)	1／3	①淡赤褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削り。内面は篦なで。
15	土師器 甕	口径　14.8 器高　(11.4)	1／4	①淡灰褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削り。内面は篦なで。
16	土師器 甕	口径　8.8	口縁部	①淡褐色②良 ③粗砂粒、炭化物	口縁部横なで。胴部は篦削り。内面は篦なで。
17	土師器 甕	口径　15.5 器高　(18.3)	2／3	①淡褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削り後、指なで。内面は篦なで。
18	土師器 甕	口径　15.2 器高　(17.0)	2／3	①暗褐色②良 ③細砂粒、金雲母粒	輪積整形。口縁部横なで。胴部は篦削り。内面は指なで。

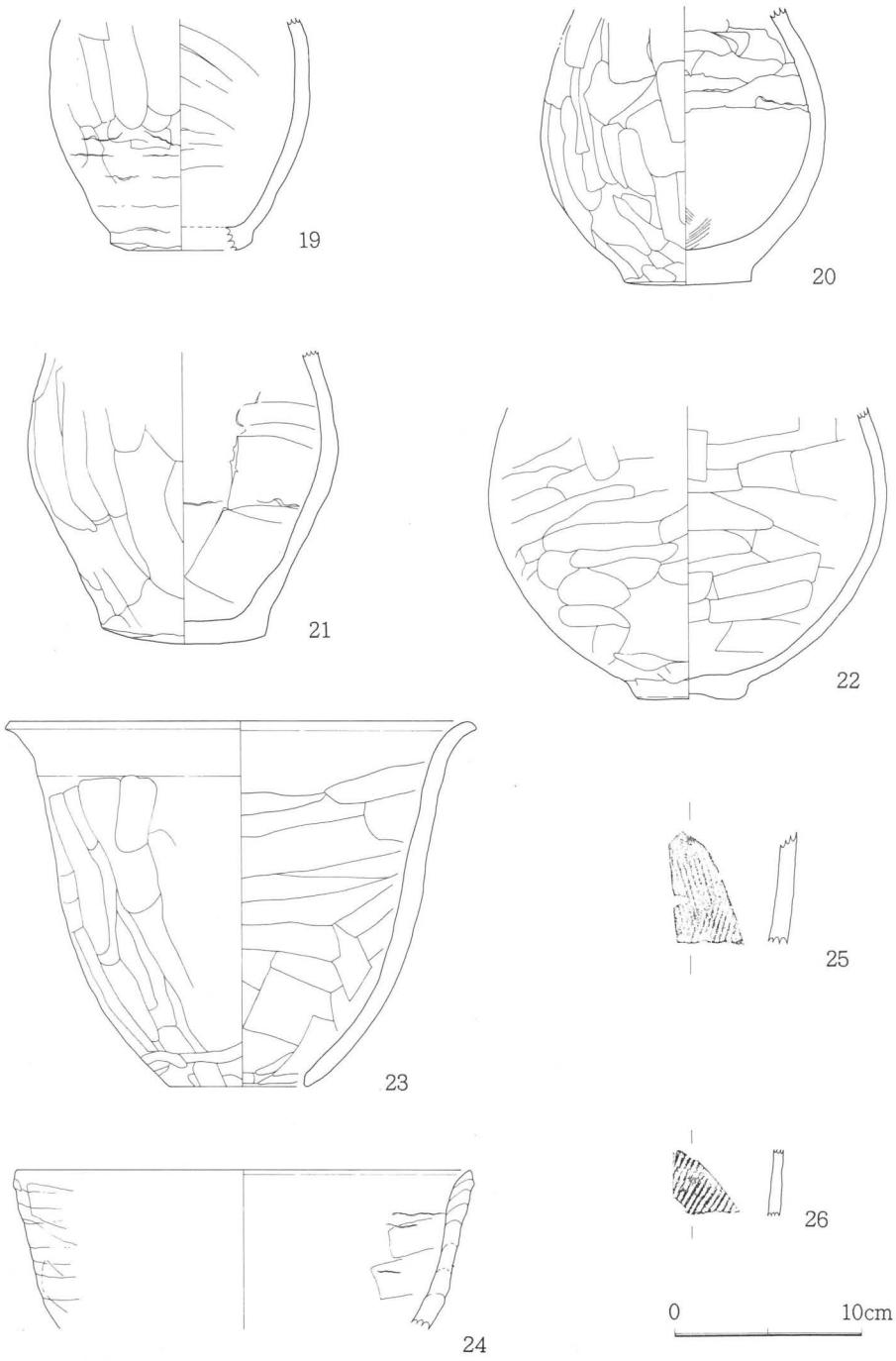
番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
19	土師器 甕	底径　7.6 器高　(12.3)	胴部 ～底部	①黒褐色②良 ③粗砂粒	輪積整形。胴部は箆削り。内面は箆なで。
20	土師器 甕	底径　6.8 器高　(14.7)	胴部 ～底部	①黒褐色②良 ③粗砂粒	胴部は箆削り。内面は箆なで。
21	土師器 甕	底径　8.8 器高　(15.5)	胴部 ～底部	①黒褐色②良 ③粗砂粒	胴部は箆削り。内面は箆なで。
22	土師器 甕	底径　5.4 器高　(15.6)	胴部 ～底部	①暗赤褐色②良 ③細砂粒	胴部は箆削り。内面は箆なで。
23	土師器 甑	口径　24.8 器高　19.5	2／3	①淡褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。胴部は箆削り。内面は箆なで。
24	土師器 甑	口径　24.4 器高　(8.5)	口縁部	①黒褐色②良 ③砂粒、金雲母粒	輪積整形。胴部は箆削り。内面は箆なで。
25	須恵器 甕		胴部 破片	①暗灰白色②還元焔・良 ③砂粒	外面、内面とも叩き目。
26	須恵器 甕		胴部 破片	①黒灰褐色②還元焔・良 ③砂粒	外面は平行叩き目。



第56図　円形有段遺構出土遺物（1）



第57図　円形有段遺構出土遺物（2）



第58図　円形有段遺構出土遺物（3）

(3) 土坑

2号土坑（第59図）

調査区の南西部から検出された。直径約80cm、深さ約27cmの円形をした掘り込みで、内部に直径40cm、深さ15cmの円形の凹みがある。古墳時代後期の遺物が出土し、貯蔵穴の一つと考えられる。

3号土坑（第59図）

調査区の南東部、2号住居址の東側から検出された。大きさは1.4m×95cm、深さ約1.1mの長方形をした掘り込みで、底部南半分に直径20cm前後の自然石15個が敷き詰められていた。出土遺物は少なく、時期を確定することはできなかった。貯蔵穴の一つと考えられる。

4号土坑（第59図）

調査区の南東部、2号住居址の東に隣接して検出された。直径約2.3cm、深さ約35cmの円形をした掘り込みで、北東部分から炭化材や焼土、炭化物が検出された。古墳時代後期の遺物が出土し、炉跡の一つと考えられる。

5号土坑（第59図）

井戸址で、調査区の南東部、1号住居址の西側から検出された。円形で直径は約1.3mを測る。上部20cm程度は緩やかに広がり、それ以下は垂直的に落ち込んでいる。深さ10cm程度のほぼ中央部から15cm前後の割石7個が集中して出土した。深さは不明。出土遺物は少なく、時期を確定することはできなかった。

6～8号土坑

いずれも井戸址で、1号住居址のほぼ中央部から検出された。

6号土坑は、円形で直径は約1.5mを測る。深さは不明。

7号土坑は、円形で直径は約1.3mを測る。深さは不明。

8号土坑は、円形で直径は約1.3mを測る。深さは不明。

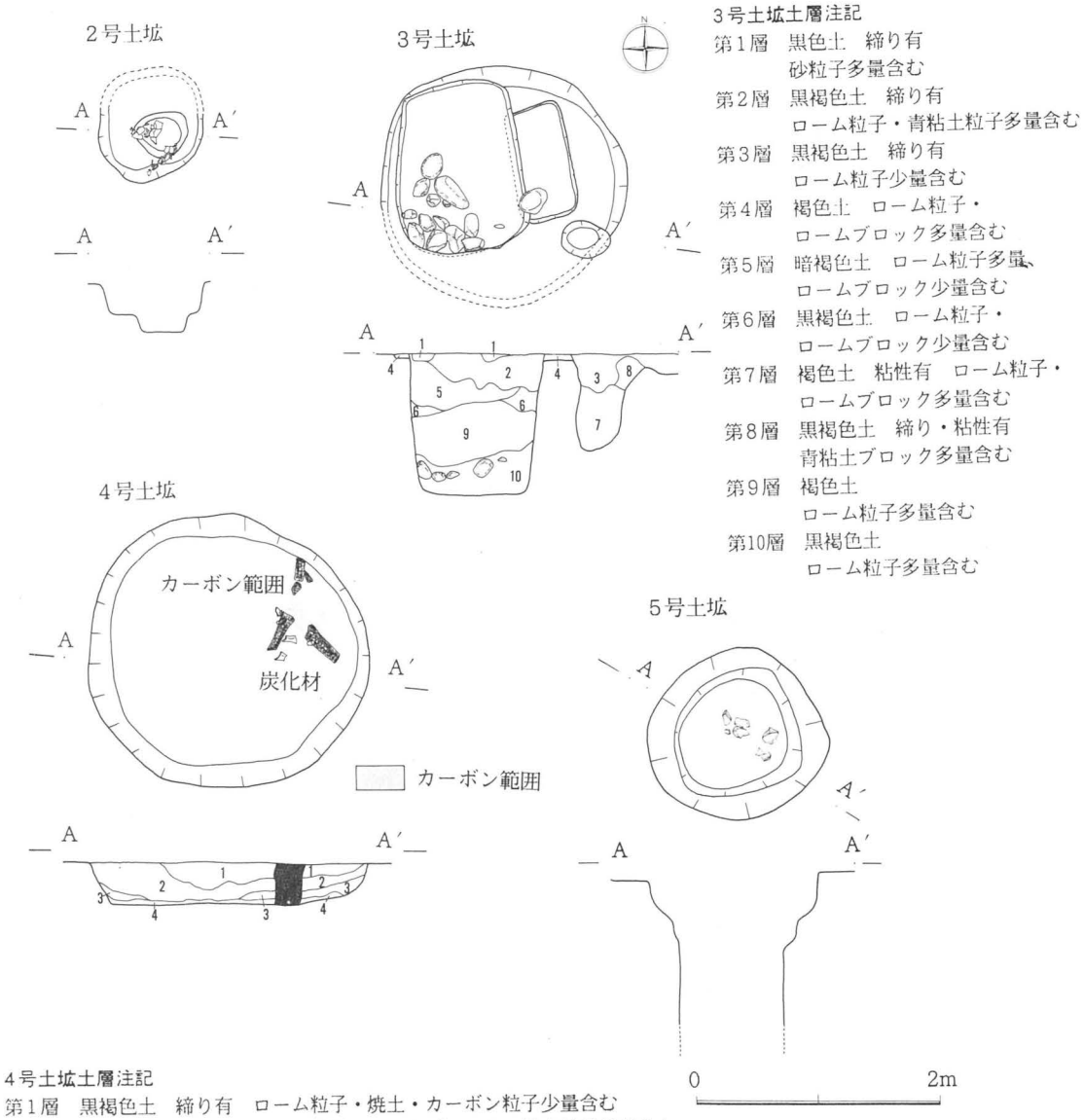
いずれも、出土遺物は少なく、時期を確定することはできなかった。

9号土坑

調査区の南東部、2号住居址の北東側から検出された。大きさは2.4m×2.3m、深さ約1.1mの不整形の方形をした掘り込みである。古墳時代後期の遺物が1点出土したが、他に共伴する遺物が無く、時期を確定することはできなかった。遺構の性格は不明。

10号土坑

井戸址で、調査区の南東部、2号住居址の北東に隣接して検出された。円形で直径は約2.4mを測る。深さは不明。中世の遺物が出土した。



3号土坑土層注記
第1層　黒色土　締り有
砂粒子多量含む
第2層　黒褐色土　締り有
ローム粒子・青粘土粒子多量含む
第3層　黒褐色土　締り有
ローム粒子少量含む
第4層　褐色土　ローム粒子・
ロームブロック多量含む
第5層　暗褐色土　ローム粒子多量、
ロームブロック少量含む
第6層　黒褐色土　ローム粒子・
ロームブロック少量含む
第7層　褐色土　粘性有　ローム粒子・
ロームブロック多量含む
第8層　黒褐色土　締り・粘性有
青粘土ブロック多量含む
第9層　褐色土
ローム粒子多量含む
第10層　黒褐色土
ローム粒子多量含む

4号土坑土層注記
第1層　黒褐色土　締り有　ローム粒子・焼土・カーボン粒子少量含む
第2層　暗褐色土　締り有　ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子多量含む
第3層　暗褐色土　締り有　炭化材混在　焼土ブロック・カーボン粒子多量含む
第4層　黄褐色土　締り・粘性有　ロームブロック多量含む

第59図　2～5号土坑遺構図

土坑出土遺物（第60図）

2号土坑からは、古墳時代後期の土師器坏（1・2）、土師器甕（3）、土師器甑（4）、須恵器甕（5）が出土。

4号土坑からは、古墳時代後期の土師器坏（6）が出土。

9号土坑からは、古墳時代後期の土師器坏（7）が出土。

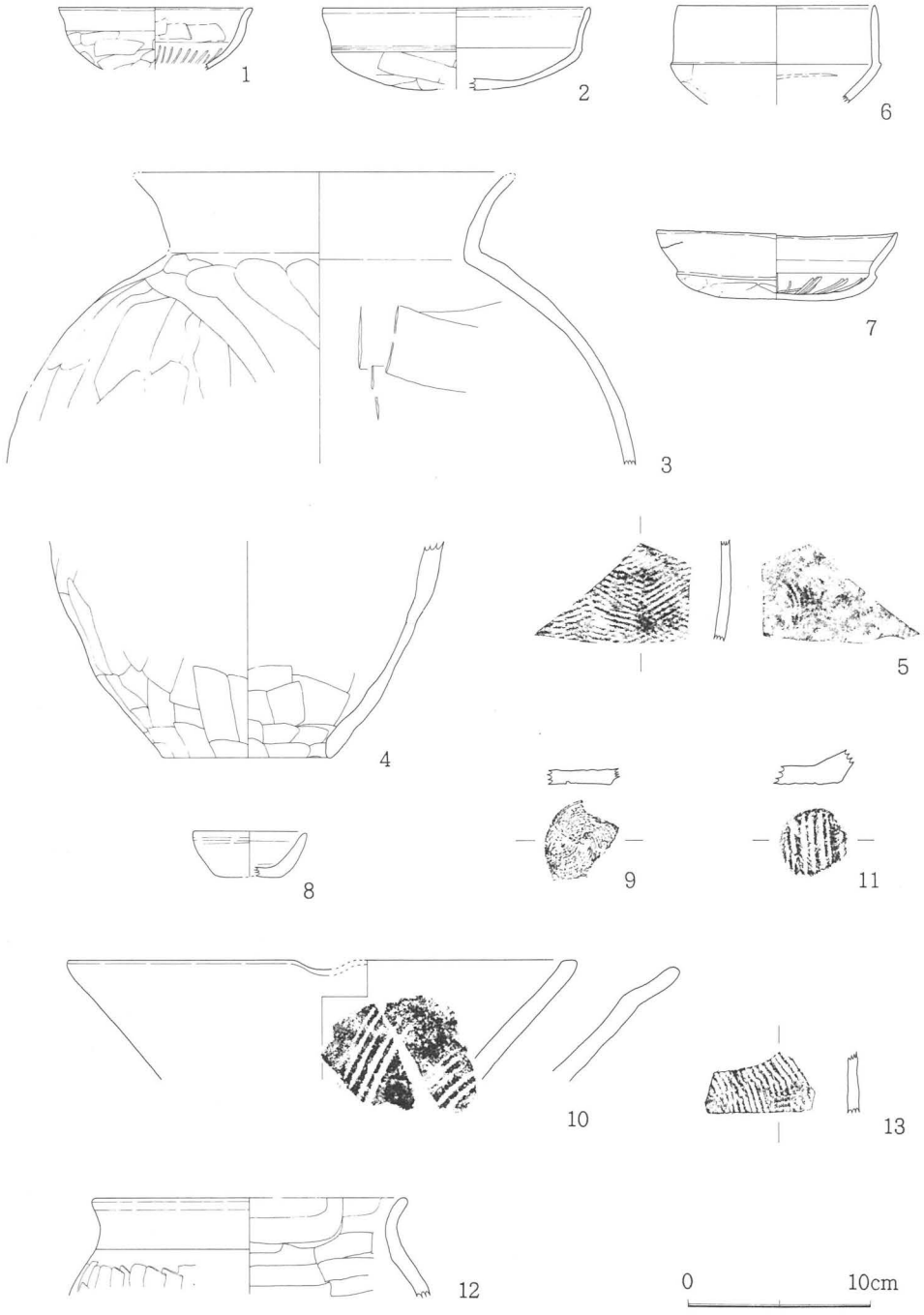
10号土坑からは、中世のカワラケ（8・9）、擂鉢（10）の他、須恵器甕（11）が出土。

この他、調査区のほぼ中央部の9トレンチから検出された5号井戸址からは、古墳時代後期の土師器甕（12）、須恵器甕（13）が出土した。

実測可能なものは13点で、各遺物の詳細は次のとおりである。

なお、3、5～8号土坑からは実測可能な遺物は出土しなかった。

番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	土師器 坏	口径　11.6 器高　(3.3)	2／3	①暗赤褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。内面は篦磨き。2号土坑出土。
2	土師器 坏	口径　14.6 器高　(4.5)	2／3	①明赤褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。2号土坑出土。
3	土師器 甕	口径　20.5 器高　(15.8)	口縁部	①明褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削り。内面は篦なで。2号土坑出土。
4	土師器 甑	底径　9.2 器高　(11.8)	底部	①赤褐色②良 ③細砂粒、金雲母粒	胴部は篦削り。内面は篦なで。2号土坑出土。
5	須恵器 甕		胴部 破片	①黒灰褐色②還元焔・良 ③細砂粒	外面は平行叩き目。内面は円形叩き目。2号土坑出土。
6	土師器 坏	口径　10.8 器高　(5.4)	1／4	①赤褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。4号土坑出土。
7	土師器 坏	口径　13.3 器高　3.7	完形	①淡赤褐色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。体部は篦削り。内面は篦磨き。9号土坑出土。
8	カワラケ 灯明皿	口径　7.6 器高　2.5	1／2	①淡褐色②良 ③細砂粒	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。内外に煤付着。10号土坑出土。
9	土師器 坏		底部 破片	①淡褐色②良 ③粗砂粒	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。10号土坑出土。
10	土師質 擂　鉢	口径　28.0 器高　(6.5)	口縁部 破片	①明褐色②良 ③粗砂粒	内面に5本単位の平行な掻目あり。10号土坑出土。
11	須恵器 坏		底部 破片	①暗灰白色②還元焔・良 ③細砂粒	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕の上に平行押形文あり。10号土坑出土。
12	土師器 甕	口径　8.4 器高　(5.3)	口縁部	①淡褐色②良 ③細砂粒	口縁部横なで。胴部は篦削り。内面は篦なで。5号井戸址出土。
13	須恵器 甕		胴部 破片	①暗灰白色②還元焔・良 ③砂粒	外面は平行叩き目。 5号井戸址出土。



第60図　土坑出土遺物

(4) 溝状遺構

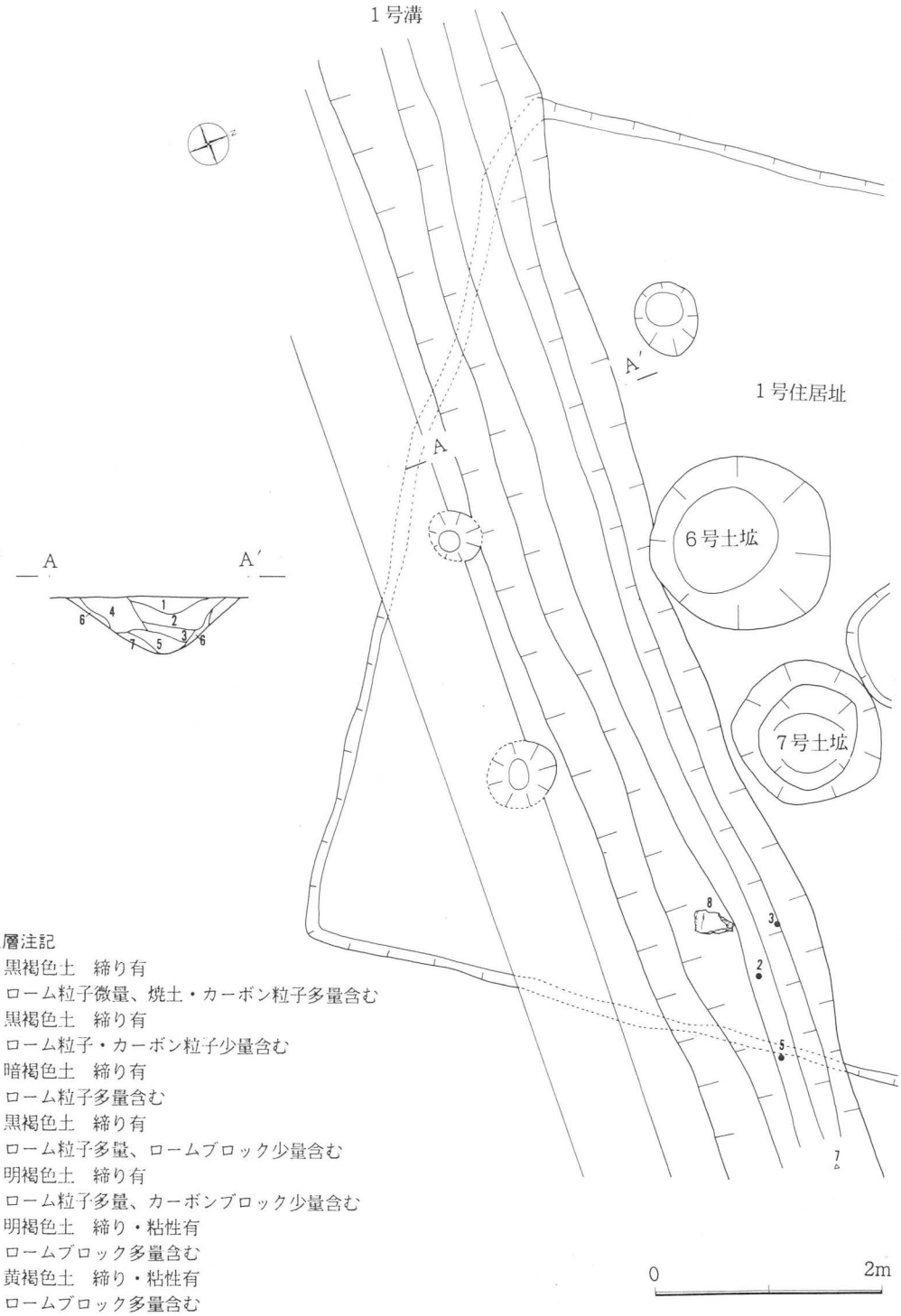
1号溝（第61図）

調査区の南東部、1号住居址の南部分と重複して検出された。走行は東西に直線的に延び、約11mの区間を調査した。幅約1.5m、深さ約70cmを測り、断面形は緩やかなV字形である。東西端とも調査区間外に続くが、全体の規模は不明である。堆積土はロームを混在する土が主体で、拳大の礫が覆土中に点在した。中世の内耳鍋やカワラケ、板碑などが出土した。

1号溝出土遺物（第62～64図）

実測可能なものは9点で、中世の内耳鍋（2～6）、カワラケ（1）、砥石（7）、板碑（8・9）などが出土した。各遺物の詳細は次のとおりである。

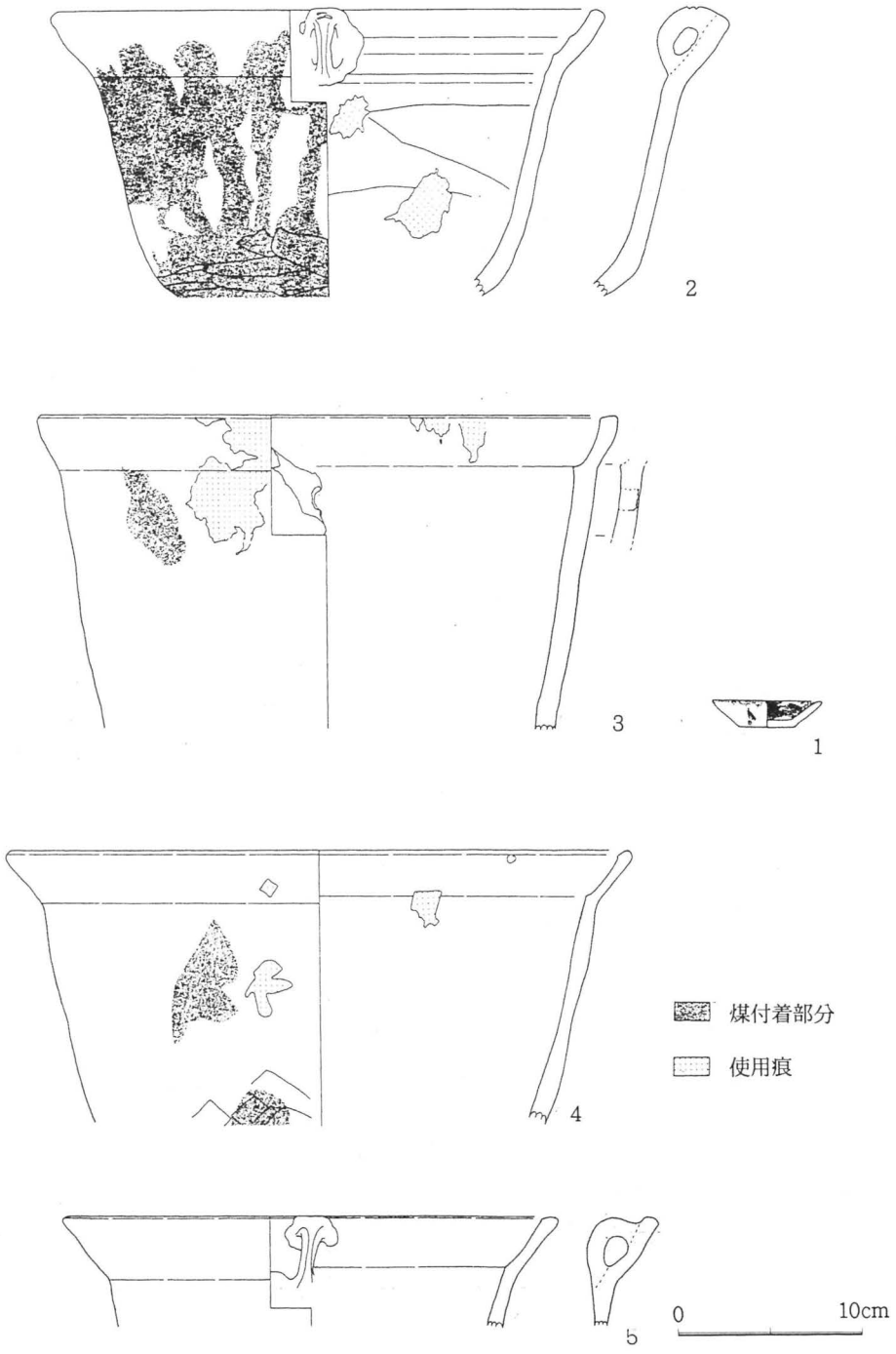
番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	カワラケ 灯明皿	口径 6.0 器高 (1.4)	1／2	①明褐色②良 ③細砂粒	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕あり。内外に煤付着。
2	内耳鍋	口径 30.3 器高 (15.6)	1／3	①黒褐色②還元焔 ③砂粒	口縁から頸部に横なで。胴部は横なで後、一部篦なで。外面に煤付着。
3	内耳鍋	口径 31.8 器高 (17.0)	1／4	①黒色②還元焔 ③粗砂粒	口縁から胴部に横なで。外面に煤付着。
4	内耳鍋	口径 34.4 器高 (15.7)	1／4	①黒色②還元焔 ③細砂粒	口縁から胴部に横なで。胴下半に篦なで。外面に煤付着。
5	内耳鍋	口径 27.0 器高 (6.0)	口縁部	①黒色②還元焔 ③細砂粒	口縁部横なで。
6	内耳鍋	口径 32.5 器高 (6.9)	口縁部	①黒色②還元焔 ③細砂粒	口縁部横なで。
7	砥石	長さ (12.6) 厚み (4.8)	一部欠損		
8	板碑	長さ (33.9) 幅 (15.0)	上部 破片		蓮座、文字「長□□月日」あり。
9	板碑	長さ (35.2) 幅 (15.0)	下部 破片		花瓶あり。



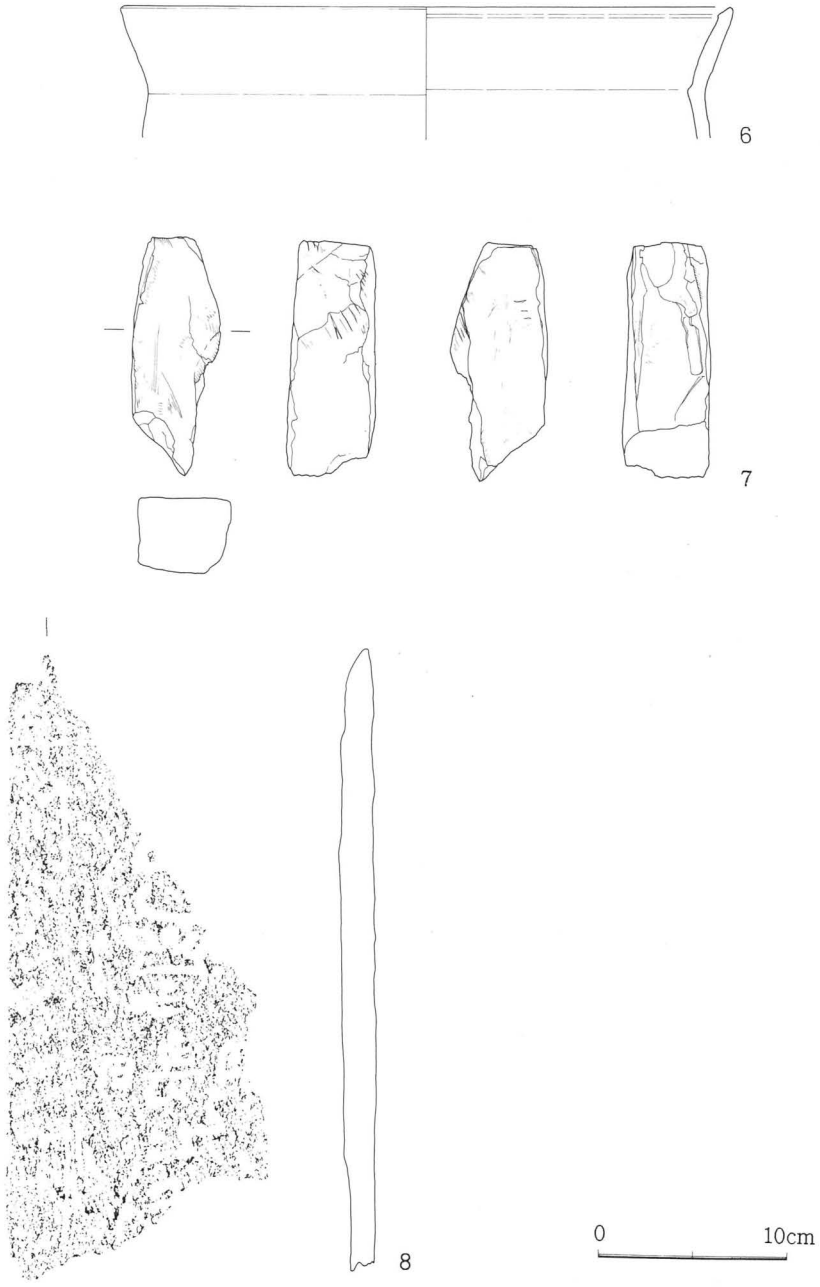
1号溝土層注記

第1層　黒褐色土　締り有
　　ローム粒子微量、焼土・カーボン粒子多量含む
第2層　黒褐色土　締り有
　　ローム粒子・カーボン粒子少量含む
第3層　暗褐色土　締り有
　　ローム粒子多量含む
第4層　黒褐色土　締り有
　　ローム粒子多量、ロームブロック少量含む
第5層　明褐色土　締り有
　　ローム粒子多量、カーボンブロック少量含む
第6層　明褐色土　締り・粘性有
　　ロームブロック多量含む
第7層　黄褐色土　締り・粘性有
　　ロームブロック多量含む

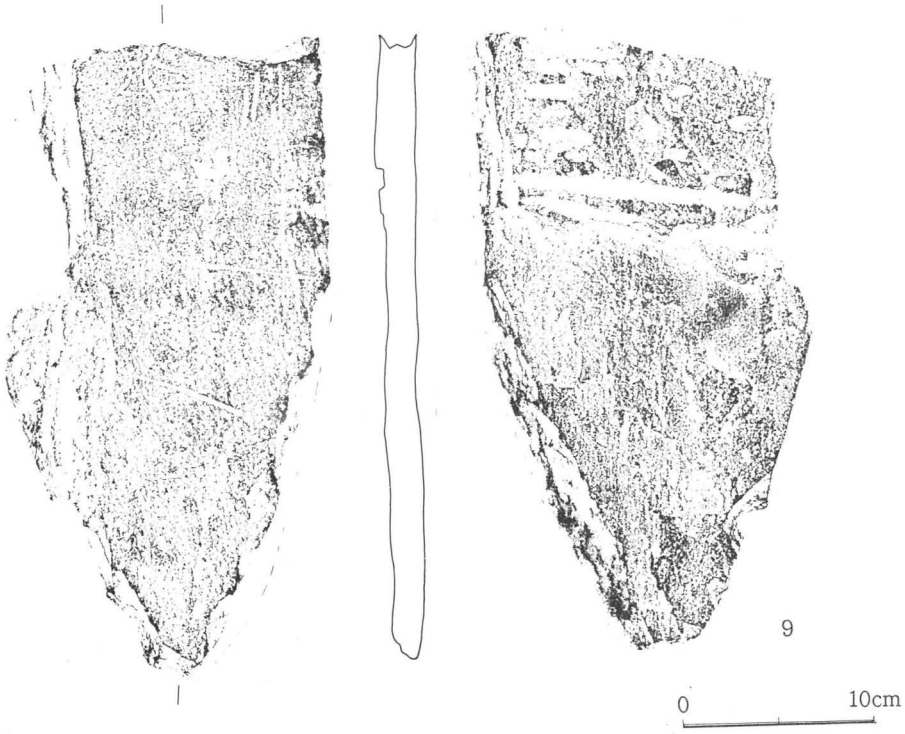
第61図　1号溝遺構図



第62図　1号溝出土遺物（1）



第63図　1号溝出土遺物（2）

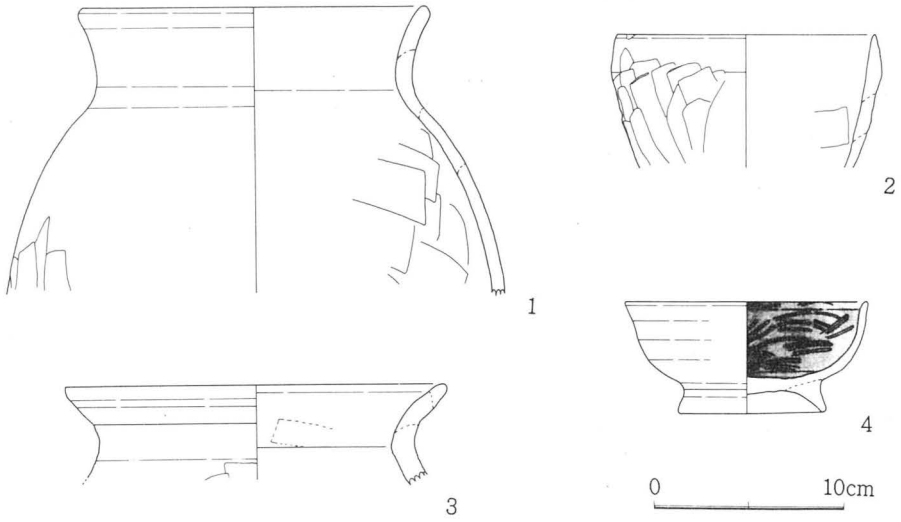


第64図　1号溝出土遺物（3）

(5) 遺構外出土遺物

トレンチ調査の際、遺構に伴わずに出土した遺物も多数あり、実測可能なものは4点であった。その内訳は、調査区のほぼ中央部の8トレンチから、古墳時代後期の土師器甕（1）と土師器甑（2）が、調査区の北部の13トレンチから古墳時代後期の土師器甕（3）が、また、調査区の北端の15トレンチから平安時代の土師器高台付埦（4）が出土した。各遺物の詳細は次のとおりである。（第65図）

番号	器種	法量（cm）	残存率	①色調②焼成③胎土	成形・調整の特徴、備考
1	土師器 甕	口径　18.2 器高　(15.3)	1／6	①黒褐色②良 ③砂粒、金雲母粒	口縁部横なで。胴部は箆削り後、指なで。内面は箆なで。8トレンチ出土。
2	土師器 甑	口径　13.6 器高　(7.0)	1／4	①黄灰色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。胴部は箆削り。内面は箆なで。8トレンチ出土。
3	土師器 甕	口径　20.2 器高　(5.2)	口縁部	①黄灰色②良 ③粗砂粒	口縁部横なで。胴部は箆削り。内面は箆なで。13トレンチ出土。
4	土師器 高台付埦	口径　12.8 器高　(5.9)	3／4	①淡褐色②良 ③砂粒、金雲母粒	ロクロ整形。底部に回転糸切り痕。内面は箆磨き、黒色処理。15トレンチ出土。



第65図　遺構外出土遺物

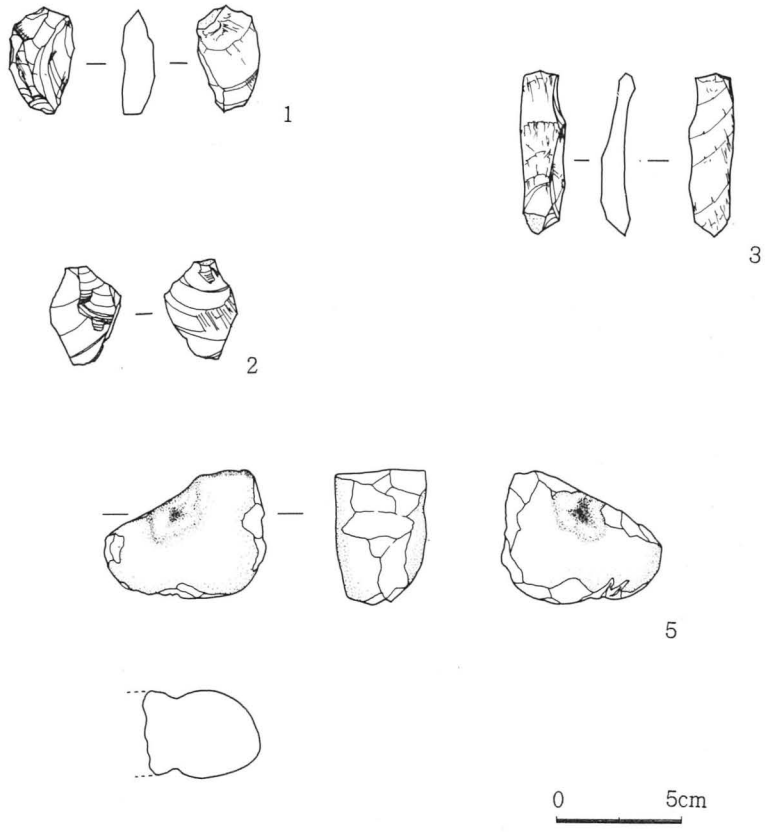
(6) 石器・その他の遺物

本遺跡からは、実測可能な石器が6点（フレーク、石斧、磨石）の他、鉄製品や縄文時代の土器片4点が出土している。

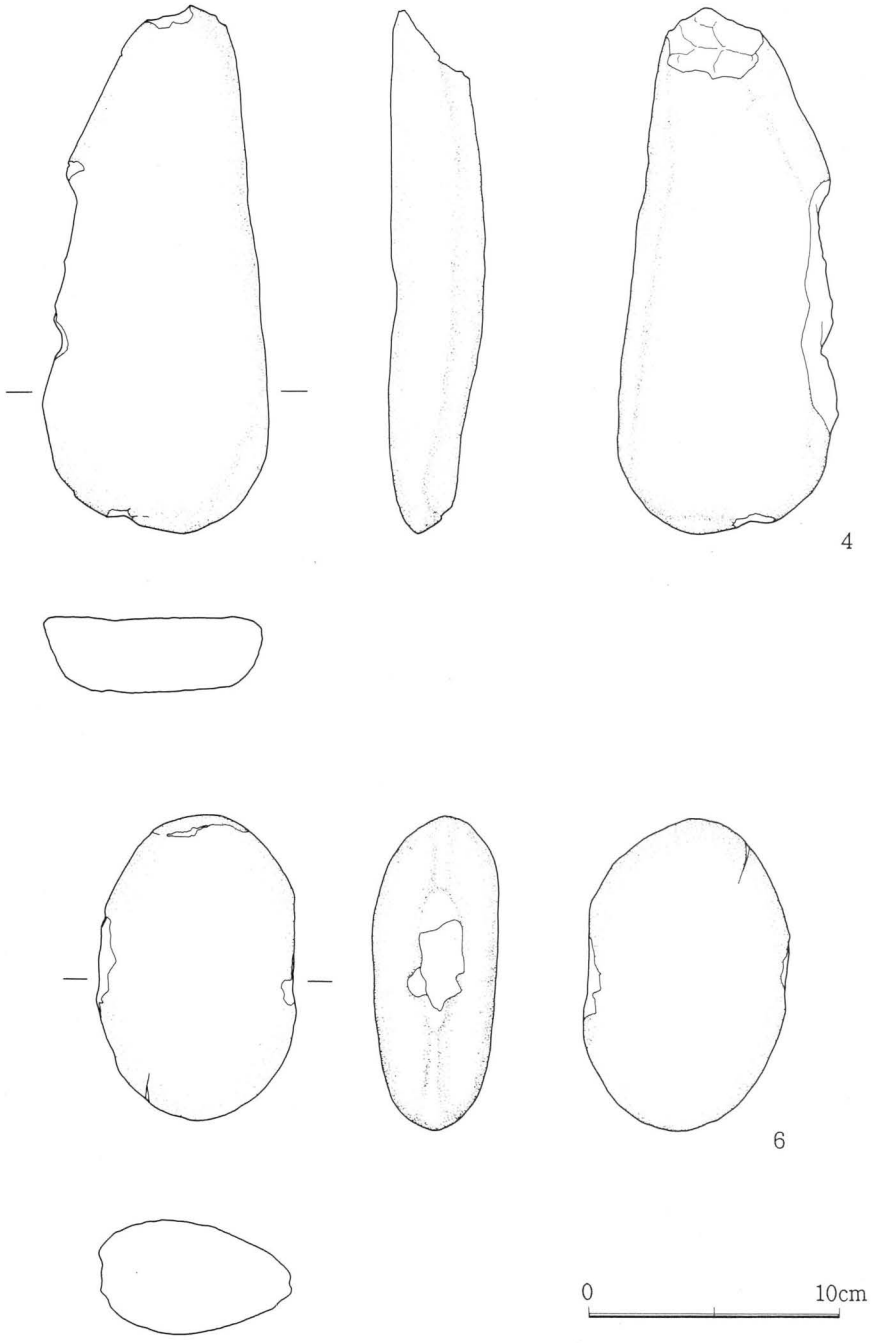
石器の内容は、1～3はフレークで、石材はチャートである。4は石斧で1号住居址内から出土し、5・6は磨石で5号井戸から出土している。4～6の石材は凝灰岩質のものである。（第66・67図）

鉄製品（11）は刀子の一部で、4号土坑より出土した。

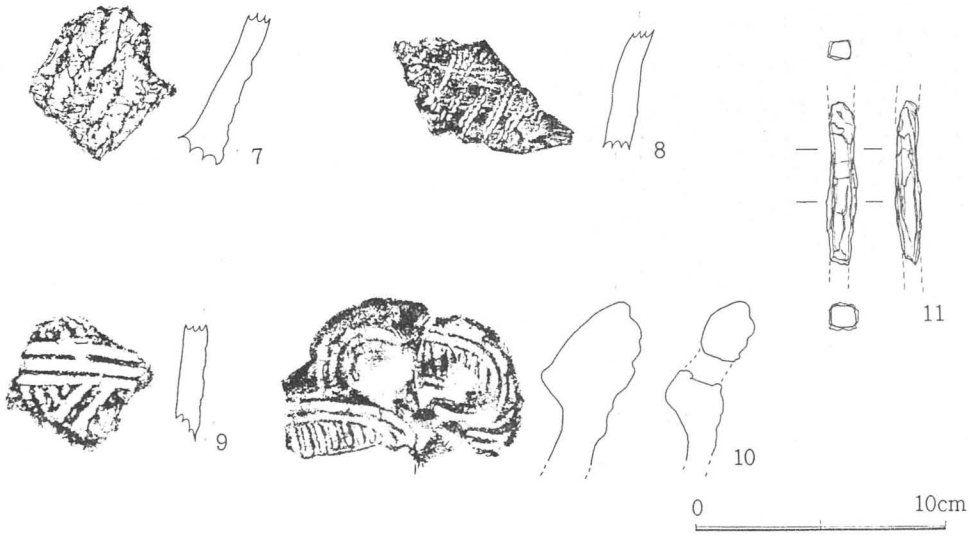
縄文時代の土器片のうち、7・8は表面に縄文を施し、胎土に繊維を多量に含む。9は表面に沈線を施す。10は隆帯による把手の一部で、表面に沈線を施す。（第68図）



第66図　石器・その他の遺物（1）



第67図　石器・その他の遺物（2）



第68図　石器・その他の遺物（3）

写真93　J地点調査区全景（東より）

写真94　J地点調査区全景（南より）

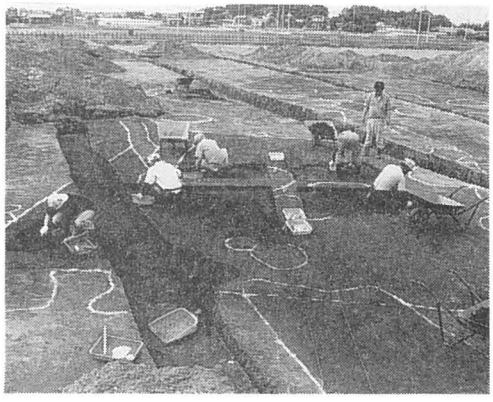


写真95　J地点調査風景

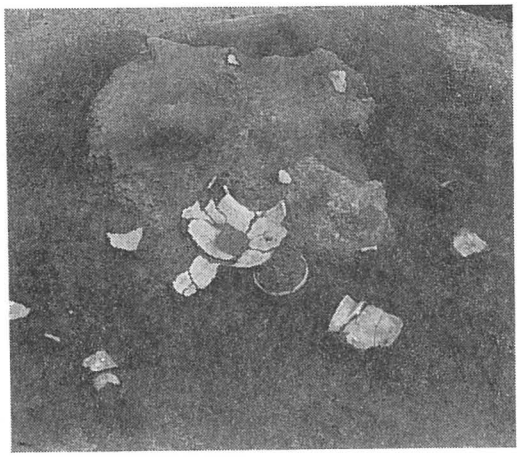


写真96　1号住居址カマド付近
遺物出土状態

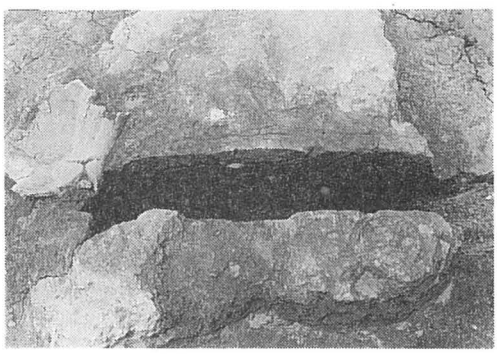


写真97　1号住居址カマド土層断面

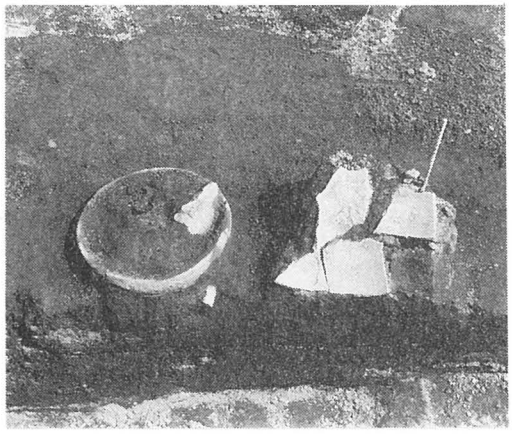


写真98　1号住居址遺物出土状態

写真99　1号住居址貯蔵穴遺物出土状態

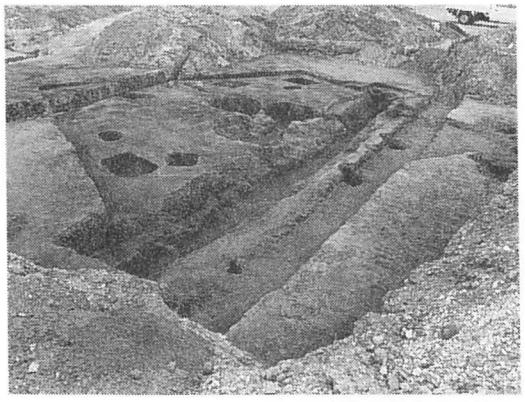


写真100　1号住居址・1号溝完掘状態

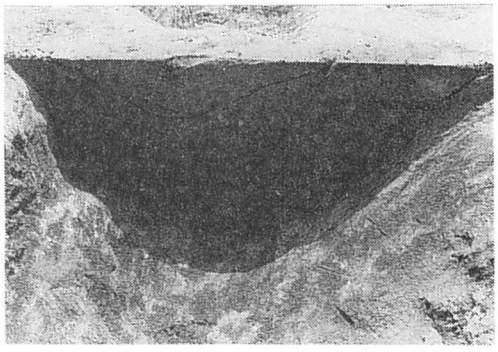


写真101　1号溝土層断面

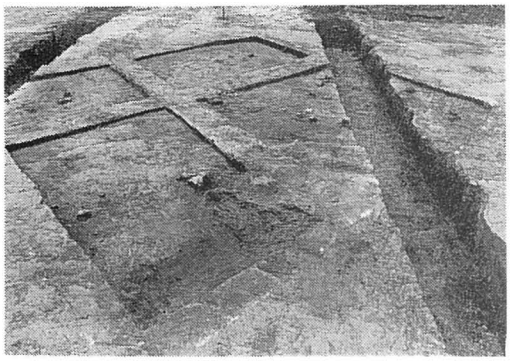


写真 102　2号住居址遺物出土状態

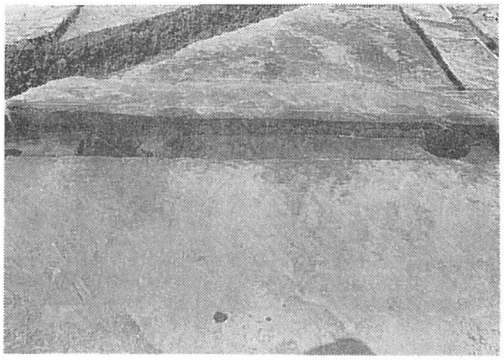


写真 103　2号住居址土層断面

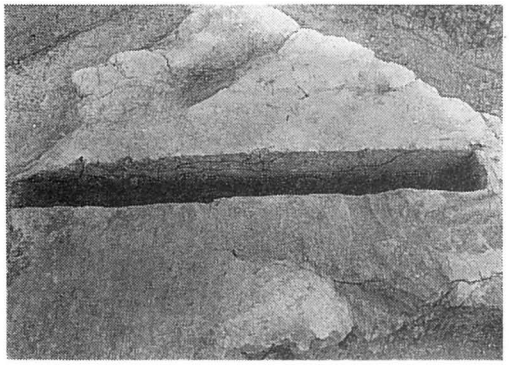


写真 104　2号住居址カマド土層断面

写真 105　2号住居址カマド完掘状態

写真 106
2号住居址完掘状態

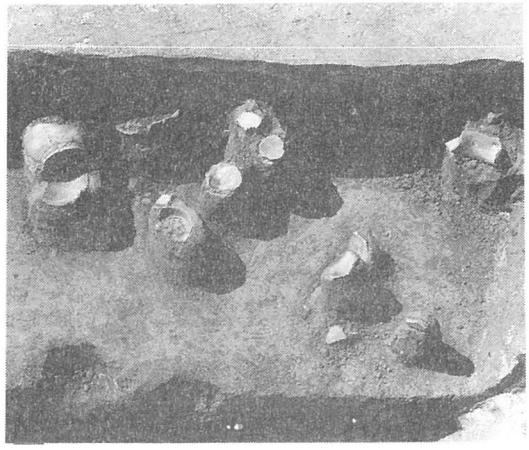


写真107　円形有段遺構（1号土坑）
遺物出土状態（1）

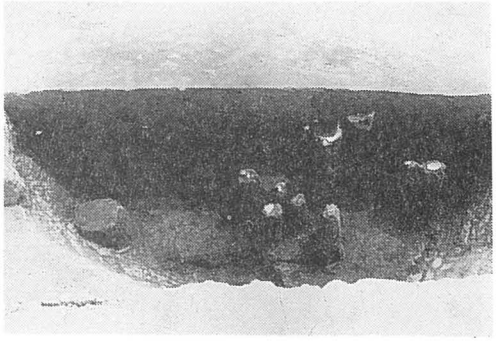


写真108　円形有段遺構（1号土坑）
遺物出土状態（2）

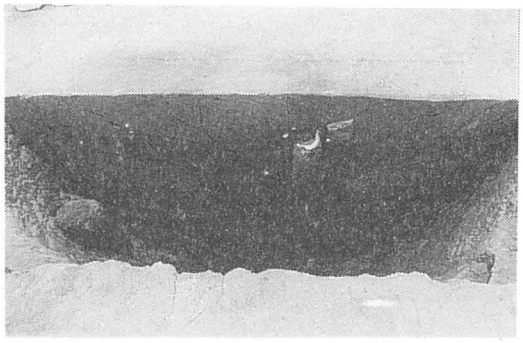


写真109　円形有段遺構（1号土坑）
土層断面

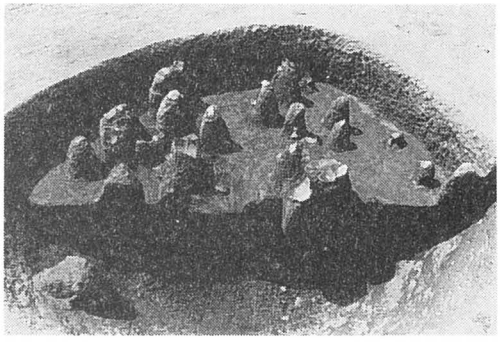


写真110　円形有段遺構（1号土坑）
遺物出土状態（3）

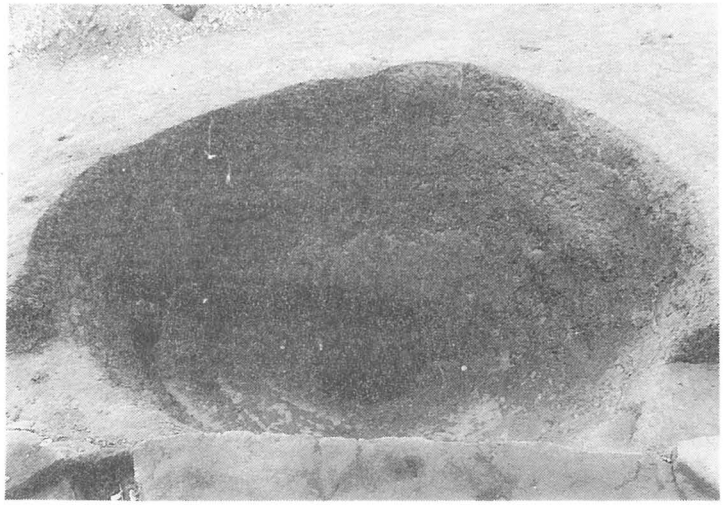


写真111
円形有段遺構（1号土坑）
完掘状態

写真112　2号土坑遺物出土状態

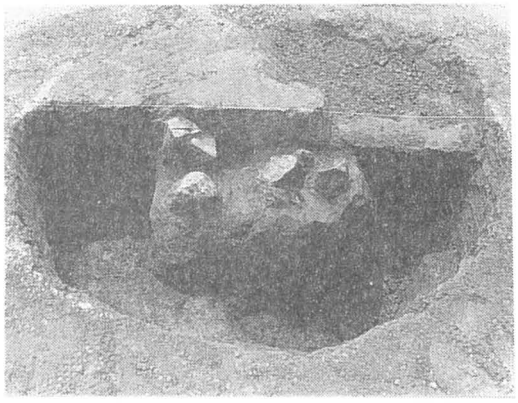


写真113　5号土坑遺物出土状態

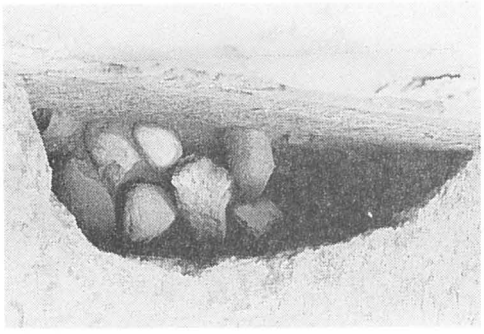


写真114　3号土坑遺物出土状態

写真115　3号土坑完掘状態

写真116
4号土坑炭化材等出土状態

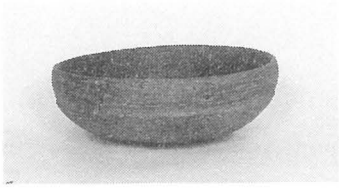


写真117　1住－1

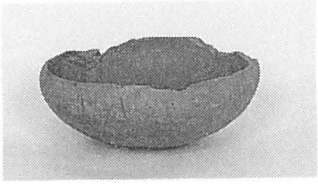


写真118　1住－2

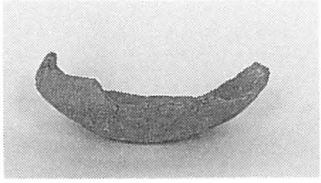


写真119　1住－3

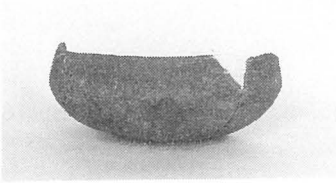


写真120　1住－4

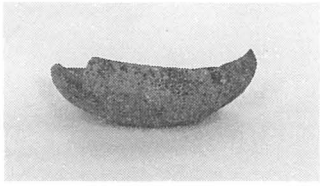


写真121　1住－5

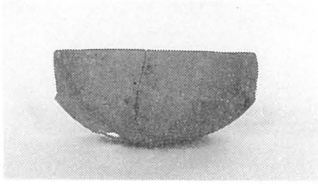


写真122　1住－6

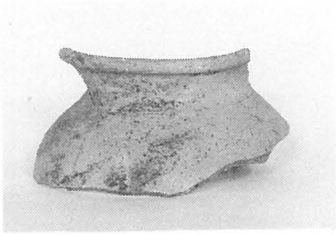


写真123　1住－8

写真125　1住－10

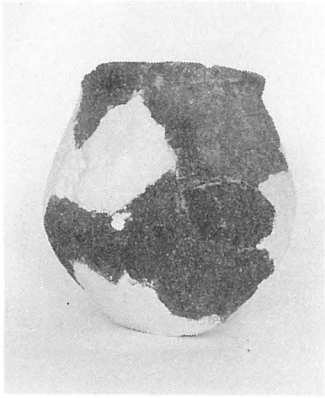


写真126　1住－11

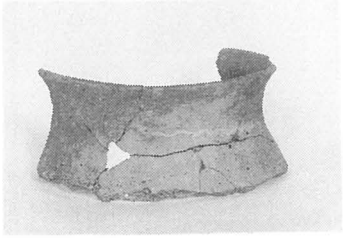


写真124　1住－9

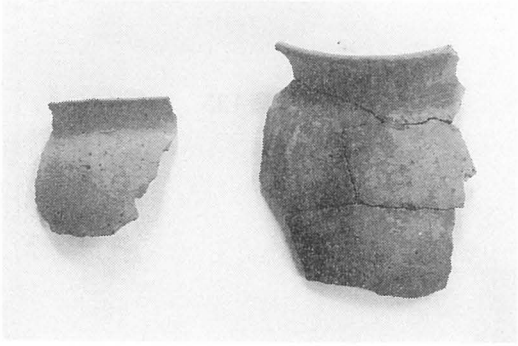


写真127　1住－7・12

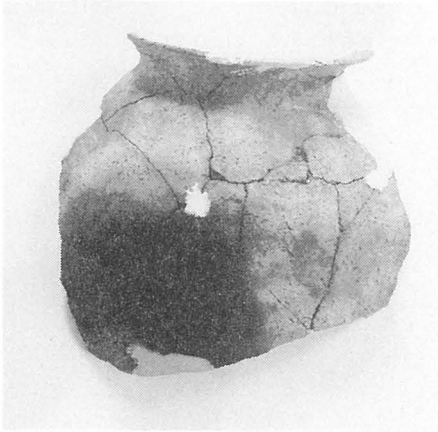


写真128　1住－13

写真129
1住－14・15・16

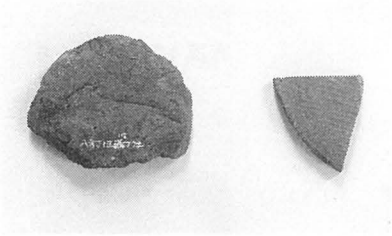


写真130
1住－17・18

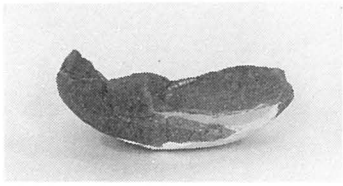


写真131　2住－1

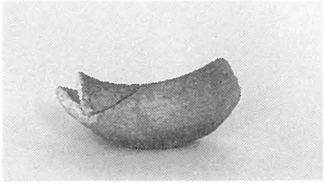


写真132　2住－3

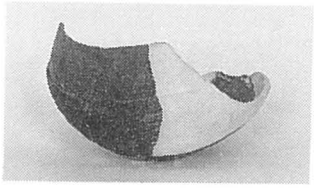


写真133　2住－4

写真134　2住－2・5

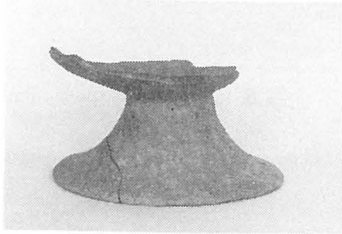


写真135　2住－6

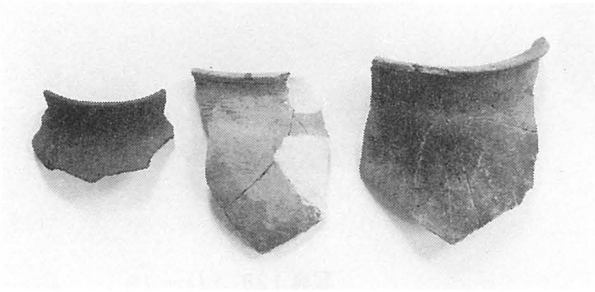


写真136
2住－7・8・9

写真137　2住－10

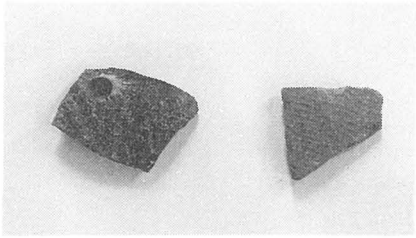


写真138　2住－11・12

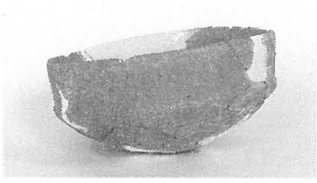


写真139　円形有段－1

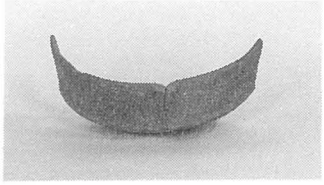


写真140　円形有段－2

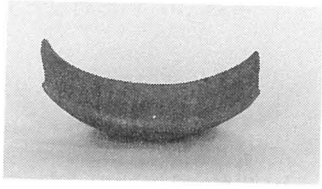


写真141　円形有段－3

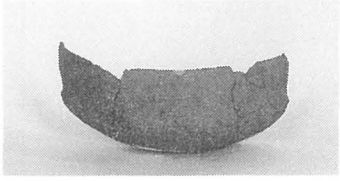


写真142　円形有段－4

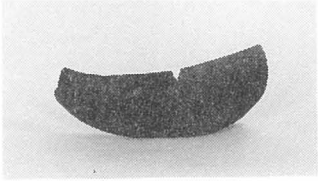


写真143　円形有段－5

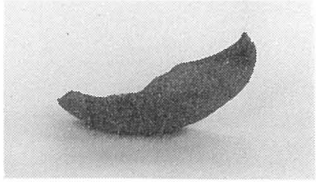


写真144　円形有段－6

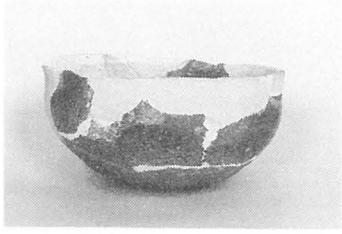


写真145　円形有段－7

写真146　円形有段－8

写真147　円形有段－9

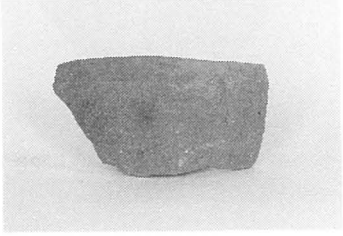


写真148　円形有段－10

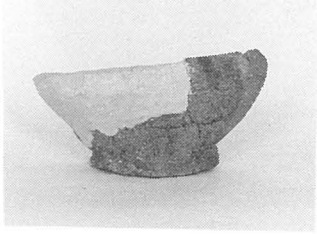


写真149　円形有段－11

写真150　円形有段－12

写真151　円形有段－13

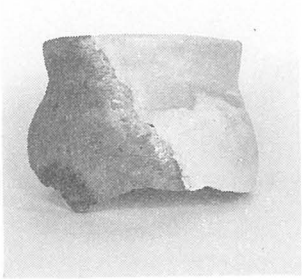


写真152　円形有段－14

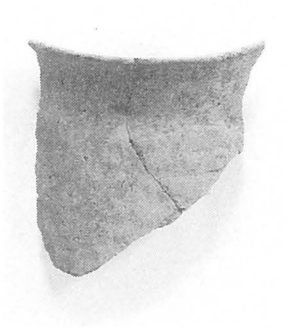


写真153　円形有段－15

写真154　円形有段－17

写真155　円形有段－18

写真156　円形有段－19・21

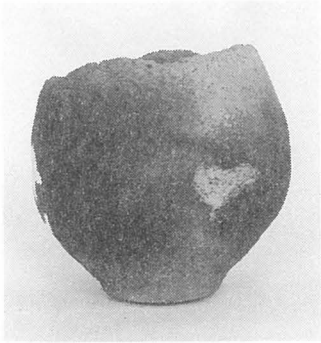


写真157　円形有段－20

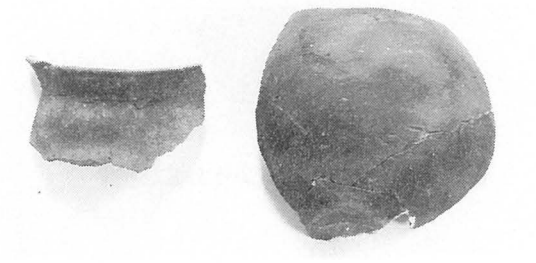


写真158　円形有段－16・22

写真159　円形有段－23

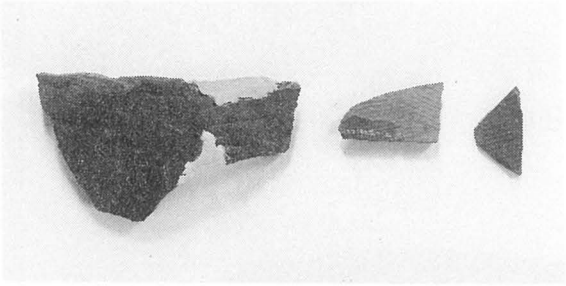


写真160　円形有段－24・25・26

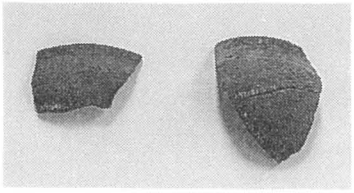


写真161　土坑－1・2（2号土坑）

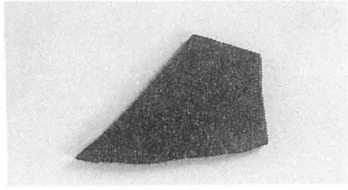


写真162　土坑－5（2号土坑）

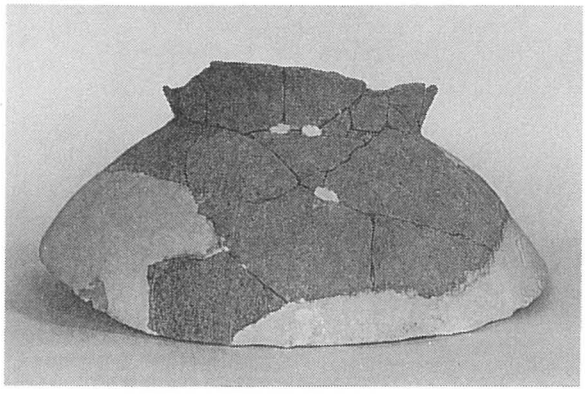


写真163　土坑－3（2号土坑）

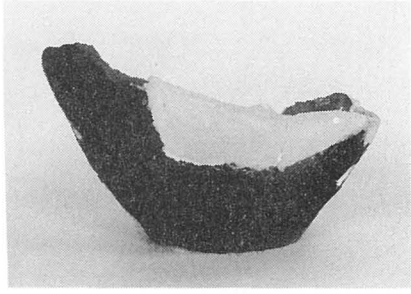


写真164　土坑－4（2号土坑）

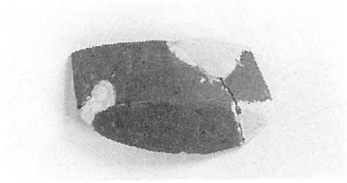


写真165　土坑－6（4号土坑）

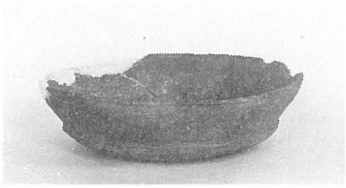


写真166　土坑－7（9号土坑）

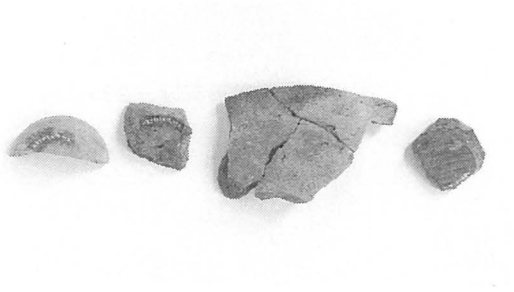


写真167　土坑－8・9・10・11（10号土坑）

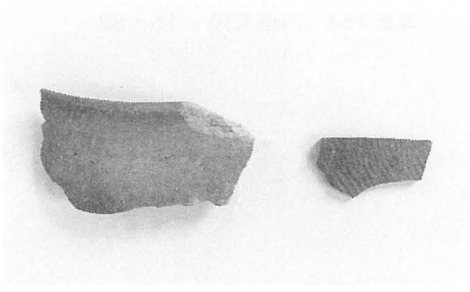


写真168　土坑－12・13（5号井戸）

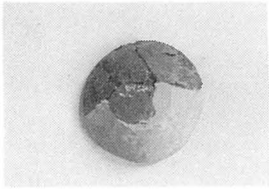


写真169　1号溝－1

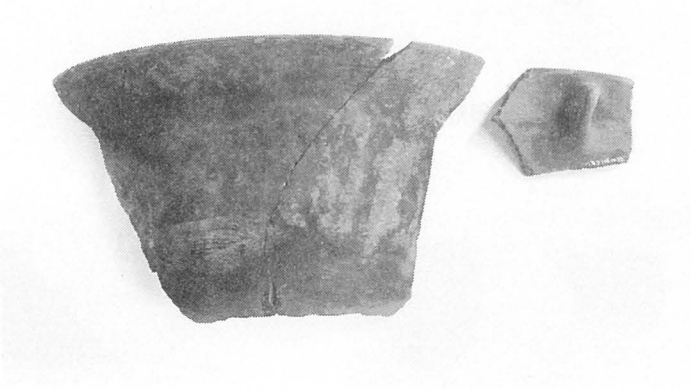


写真170　1号溝－2・5

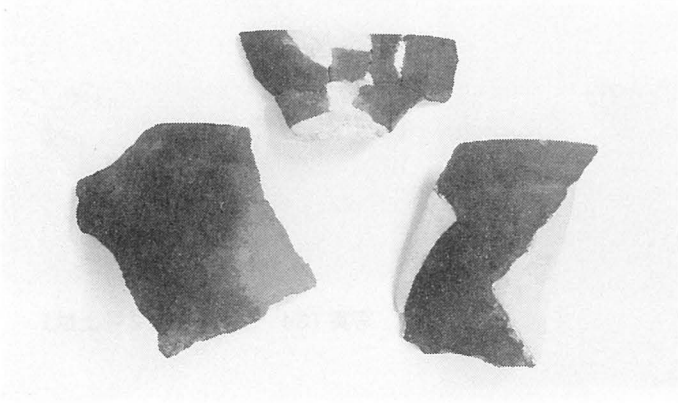


写真171　1号溝－3・4・6

写真172　1号溝－7

写真173　1号溝－8

写真174　1号溝－9

写真175　遺構外－1・2・3

写真176　遺構外－4

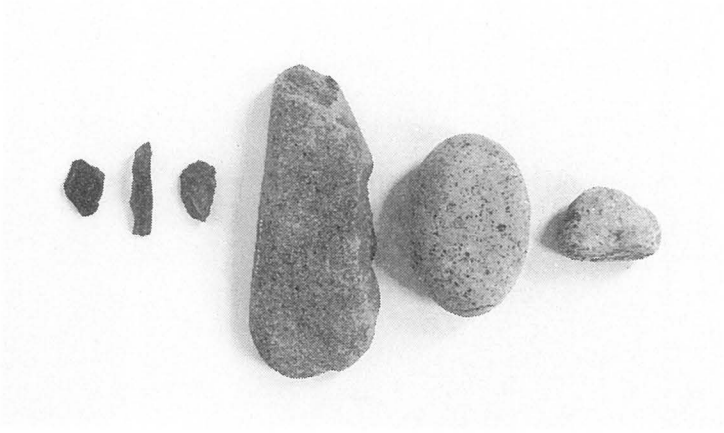


写真177
石器・その他－1～6
（石器）

写真178　石器・その他－7～10（縄文土器他）

第V章　まとめ

1. 円形有段遺構の性格について

本遺跡のJ地点より検出された円形有段遺構（1号土坑）は、本市における発掘調査のなかで初めての検出例である。その規模が、直径4.5m、深さ1.6mのかなりの大型遺構であり、掘り込む作業労力は相当量と判断されることから、集落内の共同で使用された施設であると考えられる。しかし、その使用目的を確定する要素が乏しく、遺構の性格を明らかにすることができない。こうしたことから、周辺の他地域での調査例を参考に、本遺構の問題点を抽出し、遺構の性格を考察していきたい。

このような大型の円形遺構は、その規模や構造にいくつかの種類が見られるが、県内や栃木県内をはじめとして、近県における類似遺構の調査例は少なくない。県内では、赤城山麓の前橋市柳久保遺跡（『柳久保遺跡群Ⅶ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988）や粕川村白藤古墳群（『白藤古墳群』粕川村教育委員会 1989）などの報告例があり、さらに栃木県内では宇都宮市とその周辺の遺跡17件から報告例がある（中山晋『古代日本の「氷室」の実体－栃木県下の例を中心として－』「立正史学」第79号 1996）。これらの調査例を見ると類似遺構の性格付けは、井戸址・貯蔵穴・祭祀遺構・墓壙・塵芥処理穴など様々である。中でも井戸址とする報告例が一般的である。

しかし、本遺構の深さ（確認面から1.6m）では地下水が出る深さではないことや、同じ調査地点において、時期は確定できないものの13基の井戸址（直径1.5m前後の土坑）が検出されていることから、規模や構造が全く異なる本遺構を井戸址と確定することは難しい。

本遺構の特色を挙げると、底面に凹みが設けられ、少量の自然石が出土していること。遺物の量は覆土中の中層部分に集中し、古墳時代後期の土師器坏・甕が中心で、同時期の住居址から出土する遺物量より多いこと。遺構の中位に焼土と炭化物の一部が検出されていることなどが挙げられる。

これらの特色を備えた類似遺構を集約し考察した研究の中で、近年、栃木県内の類例から中山晋氏によって興味深い報告がされている（中山氏前掲論文）。中山氏の報告では、底面の凹みが排水を目的にしていることと、宇都宮市の上横田A遺跡から検出された遺構内の覆土の珪藻分析を行った結果、底面からわずかに水生珪藻が検出されたことから、遺構の中に収められていた内容物が「氷」で、底面の凹みは氷が解けた時の排水が目的で、その際に解けた水の中に水生珪藻が混入していたためであろうと推定し、本遺跡の性格付けを「氷室」と想定している。さらに、中山氏は『日本書紀』に書かれた「氷室」の記述に着目している。

しかし、本遺跡から検出された遺構が「氷室」として推定するには要素が乏しいものの、「氷室」が、これまで推定されていた井戸址・貯蔵穴・祭祀遺構・墓壙・塵芥処理穴などの性格付けに新たに加わるものとして注目したい。

本遺構は集落内における共同施設としての役割を果たしているものの、その性格付けは今後さらなる類似遺構の調査報告を待って考察していきたい。

なお、平成8年度に本市岡野町の大道北遺跡の調査において、直径2.3m、深さ1.1mの底面の広い擂鉢状の円形遺構が検出されているが、底面に階段状の構造が残されていること、湧水が多く、調査に困難をきたしたことから、井戸址と推定した（『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第30集　館林市内遺跡発掘調査報告書』館林市教育委員会 1997）。

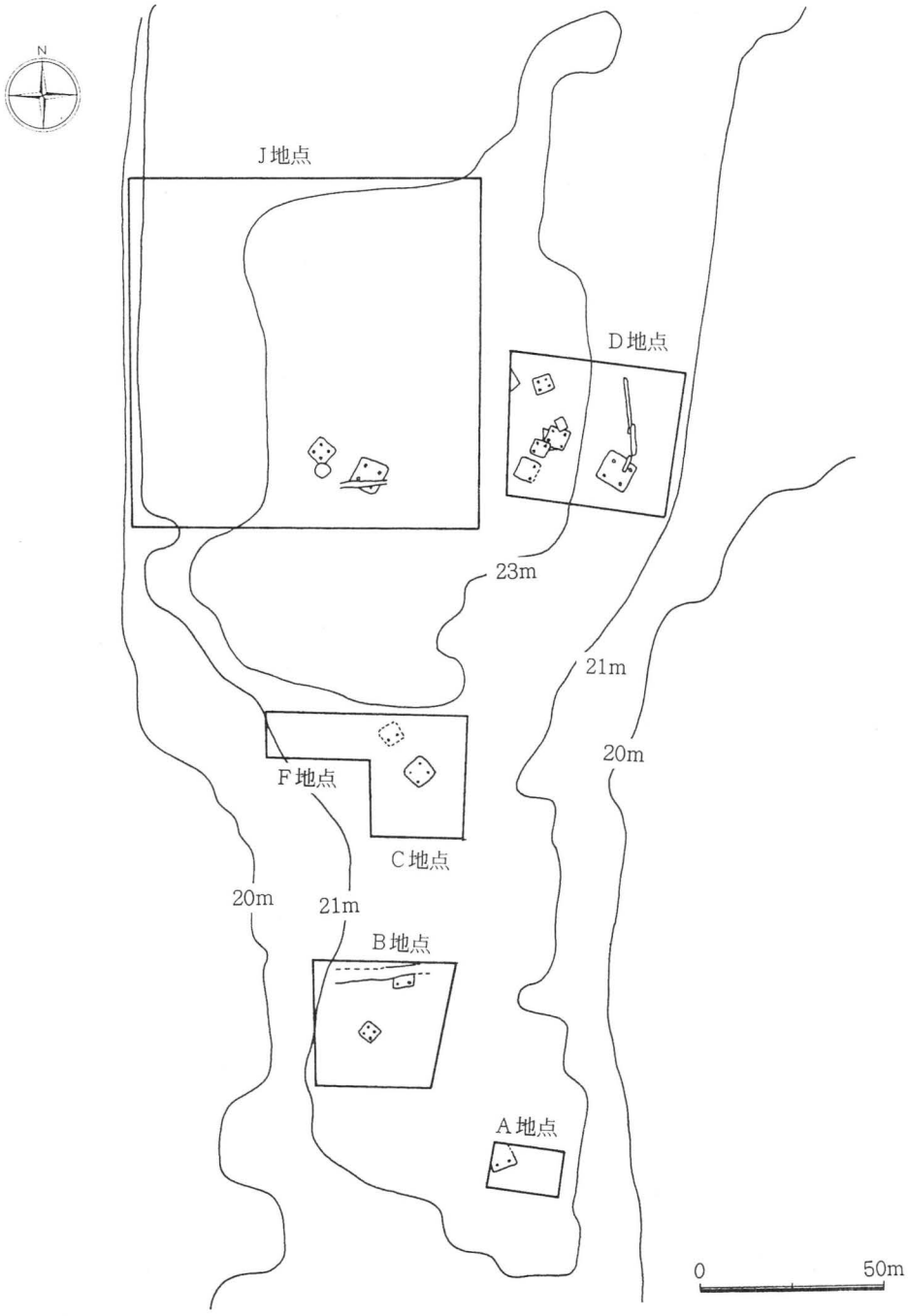
2. 八方遺跡の性格と時代変遷

本遺跡は、昭和57年より調査を開始し、J地点の調査が10地点目にあたる。これまでの調査で検出された遺構のうち、住居址が15軒で、そのうち時期が確定できたものは、古墳時代中期が2軒、古墳時代後期が12軒であった。さらに、住居址以外の同時期の遺構として、共同施設として位置付けられる円形有段遺構や炭化米が検出された特殊遺構なども検出されている。住居址とともに、こうした特殊な遺構が検出されたことから、八方遺跡が集落址としての要素を充分に兼ね備えていることがうかがえる。特に、検出された遺構が集中しているのが、本遺跡の中央部から南にかけての台地上で、円形有段遺構や特殊遺構が検出されたD・J地点付近に集落の中心があったことがうかがえる。

さらに本遺跡で注目されることは、中世の遺物を共伴し、東西方向に走る溝状遺構が南部分（B地点）と中央部分（J地点）から検出されていることである。これまでの城館址調査では本遺跡は該当していないが、検出されたこれらの溝は、城館址等の環濠の一部の可能性も考えられる。なお、嘉暦3年（1328）の「三善貞広寄進状及び寺領注文」（長楽寺文書）の中に、佐貫庄高根郷（現館林市高根町付近）の弘願寺の寺領の一つに「佐貫庄鉢形郷」という記述があることから、本遺跡と「鉢形郷」の係わりも今後の研究課題といえる。

また、本遺跡からは遺構は検出されていないものの、広範囲で縄文時代の石器や土器類も多く出土していることから、本遺跡は縄文時代から人々の生活が営まれ、特に古墳時代後期には集落としての「ムラ」が形成され、さらに中世に至っては、住居を想定させる遺構は検出されていないものの、溝状遺構の検出や中世の遺物も多く出土していることから、中世の集落形態も予想され、本市における集落址を研究する上で注目すべき遺跡であるといえよう。

なお、本稿をまとめるにあたり、中山晋・小島敦子の各氏よりご意見を賜った。記して感謝する次第である。



第69図　八方遺跡検出遺構全体配置図

■参考文献

館林市教育委員会　『館林市埋蔵文化財調査報告書』第1集～第30集

館林市　『館林市誌　歴史編』(1969)

群馬県教育委員会　『群馬県遺跡台帳　東毛編』(1971)

群馬県林務部　『群馬県の貴重な自然　地形・地質編』(1990)

群馬県　『群馬県史　資料編2 原始・古代2 弥生・土師』(1986)

㈱小川屋　『八方遺跡発掘調査報告書』(1983)

前橋市埋蔵文化財発掘調査団　『柳久保遺跡群Ⅶ』(1988)

粕川村教育委員会　『白藤古墳群』(1989)

中山晋　『古代日本の「氷室」の実体―栃木県下の例を中心として―』「立正史学」第79号(1996)

報告書抄録

ふりがな	はちがたいせき
書名	八方遺跡
副書名	――――
巻次	――――
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第31集
編集者名	岡屋紀子
編集機関	館林市教育委員会
所在地	〒374－0018 群馬県館林市城町1－1
発行年月日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はちがたでいちてん 八方D地点	さかしたちょうあざはちがた 坂下町字八形	1207	18	－	－	1985 1985	1751.6	共同住宅
はちがたえふちてん 八方F地点	おかのちょうあざはちがた 岡野町字八方	1207	18	－	－	1985 1985	350	共同住宅
はちがたじぇいちてん 八方J地点	おかのちょうあざはちがた 岡野町字八方	1207	18	－	－	1996 1996	8823.1	住宅団地

遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八方D地点	集落址	古墳	住居　8軒 溝　3条	古墳時代後期の土師器坏・甕等	
八方F地点	集落址	古墳	住居　1軒 井戸　3基	古墳時代後期の土師器坏・甕等	
八方J地点	集落址	古墳～中世	住居　2軒 土坑　10基 溝　1条	古墳時代後期の土師器坏・甕等	

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第31集

八方遺跡（はちがたいせき）

発　行　館林市教育委員会文化振興課
〒374-0018 群馬県館林市城町3-1
TEL 0276－74－4111

印刷所　山崎印刷
発行年月日　平成10年3月31日